
剣の統べる国

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の統べる国

【Nコード】

N2068Q

【作者名】

山口

【あらすじ】

剣道の強豪校で主将を努める竜也。彼が放り込まれたのは、「力が正義」という考えがまかり通る凄まじい国だった。

異世界への旅立ち

> i 1 6 8 8 2 — 9 2 4 <

雲一つない晴天の下に広がる大草原。そこに一人の青年が寝転がっていた。

名前は轟竜也という。今年で十六歳。身長は百八十センチ、体重は七十五キロ。引きしまった体の持ち主であり、高校の剣道部で主将を努めている。

彼はしばらく眠っていたが、やがて目を覚まし起き上がった。

「……あれ？」

周囲に広がる光景は、寝る前に見たものとまるで違っている。今日は剣道部の午後練を終え、帰宅して自分の部屋のベッドで寝ていたはずだ。こんなところにいるのはどう考えてもおかしい。

「あー、なるほどね」

竜也はそう言いながらうなずく。これは夢に違いない。そこで、一発自分の顔面を殴ってみた。

「いつて！」

おかしい、普通に痛みを感じる。これはどういふことなんだろう。「まあきつと、夢で痛みを感じることもあるんだろう。せつかくだから少し歩いてみるかな」

彼はそう思いながら一歩踏み出して、ぎょつとした。草を踏みしめる感覚がちゃんとあるのだ。

「ちょ、マジかよ。リアルな夢だなあ」

とりあえず歩き始めたのはいいが、どこへ行ったらいいやらわからない。

それにしても、靴くらい履かせてほしいものだ。身につけているものと言えばTシャツにハーフパンツ、トランクスだけ。靴どころか靴下すら履いていない。これで尖ったものでも踏んだら、ひどい

目にあいそうな気がする。

「俺の夢なんだからなんとかしてくれよ！」

叫んでみたが状況は変わらない。

「つまらない夢だよなあ。どうせなら豪華な食事をするとか女の子にモテまくるとかさあ……」

いくらぼやいてみても意味はなさそうだ。仕方がないので歩いてみると、だんだんお腹が減ってきた。

「これ、本当に夢かよ……」

困ったことに、食べるものなど何一つ見当たらない。前方には見渡す限りの草原。右を見ても左を見ても同じだ。ただ、後方には深い森が広がっている。あそこに行けば木の实くらいにはありつけるかもしれない。

「行ってみるか」

彼は森に向かって歩きだした。さつさと夢から覚めてくれれば一番だが、その気配はない。ならば行動あるのみだ。

暖かい日差しがなんと心地よい。竜也は大声で歌いだした。周りには誰もいないし迷惑にはならないだろう。

「かわいい彼女がほっしいよー、ほっしいよー、ほっしいよー」

ちなみにこの歌は彼が作ったものだ。作詞作曲の才能ゼロ、おまけに凄まじい音痴。彼女いない歴〃年齢でもある。

「どーこかに彼女はー落ちてないかなー」

歌いながら歩き続けると、やがて森に着いた。空は晴れているのに森の中は薄暗い。危険な獣の一匹や二匹、住んでいそうな雰囲気だ。

「げっ……」

竜也は面くらいながらも、草を踏みしめながら入っていった。どうせ夢だし、何かに襲われたところで死ぬわけでもない。それなら怖れることもないだろう。

それにしても薄暗い。鬱蒼と茂った木々の葉が日光を遮っているのだ。草が一切刈られておらず、しかも裸足なので歩きにくいこと

この上ない。

「こういうのを、本当の森って言うんだらうなあ」

ビルが建ち並ぶ都会に住んでいた竜也にとつて、こんなところを歩くのは新鮮だ。今までに森を歩いたこともあるが、そこにはきちんと道が造られていた。草が生い茂った場所に素足で踏み込むなんてことは、生まれてこのかたやったことがない。

「いつて！」

植物のトゲに引っ掛けたらしく、足から血が出ている。このときになって、ようやく彼は疑問を抱いた。

「もしかしてこれ、現実なのか？」

夢の中には、現実なのではないかと思わせるほどリアルなものもある。しかし、それにしても度を越しているのではないだろうか。

目の前に広がる薄暗い森、木々の葉が風に揺れて触れ合う音、草を踏みしめる感覚。今まで見た夢はいくらリアルであつても、どこかにぼやつとした部分があつた。しかし今は違う。限りなく鮮明な光景と音、それに感覚。ぼやけた部分など何一つない。

「ガチでやばいよ！」

こんなことなら、最初いた場所から動かなければよかった。自分は何んらかの方法でこの世界に転送されたのだ。たぶん、元いた部屋とあの草原をつなぐトンネル……もしくは空間の歪みのようなものがあつたはずである。すぐにそこに入って引き返せば日本に帰れたかもしれない。

「うわああ、俺の馬鹿！ どうすんだよ！」

もはや戻ることはできない。森を歩いているうちに、どつちから来たのかわからなくなってしまったからだ。

まずい、とにかくまずい。それはさておき、腹ごしらえをする必要がある。日本へ帰る方法を考える時間はあるけれど、空腹は待たてられない。

「うーん、まいったなあ。なんか木の实とか……」

つぶやいた瞬間、頭上でガサガサという音がした。何かいる。お

そるおそる見上げると、木の上にいる黒豹と目が合った。

「ぎゃああああああああああああああー！」

竜也は一目散に逃げ出した。あんな猛獣に襲われたら終わりだ。

しかし、豹は素早く木から降り追いかけてくる。駄目だ、逃げきれない。

「くそっ！」

竜也は覚悟を決めた。こうなったら戦うまでだ。基本的に動物は好きだが、そんなことを言ってる場合ではない。この野獣は自分を殺そうとしている。それなら容赦する必要もないだろう。

近くに落ちている木の棒を拾おうとした瞬間、豹が跳びかかってきた。その鋭い牙が肩に突き刺さる。

「ぐっっ！」

すかさず目を指で突くと、野獣は悲鳴を上げて跳び下がった。今度は遠巻きにしながら隙をうかがっている。

それにしても大きい。体長は二メートル近くありそうだ。こんな敵と素手で戦って勝てる見込みはない。竜也は素早く木の棒を拾って突きつけた。長さ一メートルにも満たないものだが、丸腰よりはまだまだだ。

「来いよ！」

にらみつけると、向こうもこっちを見ながら牙をむいた。その威圧感に吞まれそうになる。

竜也の心に迷いが生じたとき、豹は跳びかかった。鋭い牙の一撃が襲う。

「くっ！」

体を翻してかわすと、野獣は左腕に噛みついた。途端に激痛が走る。

並の人間がこんな敵に襲われたら、心が折れてしまつかもしれない。しかし、竜也は違う。類稀なる精神力と強靱な肉体を持っている。毎年全国大会に出場して上位に食い込むような強豪校で主将を努めることができるのも、それらによるところが大きい。

「……の野郎、なめんじゃねえ！」

彼は右手で木の棒を振りかざし、渾身の力で黒豹の目を突き刺した。

「グギャツ！」

野獣が驚いて跳びのいたところに追い打ちがかかる。竜也の鋭い突きが豹の口の中を直撃した。

相手が悲鳴を上げて後退すると、踏み込んで蹴り飛ばす。さらに距離を詰めて首ねっこをつかみ、顔面に膝蹴りを叩き込む。間髪入れずに連続で殴りつけたところ、遂に黒豹は逃げだした。これはかなわないと判断したのだ。

竜也は相手が完全にいなくなるまで、じつと木の棒を構えてにらみつけていた。

「はあ、ひどい目にあつた」

敵がいなくなったのはいいが、肩から出血している。こんな見知らぬ森の中で怪我をしたまま歩いていれば、いずれ野獣の餌になるだけだ。なんとかしなければならぬ。とは言え、現時点で打開策は一つもないときている。

「うーん、どうすつかなあ」

思案を巡らせていたそのとき、近くの茂みからガサガサと音がした。どうやら、また何か現れたらしい。彼の体に緊張が走った。

神速の少女

こんな森の中にいるのは、おそらく獣か原住民だろう。どちらにしろ自分の味方をしてくれるとは思えない。竜也は棒を握りしめて身構えた。

周囲の茂みから次々と音がする。どうやら敵は複数らしい。勝ち目があるとも思えないが、それはそれとして相手の正体を見極めておきたいところだ。

しばらくじっとしていると、彼らは姿を現した。全身まっ茶色の肌をした男たちである。腰から下に大量の葉っぱをくっつけている他、何も身につけていない。持っている武器は先の尖った木の棒だ。竜也は素早く視線を走らせた。敵は全部で五人、しかも完全に自分を包囲している。一様に棒を突きつけてくるところを見ると、友好的な感情など持ち合わせていないらしい。まあそれは想定内であるとして、問題はどうかやって包囲から脱出するかだ。

考えている暇はなかった。一人がいきなり突きかかってきたのである。

竜也は回転してこれをかわし、反撃しようとした。しかし、そこに他の一人が襲いかかってきてできない。なんとか攻撃を避けたものの、もう限界だった。残る三人が一斉に突きかかってきたのだ。

「ちっ！」

彼はすかさず後退し、近くにいた男を蹴り倒して逃げだした。足の速さには自信がある。茂った草を踏み潰しながら全力疾走した。だが振り切れない。さすが原住民といったところだ。

「くっ、こいつら！」

竜也は踏みとどまって棒を構え、先頭を走っている男性の腹に突きを見舞った。それは見事に命中し、相手は悶絶しながら倒れ込む。

「よし、まず一人！」

再び全力で逃げだすと、彼らはひるまず追跡してくる。逃がす気

はまったくくないようだ。やがてその中の一人が竜也を間合いに捕らえ、鋭い突きを繰り出した。しかし、彼は横に跳躍してかわしている。

「そんなもんで俺を倒せると思うなよ！」

竜也はすかさず相手を突き倒し、さらに逃走した。追ってくるのは三人だ。

「だあああ、しつげえええ！」

今度は全員がまとまって向かってくる。一人を狙えば残った二人にやられるだろう。これでは手が出せない。竜也は必死で走り続けた。

やがて、開けた場所に出た。視線の向こうにたき火が見え、その前に一人の少女が座っている。後ろで束ねた赤紫のロングヘアに青色の瞳、白い肌。白く輝く鎧を身につけており、腰に長剣を佩いている。歳は十六、七といったところだ。竜也は思わず叫んだ。

「おい、逃げる！ 野蛮人が襲ってくるぞ！」

少女は無言で立ち上がり細身の剣を抜いた。どうやら戦うつもりらしい。竜也は仕方なく立ち止まった。彼女を巻き込むわけにはいかない。ならば一人で連中を片付けるしかないだろう。

彼は棒を振りかざして怒鳴った。

「来い！」

途端に全員が突きかかってくる。竜也は後退してかわし、間髪入れずに踏み込んで一人の顔面に突きを放った。

「ギヤアツ！」

男が悲鳴を上げると同時に、残る二人が襲いかかってくる。

「くっ、この……！」

竜也が反撃しようとした瞬間、目の前を閃光が走った。よく見ると、二人の原住民が血を噴いて倒れている。さっきの少女が叩き斬ったのだ。一瞬の早業だった。

「あ、あれっ？」

呆然としているうちに彼女が近づいてきた。その手には血に濡れ

た剣が握られている。どうやら助けてくれたようだ。竜也は笑みを浮かべて話しかけた。

「助かったよ、ありがとう」

彼女は無反応だ。日本語は通じないらしい。

「そうか、そうだよね……ドゥーユースピーク・イングリッシュ？」
少女は首をかしげている。英語も通じないようだ。竜也は困り果ててしまった。残念ながら日本語と英語しか使えない。

こうなったら身振り手振りでなんとかしよう。彼はそう考え、自分を指さして言った。

「トドロキ・リュウヤ」

彼女は目をしばたいたいている。竜也は再び自分を指さして叫んだ。

「リュウヤ！ リュウヤ！」

「……リュウヤ？」

澄んだ高い声が耳をくすぐる。

「そう、リュウヤ。リュウヤだよ！」

「リュウヤ……リュウヤ」

少女は何度ももうなずいた。どうやら通じたらしい。

「君の名前は？」

たずねると、今度は彼女が自分を指さして言った。

「アイリーン・ライエル・ヴァン・レクスタード」

「な、長っ……」

「アイリーン・ライエル・ヴァン・レクスタード」

「ア、アイリーン……ライス・パン・カスタード？」

彼女はふつとため息をつき、踵を返して歩きだした。もはや竜也には目もくれない。

「ちょ、待てよ！ 待ってくれ！」

彼はあわてて追いつがった。助けてもらったのに礼の一つもしていない。このまま別れたら恩知らずにも程がある。

「アイリーン、待てったら！」

叫んだ途端、彼女はちらりと振り向いた。その端正な顔には笑顔

のかけらもない。唇をきつく結び、「私は誰も信じない」と言わんばかりだ。

「アイリーン、俺はあんたに助けられた。この借りを返さずに別れるのは心苦しい。一緒につれてってくれないかな？」

彼女は無言でこちらを見つめている。一方、竜也はその美しさに今さらながら驚嘆していた。はつきりした目鼻立ちに整った輪郭、すらりと伸びた手足。赤紫の髪に透き通るような白い肌。さらに、青紫の瞳が静かな光をたたえている。

何か言ってくれるかと思ったのに、彼女は無言のまま視線を反らし歩いていく。

こうなったら仕方ない。竜也は黙ってついていくことにした。

森林を抜けて

彼女はほとんど森の中を進んでいく。竜也はその健脚ぶりに驚きつつもひたすら後を追った。

まるで構ってくれないのが悲しいところだ。しかし、いつか風向きも変わるだろう。それを信じてついていくことにした。

アイリーンは途中で木の実を払い落として食べたり、小川の水を飲んだりして空腹をしのいでいる。竜也もそれに習った。不思議で仕方ないのは、可憐な少女がたった一人でこんな森を歩いていることだ。長つたらしい名前や身なりから察するに、身分の低い人間とも思えない。

彼女の鎧はかなり手の込んだ代物だ。薄い金属で作られ、真っ白に着色されている。しかも金で縁取りされており、背中には赤い薔薇の紋章が刻まれているのだ。この国の生活水準は知らないが、少なくとも一般庶民が身につけるものには見えない。

しばらく歩き続けると、彼女が振り向いて話しかけてきた。だが、何を言っているのかさっぱり理解できない。竜也はその表情や仕種を見て判断することにした。

特に怒気も発していなければ、嫌悪の情をあらわにしている様子もない。おそらくこう言っているのだろう。

「どうしてついてくるの？」

竜也は自分の腕に力こぶを作って指さした。

「君の力になりたいんだ」

彼女はきよとんとしながらこちらを見つめた。何も問いかけたくないところを見ると、話が通じたのかもしれない。

「助けてもらった借りは返すよ」

そう言っただけ右手を差し出したが無反応だった。まあ仕方がない。初対面の男性を信用しろという方が無理な話だ。

アイリーンは再び歩き始め、竜也もその横に立って歩きだした。

しばらく進むと視界が開け、広々とした草原に出た。前方に城壁が見える。城なのか砦なのかは不明だが、少なくとも人が築いたものであることは間違いない。竜也は思わず叫んだ。

「うおお、城だ！ 城が見える！」

これでようやく一息つける。獣や野蛮人が出没する危険な森とはおさらばだ。喜びまくっている竜也を見て、彼女がくすつと笑った。さらに続けて何か言ったが、相変わらず言葉が通じない。

やがて、彼女は城壁を目指して歩きだした。竜也もそれに続く。この先どうなるやらさっぱりわからないが、少なくとも森の中で猛獣と戦うのよりはマシなはずだ。

「いや、待てよ。不審人物として捕らえられて牢屋にぶち込まれるってパターンもありだな。弁解しようにも言葉が通じないし」

ぶつぶつ言っているうちに、アイリーンはどんどん先へ行ってしまう。彼はあわてて後を追った。

城壁の表面は石で造られており、高さは三階建ての建物に匹敵する。幅は相当なもので、いくら目をこらしても端が見えない。

「なんだこりゃ、万里の長城かよ！」

叫んでいるうちに、アイリーンが城門に向かって歩いていく。すると城壁の上に、鎧と兜を着けた男性が現れて叫んだ。やはり何を言っているのかわからない。

二人が何度か言葉を交わすと、やがて城門が開いた。先の尖った格子戸がガラガラと音を立てて上がっていく。入れということらしい。彼女は無言で城へ入っていき、竜也もそれに続いた。

「あれ？ あれれれ？」

どうも、城や砦の類ではない。

地面は石畳で、目の前には目抜き通りがあり、両側には商店が軒をつらねている。それらは赤いレンガで造られており二階建てや三階建てがほとんどだ。商店の他には集合住宅らしき建物が並んでいる。ここは城壁に囲まれた城塞都市であるらしい。

店先では食料品や衣料品、雑貨などが売られている。果物や野菜は見慣れないものばかりだが他はそうでもない。焼いた肉、野菜の炒め物、パンやチーズなど見慣れたものばかりだ。

「ああ、よかった。普通だよ」

それはいいが買う金がない。物ほしそくに食料品を眺めていると、アイリーンが苦笑しながらパンを買ってくれた。どうやらまた借りを作ってしまったようだ。

「ありがとう、アイリーン」

笑顔で言うと彼女は首を振った。礼を言っているのが伝わったらしい。おごってもらったのは申し訳ない限りだが、気持ちを通じたのは嬉しかった。

パンをかじってみたところ、ほんのりとニンニクの味がしてなかなかうまい。フランスパン並の固さがあり少々食べにくいのが、竜也は夢中でほお張った。この世界に来てから腹にたまるものを何一口にしていなかったからだ。

「パンが……むぐっ、こんなにうまいものだとは……げほっ、ごほっ」

むせている竜也を見てアイリーンが微笑んだそのとき。

二人はいつの間にか包囲されていた。鉄兜をかぶり鎖かたびらを着込んだ男たちが、剣を構えて立っている。その数はざっと八人。

彼らの中の一人が何やら叫ぶと、他の七人がじりじりと間合いを詰めてきた。このままではやられる。

「アイリーン、早くも借りを返すときが来たみたいだな」

竜也はそう言いながら男たちをにらみつけた。彼女もすかさず剣を抜いて敵を見据える。一触即発の空気がその場を包み込んだ。

竜也の奮戦

竜也は、剣士たちの視線がアイリーンに向けられていることがついた。最初は自分たち二人を狙ってきたのかと思ったが、どうやらターゲットは彼女だけらしい。

「アイリーン、逃げろ！」

竜也は叫ぶと同時に、近くの一人に体当たりして剣を奪い取った。一瞬の早業だ。彼らは驚き、こちらに視線を向けている。

「早く！」

竜也は追い払うように手を振った。彼女は剣を握りしめたまま躊躇している。

「何してるんだ、行け！」

激しく手を振ると、アイリーンは正面の男を斬りつけて逃げ出した。剣士たちが追おうとしたが竜也はそれを許さない。地を蹴って疾走し、追いつがろうとした男の太ももをざっくりと斬りつけた。

「グアアアッ！」

他の男たちが剣を振りかざしてこちらに向かってくる。逃げたいところだが、今はアイリーンのために時間を稼がなくてはならない。竜也も剣を構えて彼らを見据えた。

男たちは鉄の兜によって頭部と顔の側面を保護されている他、鎖かたびらで胸から腰にかけて守られている。まともな防具はそれだけで、後は革の手袋やロングブーツといった類だ。竜也から見れば狙える場所はいくらでもある。

二人の剣士が左右から間合いを詰め、一斉に斬りかかってきた。

「リヤアアッ！」

「ウオオッ！」

しかし、竜也には通じない。彼は右の男に向かって突進し、薙ぎ払いつつ走り抜けた。斬られた男は右腕を押さえて屈み込む。その間に竜也は包囲を抜けている。

彼らは驚愕し、顔を歪めた。たった一人の若者に八人の剣士が翻弄されているのだ。もつとも竜也にしてみれば、そう難しい話でもなかった。この男たちの技量は自分に比べてはるかに劣る。しかも統制が取れていない。彼自身が指揮官だったならこうも簡単に包囲を突破されることはなかったはずだ。

それでも男たちは気を取り直し、剣を構えて斬りかかってくる。竜也は一人の剣を叩き落とし、他の一人の腕を斬りつけ、さらに踏み込んでもう一人の顔面を突き刺した。直後に斬撃が殺到したが後退してかわしている。引き際に相手の太もを薙ぎ払うことも忘れない。

剣士たちは、自分たちの力で彼を倒すのは不可能であることを悟った。あまりにも強すぎる。一方、竜也も最後まで戦う気はない。アイリーンの姿はもう見えないし、適当に切り上げて逃げるつもりだった。しかし不幸なことに、騒ぎを聞いた他の剣士たちが駆けつけてきてしまったのだ。敵の数は既に二十人を超えている。

「ちっ……」

絶望的な状況に置かれながらも、彼はあきらめなかった。縦横無尽に剣を奮い、敵の隙を見つけては走り抜ける。やがて包囲を抜けそうになったところで、一人の偉丈夫がその前に立ちはだかった。歳は三十前後。金髪碧眼、白い肌に精悍な顔をしており、金色に輝く鎧を全身に着込んでいる。武器は左右二本の長剣だ。

「邪魔だ、どけ！」

怒鳴りつけても男はひるまず、凄まじい速さで斬りかかってきた。右の剣を受け止めたものの直後に左の剣が襲ってくる。咄嗟に後退してかわしたが攻撃は止まらない。上段からの斬り下ろし、胴や足を狙った薙ぎ払い、首を狙った突きが続く。

竜也はすべてさばいたものの、反撃することができなかった。本来なら合間を縫って斬撃を浴びせているところだ。しかし疲労で限界が近い今、とてもそんな余裕はない。この世界に来てから戦い通しなのだ。いくら強靱な体を持つ彼と言えども無理だった。

気がつくくと完全に包囲され、首筋に剣を突き付けられていた。脱出失敗である。彼は剣を放りだし、その場に座り込んだ。

「好きにしる！」

竜也は後ろ手に縛られて連行された。これだけ暴れた以上ただでは済まないだろう。だが、彼は平然としていた。「もう終わりだ」などと露ほども思っていない。

剣士たちに囲まれて石畳の地面を歩いていく間、さっき戦った男性が話しかけてきた。やはり言葉は通じない。やがて彼は自分を指さして言った。

「ラグラス」

それがこの男の名前らしい。竜也も続けて口を開いた。

「竜也」

「リニューヤ？」

うなずくと、彼も深くうなずいた。彫りの深い顔は穏やかな表情を浮かべており、敵意は感じない。それなのになんで捕まえるんだよ、と言いたくなるくらいだ。

やがて、石造りの建物が見えてきた。一階建てで四角い形だ。中には廊下があり、鉄格子がついた牢屋が並んでいる。男が手招きした。入れということらしい。

鉄格子に開閉式の扉がついており、竜也はそこから中に入った。手首を縛っていた縄は男がほどいてくれている。牢屋は壁も床も灰色の石でできており、木製のベッドが置いてあった。奥にはカーテンで隠れている部分もある。たぶんトイレだろう。

やがて扉が閉まり、鍵をかけられた。こうなっては仕方がない。竜也はベッドに横になり疲れを取ることにした。

どれくらい眠っただろうか。再び目を覚まして鉄格子の間から外を見ると、ラグラスが立っていた。手にスケッチブックを持っている。

「なんだよ、おっさん。まだ何か用か？」

彼は答えず、スケッチブックを指さした。そこには剣を持った二人の男が描かれている。

「はあ？　それがなんだよ、意味わかんねーし」

命を賭けた戦い

ラグラスは無言でスケッチブックをめくった。次のページにはやはり二人の剣士が描かれていたが、前と内容が違っている。一人は剣を振り上げて喜んでおり、もう一人は血の海に沈んでいるのだ。

「二人の剣士が戦って一人は生き残り、もう一人は死んだのか。それが？」

たずねると、彼は竜也を指さした。どうも意味がわからない。

「あんたは勝ったから生き残り、俺は負けたから死ぬってわけか？」

そんなこといちいち言いくんなよ。さつさと消えろっつもの」

ラグラスは天井を指さし、次に自分を指さした。さらに床を指さし、続けて竜也を指さす。「俺は上、お前は下」と言いたいらしい。「ふざけんな。あんたがこの国でどんな地位にいるのか知らないけど、俺は元々この世界の人間じゃないんだ。上とか下とか何を根拠に決めてんだよ！」

目をむいて怒鳴りつけると、彼は再びこちらを指さした。それから天井を指さしている。

「俺に『上がってこい』と言いたいのか？」

ラグラスはにこりと笑い、無言で立ち去った。

「上がるも何も、こんな状況でどうしろっつーんだよ」

鉄格子をつかんで動かしてみたがびくともしない。部屋に窓はないし、脱出するのはおよそ不可能だ。こうなったらゆっくり休んで体力を温存するに限る。竜也はそう考え、再び寝てしまった。

しばらくすると、革の鎧を着込んだ二人の男性に叩き起こされた。どちらも長剣を手にしている。

「なんだよ……処刑でもしようつてののか？」

なんだかわからないが、どこかへつれていきたいらしい。仕方なく起き上がり彼らに従った。一人は先に立って歩き、もう一人は竜

也の首筋に剣を突きつけながら歩いていく。隙を見て脱走したいところだがどうやら無理だ。

やがて、石造りの一室に通された。そこには剣や槍、鎌や斧といった様々な武器が並べられている。先頭を歩いていた男が振り返り、竜也を見ながら武器を指さした。好きなものを選んでいいらしい。

「いいのか、俺に武器なんか渡して」

断る理由もないしありがたくもらっておこう。竜也はそう考え、鉄の剣を手を取った。長さは一メートル余り、まっすぐに伸びた直剣だ。幅は十センチ程度で、刃が両側についている。さほどの重さもなく簡単に扱えそうだ。

「じゃあ、これで」

前方の男に向かって言うと、彼は再び様々な武器を指さした。他にも選べと言いたいのだ。しかし竜也は首を振った。

多くの武器を持ったところで動きが鈍るだけの話だ。彼の最大の武器は神速の斬撃である。それがなくなってしまうたら意味がない。やがて、再び男たちにつれられて地下を歩くことになった。天井も壁も床も石できており、窓は一つもない。壁に埋め込まれた燭台のロウソクだけが周囲をぼつと照らしている。なんだか薄気味悪い。

「おい、どこへつれてくんだよ」

彼らは答えなかった。そもそも言葉が通じないのだからまともに答えようがない。

「ったく、こいつら……なんか言ったらどうだよ？ よくそんなに黙りこくってられるよな」

竜也はぶつぶつ言いながらもついていった。彼らを斬り倒して逃げたいのは山々だが、今は機会を待つ必要がある。やるなら地上に出てからの方がいい。

長い廊下を通り抜けて階段を登ると、円形の劇場に出た。いや、競技場か闘技場と言った方がいいだろう。競技用のスペースは円形で、湯いた地面の上に砂がまかれている。さらに、それをぐるりと

取り囲むように観客席が設置されているのだ。

「これは……スタジアム？ いや、コロシウム？」

視線の向こうに、巨大な金づちを持った男が見える。このとき竜也は、ラグラスが見せたスケッチブックの意味を理解した。

「あいつと剣闘試合をしるってことか。勝てば生き残り、負ければ死ぬと」

ならば負けるわけにはいかない。

闘技用のスペースに進み出ると連れの男たちがいなくなり、背後で扉が閉まる音がした。観客席はかなり巨大で、万単位の間人を収容できそうだと。そのほとんどが客で埋まっている。

「こいつら、生き死にの戦いを見て楽しもうってのか」

ヘドが出そうだった。趣味が悪いにもほどがある。それはさておき、この戦いに勝たなければ死ぬことになってしまう。竜也は剣を握りしめて歩き始めた。

前方には二十代半ばくらいの男性が立っている。獅子のたてがみを思わせる見事な金髪、引きしまった顔に日に焼けた肌、隆々とした筋肉。身に着けているのは腰布一枚だ。

武器は、柄の部分まで鉄でできた巨大な金づち。長さは一メートル以上あり、それに伴ってつちの部分もどっしりと大きい。こんなもので頭を殴られたら即死だ。

竜也は男の前に進み出ると、自分を指さして名乗った。

「竜也」

男も自分を指さして言う。

「ガルフ」

二人とも武器を構え、相手をにらみつけた。一触即発の雰囲気だ。客席から歓声上がる。

先に動いたのはガルフだった。一瞬で間合いを詰め、渾身の力を込めて金づちを振り下ろす。

「ウオオオオッ！」

竜也はすかさず後退してかわした。侮れないスピードだ。ガルフ

は間髪入れずに踏み込んで回し蹴りを放ち、それもかわされると金づちを一閃させた。

「オオオ、ラアアアアッ！」

竜也はなんとかかわしたものの、内心舌を巻いていた。こんな武器を使っているなら隙だらけだろうと思っただが、全然そんなことはない。しかも、反撃しようとするたびに先を越されてしまう。

「ガチで強いわ、こいつ」

思わずそんな言葉が口をついて出た。しかし、負けるわけにはいかないのだ。竜也は剣を握りしめ、踏み込むと同時に斬撃を放った。「喰らいやがれ！」

竜也の意地

常人の目に留まらないほどの斬撃だったが、ガルフはしつかり受け止めている。竜也はすかさず後退しつつ、引き際に相手の胸を薙ぎ払った。しかし、これも通じない。あっさりとかわされてしまう。「くっ、こいつ……」

手ごわいなどと言うレベルではない。ここまで強い敵はそうそういないだろう。剣道の全国大会で相手を難なく蹴散らしてきた自分が全力で戦っているのに、びくともしないのだ。

「いや、これも竹刀剣術と実戦の違いか……」

残念ながら、真剣を振るったことは一度もない。その点では大幅に不利だ。見たところガルフはかなり実戦慣れしている。馬鹿でかい金づちを手足のように操るのだ。彼の武器は何人、いや何十人もの血を吸っているに違いない。

冷や汗をかいていると、ガルフがまたもや殴りかかってきた。素早く体を反らしてかわしたところにミドルキックが直撃する。

「ぐっつ！」

腹を蹴られてよろけていると、顔面を殴りつけられた。一瞬、目の前が真っ暗になってしまう。

「まずい、やられる。」

竜也はくらくらしながらも必死で後ろに倒れた。頭上を金づちの一撃が通りすぎていく。さらにガルフが踏みつけようとしてきたが、転がってかわしている。

「あつぶねー」

竜也は起き上がり、すかさず距離を取った。殴られたり蹴られたりしたダメージはあるが戦えないほどではない。ただ、一方的に痛めつけられているのがムカつく。

「このままで済むと思うなよー！」

剣を構えてにらみつけると、相手も何やら言っている。もちろん

言葉は通じない。

「うおおおおおつ！」

竜也は叫ぶが速いか疾走した。その剣が閃光と化して襲いかかる。ガルフは金づちを振りかざして斬撃をさばき、素早く足払いをかけた。普通の男性なら喰らってしまつところだが、竜也の強さは並ではない。一旦後退してかわし、間髪入れずに踏み込んで突きを放つた。刃が相手の頬をかすめ、鮮血が流れ出る。

竜也はその場で足を止め、凄まじい速度で頭や胴を斬りつけまくった。ガルフも応戦する。剣と金づちがぶつかり合うこと十数回、一向に勝負がつかない。周囲から割れんばかりの歓声が聞こえてくる。

「くそつ……なんて強さだよ」

いくら斬つてもさばかれてしまふ。これでは拉致があかない。竜也は一計を案じ跳び下がった。剣は鞘の中に納めている。

ガルフは眉をひそめた。戦いの最中になぜ武器をしまふのか、彼にはさっぱりわからない。ただ、相手の戦闘能力が落ちたことは明らかだ。それなら今のうちに倒してしまおうと思ひ、金づちを構えて突進した。

そのとき、竜也がにやりと笑つたのである。ガルフは「これは罠だ」と直感し動きを鈍らせた。

竜也の目論見通りだ。彼は剣を引き抜くが早いのか、ガルフの横を一瞬で払い抜けた。普通の人間はおるか、戦闘訓練を積んだ者でさえかわせる攻撃ではない。

凄まじい金属音が響き渡つた。ガルフはかろうじて斬撃を受けたものの、金づちを弾き飛ばされてしまったのである。

丸腰になつた彼は竜也に組みつこうとしたが遅かつた。その首筋には剣を突き付けられている。これ以上の抵抗は無意味だ。

ガルフは少しも慌てず、その場に座り込んで竜也を見上げた。自分を指さし、次に親指で首を掻き切るような動作をしている。「殺せ」と言いたいのだ。

ところが、竜也は剣を引いた。ガルフは目をむいて相手をにらみつける。生き恥を晒すのはごめんだ、早く殺せ。彼の瞳はそう訴えかけているのだが、竜也は黙って首を振るばかりだ。

「もういいだろ、勝負はついたんだ。無駄に命を捨てることはないよ」

ガルフにはその言葉の意味がわからない。しかし、竜也から殺意が消えたのはわかっていった。彼は自分の命が助けられたことを知ると、がっくりと肩を落としたのである。

場内から歓声が湧き上がると同時に、二人の健闘に対する惜しめない拍手が送られた。竜也は間違ってもこんな試合は好まない。だが全力で戦い、すつきりと勝利した後の気分は悪くなかった。

しばらく余韻に浸っていると、ラグラスが数人の剣士をつれて競技用のスペースに入ってきた。笑みを浮かながら拍手をしている。竜也は目を細めて怒鳴りつけた。

「ふざけんな、早くここから出せ！ もう殺し合いはまっぴらだ！」
ラグラスは構わず、笑顔で肩を叩いてくる。それをはねのけてさらに怒鳴った。

「さわんじゃねえよ、早く俺を解放しろ！」
ラグラスは困惑した。怒っているのはわかるが、何を言っているのかさっぱりわからない。一方、竜也も言葉が通じないことに激しくイラついていた。これではいくら怒っても暖簾に腕押し、ぬかに釘打ちだ。

結局、再び男たちに連行されることになった。竜也の表情は晴れない。どうせろくな目に合わないことはわかりきっている。

しばらく廊下を歩いた後、一室に閉じ込められた。今度は牢屋ではなく普通の部屋だ。床には絨毯が敷いてあるし、ソファもあれば暖炉もある。

「なんだこりゃ、待遇がよくなったな」
首をかしげていると、ドアを開けて一人の女性が入ってきた。

美麗なるマルシア

竜也は女性に目を向けた。高校生くらいに見える。ウェーブのかった金のロングヘアに碧い瞳、白い肌。切れ長の目にすっきりした輪郭、すらりと長い手足。着ているのは緋色のチュニックと茶色のブーツで、長剣を佩いておりスケッチブックを抱えている。

彼女は竜也を見るとにっこり微笑んだ。どうやら敵意はないらしい。

それにしても美少女だ。アイリーンも相当なものだったが、彼女も決して引けを取らない。ただ、アイリーンにない狡猾さが顔ににじみ出ているのが気になる。

竜也は警戒しながらも、自分を指さして言った。

「竜也」

彼女も自分を指さして言う。

「マルシア」

この少女が何をしにきたのか竜也には測りかねた。あと、得体の知れない男性がいる部屋に一人で入ってくる神経がわからない。

話しかけてもどうせ通じないので黙っていると、マルシアは向かい合ってソファアに座った。さらにスケッチブックをめくってこちらに向け、それを指さしながら何か言っている。見ると、そこにはリンゴが描かれていた。言葉を教えるつもりらしい。

「なんだか知らないけど、ありがたい話だな」

全然言葉が通じずに困っていた彼にとって、これは渡りに船だった。がんばって学べばそのうちマスターできるだろう。

それから毎日、竜也はマルシアに言葉を教わるようになった。それ以外の時間は屋外にある広場で剣の素振りをしている。食事は毎日出してくれるし割と快適だ。

「なんか日本に戻った気分だな」

あれ以来、殺し合いは一度もしていない。竜也はそれが気がかり

だった。もう二度とあんなことをするのはごめんだ。

連日のように言葉を習っているうちに、だんだん意志の疎通ができるようになってきた。この国の言語は文法や発音に英語との類似点が多く見られる他、単語の数自体が少なく覚えやすい。熱心に勉強したことや毎日使っていることもあり、会話ができるようになるのにそう時間はかからなかった。

マルシアの話によると、竜也は本来であれば拷問された上で殺されるはずだったらしい。それなのに助かったのはラグラスに気に入られたからだと言う。

「なんで気に入られたんだ？」

部屋でソファーに座りながらたずねると、マルシアは紅茶を飲んでから答えた。

「強かったから。この国では強いことが第一なんだよ。今の国王が力づくで政権をもぎ取ってからね」

「すごいところだな」

「前は平和な国だったよ。でも、最近はどこに行っても殺伐としてる」

そんなことを言いながらも、彼女はなんだか嬉しそうだ。竜也にはそれが不思議でたまらない。

「なんでそんなにここにこしてんだ、マルシアにとつちや最悪な環境だろ？」

「え、なんで？」

「強い者が優先されて弱い者が押しつけられるんじゃない、女の子なんか真っ先に……」

そう言いかけると、彼女はやりと笑った。底冷えのするような冷たい笑顔だ。竜也はぎよっとして沈黙した。

「そう……そんな国なんだよ。強い者こそ正しいっていう風潮でね。それはそれでおもしろいと思うな」

「治安はいいのか？」

「最悪。ならず者が威張り散らして、真面目に生きてる人たちは隅

に追いやられてる状態」

どこがおもしろいのかさっぱりわからない。

「そうだ、マルシアはなんで俺の教育係になつたんだ？」

「自分で『やりたい』って言ったから」

「なんでやりたかったわけ？」

彼女は目を細めてこちらを見つめた。

「強い者こそ正しいっていうこの国では、力のある人間であればあるほど上に行けるんだよ」

「まあそうだろうな」

「私は竜也の力を買ってる。あなたは上に行ける人間だと信じてる。ガルフとの戦いを見て本当に驚いたよ。あんな歴戦の猛者に勝つちやうんだからね」

「それで？」

「私に力を貸してほしいんだよ」

竜也は彼女の顔をじっと見つめた。表情は真剣そのもので、こちらを騙そうという意図は感じられない。

「なるほど……俺に恩を売った上で、それを持ちかけたわけか。さすがに断りづらいな」

マルシアは不敵に笑っている。

「竜也にとってもそう悪い話じゃないと思うよ。あなたに何かあれば私だって力を貸すし」

「うーん」

言葉を教えてもらったことだし、助力することに異存はない。ただ、彼女はなんのために自分を必要とするのか。真の目的は何か。竜也の関心はそこにあった。

「俺に持ちかけた理由を教えてくださいませんか？」

マルシアの碧い瞳がじっと見つめてくる。

「あなたが強いから」

「それだけか？」

「信頼できる仲間がほしいから」

竜也は目をしばたいた。今までまったく面識がなかった得体の知らない外国人を「信頼できる仲間」にしたらしい。彼から見れば滑稽極まりない話だ。

「おいおい、冗談だろ。こんな素姓の知らない人間をさあ。気は確かか？」

「うん、確かだよ」

「なんで俺なんだよ、もしかして友だちがないのか？」

「いるよ」

「じゃあなんで」

「私がほしいのは普通の友だちじゃなくて、一緒に戦場を駆け回れる仲間なんだよ」

新たなる強敵

竜也には意外だった。高校生くらいの女の子が戦場に出て何ができるといふのだろう。

「戦場を駆けるって、お前が？」

「うん」

「それは一目散に逃げるってこと？」

「……違うよ、私を馬鹿にしてるの？」

「いや、だつてさあ」

「そんなに疑うなら試してみる？」

「どうやって？」

「ちよつと待つててね」

マルシアは眉間にしわを寄せながら部屋を出ていった。どうも怒らせてしまったようだ。

しばらく待つていると、彼女はリングを一つ持ってきた。真っ赤に熟れていてなかなかおいしそうだ。

「剣を使うから離れてて」

「え、それを剥いてくれるのか？」

「違ーう！」

なんだかわからないが、とりあえず離れることにした。

「まあ見てなよ、私の実力を」

「へいへい」

どうせたいしたことはないだろう。竜也はそう思いながらぼけっとなっていた。そのときだ。

マルシアがリングを天井に向かってに放り投げた。それは地面に落ちたとき、綺麗に両断されていたのである。

「ええっ！」

竜也は目を見張った。マルシアは剣を抜いてもいない。いや、実は既に鞘へ収めてしまったのだ。要するに彼女は空中のリングを抜

き打ちで両断し、直後に剣をしまったわけである。

「嘘だろ……？」

リングを空中で切断するのは至難の技だ。しかも抜き打ちでということなら、もはや達人の領域と言える。いや、達人と呼ばれる者でさえこんなことができるか怪しい。

マルシアは落ちたリングを拾い、こちらに向けながら笑っている。「どう、綺麗に切れてるでしょ？」

断面を見ると、まな板の上で切ったのかと思うくらい綺麗だった。これは実力を認めざるを得ない。

「いや、たいしたもんだ。恐れ入ったよ」

「竜也の方が上だと思っけどね、ところでさあ」

彼女は真顔に戻り、竜也を見つめて言った。

「あなたの次の試合が決まったよ。めっちゃめっちゃ強い相手だから気をつけて」

「嫌だなあ、どんな奴なんだ？」

「竜也と同じ年くらいの男の子だよ。鎖分銅と三又の槍を使うから気をつけて」

「なんでそんな試合に出なきゃならないんだよ？」

「そのために助けられたんだから仕方ないでしょ」

「ええっ？」

「あなたは見世物にされるためにつれてこられたんだよ」

竜也は激昂した。ふざけているにもほどがある。

「俺は猿回しの猿じゃねえ！」

「え、猿回しって何」

「猿を回す……じゃなくて、色々と曲芸させるんだよ」

「おもしろーい、見てみたーい！」

「いや、そんな話をしてるんじゃないよ……」

「わかってるよ、ごめんごめん」

マルシアが笑いながら言う。

「とにかく試合に勝って、生きて返ってきてよ。そしたら、あなた

を部下にしてくれるようラグラスに頼んでみるから」

「先に部下にしてくれれば、試合に出なくてもよくなるんじゃない……」

「今さら試合を中止するわけにはいかないからさ、がんばってきて

よ」

「どうやら出場するしかないらしい。竜也は仕方なくうなずいた。

「わかった、派手にぶちかましてやる」

「期待してるよ、がんばってね」

翌日、竜也は再び闘技場の中に立っていた。武器は一振りの長剣で、身につけているのはTシャツとハーフパンツだ。

「さて、一丁やるか」

本当はやりたくないが、負けて死ぬわけにもいかない。

相手を見ると、高校生くらいの少年だった。黒い短髪と瞳、よく日に焼けた浅黒い肌、スマートながらしつかり筋肉のついた体。武器は三又の槍と鎖分銅で、着ているのは短パンだけだ。

竜也は彼の前に歩いていき、声をかけた。

「竜也だ、よろしく」

相手がにこやかに答える。

「ブラッドだ。勝つても負けても悔いの残らない試合をしようぜ」
丸顔で目鼻が大きく、なかなか愛嬌がある。竜也もつられて笑みを浮かべた。

「ブラッド、負けて死んでも恨みつこなしだぞ」

「当たり前だ、正々堂々勝負してやられたなら自分の責任だからな。

お前こそ恨むなよ」

「もちろん」

「それを聞いて安心したよ、じゃあ始めようぜ」

二人は跳び下がって距離を取った。場内から歓声が湧き上がる。今日も数万の人間が観にきているのだ。ぶざまな試合は見せられない。

ブラッドは右手で槍を突きつけつつ、左手で鎖を振り回している。

先端に分銅が付いていることも手伝って、その回転は恐ろしく速い。次の瞬間、鎖が空気を切り裂いて飛んできた。常人の目には留まらないほどの速度だ。竜也はすかさず後退してかわしたものの、相手の実力に舌を巻いた。

「ガチでやばいな、こりゃ」

あの鎖に捕まったが最後、槍で突かれてあの世逝きになることは目に見えている。なんとか距離を詰めたいけれども、三又の槍がそれを許さない。

何か方法はないかと思案したが思いつかなかった。その間に再び鎖が飛んでくる。

「くっ！」

竜也はこれもかわし、すかさず斬りかかろうとした。ところが鎖はブラッドの手元に戻ってしまっている。これでは踏み込んでみてもやられるだけだ。

遠距離用の武器を持たない竜也が離れて戦ったところで勝ち目はない。残された道は、ひたすら鎖をかわして相手を疲れさせるか危険を覚悟で突っ込むことくらいである。彼が選んだのは後者だった。「うおおおおおおおっ！」

竜也は叫ぶと同時に疾走した。勝算はほとんどない。しかし「こんなところで死ねない」という強い気持ちだけはあった。

死闘の結末

突進する竜也を目がけて、ブラッドの鎖が飛んでくる。

「もらった！」

竜也は瞬時に伏せてかわした。頭上を鎖が通りすぎていく。直後に地を蹴り、相手に鋭い突きを見舞う。

「うわっ！」

ブラッドは身を翻して避け、三又の槍を突き出して距離を取ろうとした。だが竜也はそれを許さない。踏み込むと同時に真っ向から斬り下ろす。

並の戦士なら両断されているところだが、相手は槍で受け止めた柄の部分も鉄でできているので両断することはできない。そのため一旦剣を引き、間髪入れずに踏み込んで薙ぎ払った。しかし、これもかわされている。

「ちっ！」

この機を逃してなるものか。距離を詰めて肩を斬りつけ、足を薙ぎ払い、顔面に突きを放った。どれも神速と言えるほどの攻撃だが、ブラッドは槍を振るって跳ね返している。これは容易ならざる敵だ。額に冷や汗が浮かんできた。

それでも竜也は、一瞬の隙をついて懐に入り込んだ。ブラッドの顔が恐怖でゆがむ。今度こそもらったと思いつつ斬りつけたその瞬間、鋭い痛みが走った。ブラッドは回転して斬撃を避けると同時に石突きで竜也の腹を攻撃したのである。

槍先がない方で突いたわけだから傷はついていない。だが、竜也の動きを止めるには充分だった。そこに三又の槍が殺到する。竜也はかろうじてこれをさばいたものの、腹を押さえて倒れてしまった。「もらった！」

ブラッドの槍が襲ってくる。これで終わりか。観念しかけたが、やはりまだ死にたくない。死力を奮って突きをかわした。

三又の槍は地面に突き刺さった。ブラッドは慌てて引き抜こうとしたが、渾身の力で突いてしまっただけに抜けない。竜也はすかさず立ち上がり、剣を振り上げた。

「うわああっ！」

ブラッドは思わず叫んだ。もう助かる見込みはない。ところが、剣は目の前で止まっている。おそろおそろ竜也を見ると、彼は笑顔で言った。

「勝負あつたな」

ブラッドは全身の力が抜け、その場にへたり込んだ。

「こ、この俺が負けただと……百回以上戦って一度も負けたことがないのに……」

「まあ、たまにはそんなこともあるさ。気にすんなよ」

「なんで殺さなかったんだ、俺はお前を殺すつもりだったんだぞ？」

「お前の人生を奪うのが嫌だったから。それだけだよ」
ブラッドはがっくりと肩を落とした。

周囲から大歓声が上がっている。竜也はブラッドを残してその場から立ち去った。もう二度とこんなところで戦いたくない。

廊下を歩いていくと、向こうから走ってきたマルシアと鉢合わせした。

「竜也、おめでとう！」

「ありがとう、なんとか生き延びたよ」

「ブラッドにまで勝つなんて本当にすごいよ。強すぎ」

「それで、部下になるって話は？」

「ああ、それね。ラグラスが、あなたと話がしたいんで来てくれて」

「俺と？ なんだらう？」

竜也はいぶかりながらも、マルシアにつれられて一室に入った。

十二畳くらいで壁と床は板張り、中央に木製の大きなテーブルと椅子がある。そこにラグラスが座っていた。

「竜也、久しぶりだな」

「あんたか、俺に話ってなんだよ」

「ほう、普通に話せるようになったのか。それはよかった」

「質問に答えろって」

「聞きたいことがある。お前はアイリーンのなんだ？」

「なんだと言われても、恋人でもなければ友だちでもない。」

「赤の他人だよ」

「嘘を言うな。それなら、彼女を逃がすために命がけで戦ったりするものか」

「いや、本当なんだって。原住民に襲われたとき助けしてくれたから、その借りを返したただけなんだ。全然知らない子だよ」

ラグラスは眉をひそめてこちらを見た後、おもむろにたずねた。

「まさかとは思うが、お前はアイリーンが何者か知らないのか？」

「知らないっつてんだろ」

ラグラスは目をしばたいた。事実なのだが、彼にはそれが信じられない。

「ありえない話だ。この国の住民はもちろん、外国人であっても知っているはずだぞ」

「いや、そもそも俺はこの世界の人間じゃない」

「はあ？」

「別の世界から転送されてきたんだよ。ここって地球じゃないだろ？」

「チキユウなど聞いたこともない。なんだそれは？」

「ほらな、やっぱりそうだ。日本だって知らないよな？　それが俺

の国だよ」

「ニッポン？　知らんな。本当にそんな国があるのか？」

「ある。断っておくけど、俺は一つも嘘は言っていないぞ」

ラグラスは竜也を凝視した。嘘を言っているようには見えない。

「あんまり見つめるなよ、ときめいちゃったらどうするんだ」

「あいにくだが、そういう趣味はない」

ここでマルシアが口を挟んだ。

「ラグラス様、お願いがあります」

「なんだ、いきなり」

「彼を私の部下に加えることをお許しただけなんでしょうか？」

「ええっ？」

ラグラスは驚き、マルシアを見つめている。

「色恋沙汰じゃないだろうな？」

その途端、彼女の白い顔がほんのりと赤く染まった。

「ち、違います！ 有能な部下がほしいだけで……」

「むきになって否定するところが実に怪しい」

「ラグラス様！」

マルシアが真っ赤になりながら騒ぎ立てると、ラグラスは笑い出した。

「怒るな怒るな、違うならいいんだ。ただでさえ女性がいない軍隊の中でベタベタされたら、他の兵士たちが発狂しかねないからな。

彼はアイリーンの部下でもないようだし、特に問題はない。好きにすればいいさ」

「あ、ありがとうございますー！」

最強部隊結成

喜んでいるマルシアを尻目に、竜也はラグラスに話しかけた。

「ついでと言っちゃなんだけど、ガルフとブラッドも部下にしてくれよ」

マルシアが慌てて口を挟んでくる。

「竜也、少し口の聞き方に気をつけて。ラグラス様は師団長なんだから」

「なんだそれ？」

「とにかく偉い人なんだよ」

「ふーん」

ラグラスが笑いながら言う。

「そう堅くなることはないさ、俺は別に気にしない。それで、どうしてガルフとブラッドが必要なんだ？」

竜也は、ラグラスをまつすぐ見つめながら答えた。

「あいつらは俺に負けたけど、優れた戦士であることに間違いない。仲間にすれば必ず戦力になってくれるはずだ。だからだよ」

「ふむ、なるほどな」

ラグラスはうなずいた。彼もガルフやブラッドの強さはよく理解している。竜也と二人が力を合わせればかなりの戦力になるだろう。ただ心配な点もあった。

「マルシア」

「はい？」

「お前、その三人を使いこなす自信があるか？」

彼女は沈黙した。竜也はさておき、ガルフとブラッドはプライドが高く性格も荒々しい。女性の部下にされておとなしくしているかどうかかなり疑問だ。何も言えずに黙っていると、竜也が助け船を出した。

「その二人は俺に任せてくれればいいよ」

「お前に？ 隊長はマルシアだぞ」

「わかってるよ、彼女に従うようにしむける」

ラグラスはしばらく考えた後、おもむろにうなずいた。

「いいだろう。ただ、統制が取れないようなら配置替えをするからな」

「大丈夫だつて」

「そうか。用事があるのでもう行くぞ。何かと忙しいのでな」

ラグラスは部屋を出ていき、竜也とマルシアだけが残された。彼女が不安げに話しかけてくる。

「本当に大丈夫？ あの二人つて、ものすごく気性が激しいんだよ」

「まあ任せておけて。とりあえずあいつらを呼んでいいか？ 事情を説明したいから」

「必要なら呼びにいさせるよ、ここで待つてて」

マルシアは近くにいた兵士を使いに行らせ、二人を部屋に呼んだ。やがてガルフとブラッドが現れた。ガルフは二十代半ば。獅子のたてがみを思わせる見事な金髪、引きしまった顔に日に焼けた肌、隆々とした筋肉。身に着けているのは腰布一枚だ。ブラッドは高校生くらい。黒い短髪と瞳、よく日に焼けた浅黒い肌、スマートながらしつかり筋肉のついた体。着ているのは短パンだけだ。

竜也は二人を椅子に座らせて話した。

「俺は今回、マルシアの部下になった。そこであなたたちに頼みがある。手を貸してくれないか？」

ガルフが目を細めながらたずねる。

「手を貸すとは、具体的にどういうことだ？」

「俺と一緒にマルシアの部下になってほしいんだよ」

「なんで俺たちなんだ？」

「あなたたちは本当に強い。仲間になれば必ず戦力になる。だからだよ」

ガルフはじつと竜也を見つめた。竜也も見つめ返す。しばらく二人の間に沈黙が流れた。マルシアは緊張の面持ちで見守っている。

先に口を開いたのはガルフだった。

「俺は竜也に負けたとき殺されるはずだった。なのに、お前は俺を助けた。本来は失うはずだった命だ。役に立つなら喜んで預けよう」
ブラッドも続けて口を開く。

「俺も、お前に助けられたからな。その頼みを聞かないほど恩知らずじゃないさ」

竜也は安堵のため息をついた。彼らが加われれば百人力だ。

「ありがとう。あと、俺たちはあくまでもマルシアの部下だ。当然その命令に従うことになる。かまわないよな？」

二人は力強くうなずいた。竜也がそれを見て右手を差し出す。

「頼りにしてるよ、これからよろしくな」

ガルフたちは交互に竜也の手を握りしめた。その顔に笑みが浮かんでいる。

マルシアは安心し、自己紹介を始めた。

「私はマルシア・ウインストン。三人ともよろしくね。階級は小隊長だよ」

竜也には、この国の軍隊の仕組みがわからない。すかさずたずねた。

「小隊長って何人の部下を率いるんだ？」

「十人。小隊が十個集まると中隊、中隊が十個で大隊、大隊が十個で連隊、連隊が十個で一個師団」

「じゃあ一個師団は……」

「十万人で構成されるね」

つまり、ラグラスは十万人を率いる身分だと言うことになる。竜也は肝を冷やした。

マルシアが話を続ける。

「私たちは、これから城塞都市アルタニアを陥落させなきゃならぬの。最前線で戦うことになるからがんばってね」

竜也はうなずいた。日本へ帰りたいたいのには山々だが、その手段が見つからない。今は自分にできることを全力でやった方がいいだろう。

そうすればこの世界で生きていく見通しも立つはずだ。

マルシアが三人を見回しながらさらに言う。

「出撃は明日の早朝だから、今日はゆっくり休んで。期待してるからね」

竜也たちはうなずき、彼女につれられて寢室へ向かった。広々とした中に二段ベッドがいくつも並んでいる。とりあえず明日に備えて寝ることにした。

疾風の戦士

翌日。竜也はマルシアの小隊の一員として、城塞都市アルタニアの攻略に向かった。

隊のメンバーはマルシア、自分、ガルフとブラッド、その他六人の男性だ。皆が装備しているのは革の鎧とブーツ、木製の大盾である。武器に関しては剣を持つ者もいれば槍を持つ物もあり統一されていない。ちなみに竜也は剣を使っている。

今回アルタニアを攻撃するのは総勢五万。ごく一部の指揮官を除き全て歩兵だ。見渡す限りの荒野を大人数が進んでいく。守備側は一万に満たず、いくら城塞都市に籠っているとはいえ勝敗は明らかだ。よほど指揮官の力量や兵の質に差がない限り勝って当然の戦と言える。

アルタニアに向かう途中、マルシアが部下たちを見回しながら言った。

「私たちの目的は、先陣を切って都市の内部に突入すること。それから指揮官を仕留めることだよ。普通に戦ったところで誰も評価してくれる人はいない。上に行きたければ獅子奮迅の働きをすること。いい？」

竜也とガルフ、ブラッドの三人はうなずいた。だが他の六人はそっぽを向いている。筋骨隆々とした若者たちだ。

竜也はそれを見て苦々しく思った。戦場は命を賭けて戦う場所である。それだけに彼らは、上官が若い女性というのが気に入らないのだろう。その言い分もわからなくはない。しかし、だからと言って勝手な行動をされたら統率を取ることもできず全滅するだけだ。マルシアの言うことを聞かないなど論外である。

そこで彼は、六人を見回しながら言った。

「上官が女だつてのが気に入らないんだよな？ その気持ちはわからなくもないよ。でも聞いてくれ。マルシアは女性でありながらこ

んな危険な任務に着いてるんだ。その勇氣は並大抵のものじゃない。むしろ、普通の男よりずっとすごいと思わないか？」

その問いかけにも六人は興味を示さない。竜也はあきらめずに続けた。

「こいつは、女性っていうハンデを負いながらも戦場に立ってるんだ。そんな上官を支えてやるのも俺ら部下の役目じゃないのか？」

依然として反応はない。マルシアはため息をつき話しかけてくる。「あなたが隊長なら、この人たちもついてくるのかもしれないね」「何言ってるんだ、あきらめるなよ。お前の実力も度胸も並の男を軽くしのいでるのに」

マルシアはさみしげに首を振った。いくら卓越した剣の腕を持っていたても、外見が女性であることには変わりない。たくましい体をした男性に侮られるのはもはや宿命なのだ。

竜也はそれを見て悲しくなった。マルシアは強さという点では文句なしだが人望がない。これは上に立つ者として致命的な欠点だ。では、それを改善するにはどうすればいいか。手っ取り早いのは指揮官としての能力を部下たちに見せつけることだ。竜也はそれに賭けるしかないと思った。ただ疑問なのは、実際それがどの程度なのかということである。マルシアの剣技の素晴らしさは疑うべくもないが、それと指揮官としての能力は別物だ。

やがてアルタニアの町が見えてきた。高さ十メートル近い城壁の上にびっしりと敵兵が立ち並び、一斉に矢を射かけてくる。竜也たちは木製の盾を掲げて身を守りつつ前進した。後続の味方も城壁に向かって激しく射かける。飛び交う矢と、それに当たって倒れる兵士たちを見ているとここが戦場であることが実感された。

激しい射撃戦が展開される中、味方が攻城兵器を押し出してきた。車輪が付いた巨大な櫓である。これを城壁に接近させて跳び移ろうというわけだ。

しかし、防御側も黙っていない。こちらに向かって火矢を射かけてくる。木製の櫓はそれを受けて炎上した。これではせつかくの兵

器も意味をなさない。

竜也は視線を走らせ、被害が少ない櫓を発見した。火はついていないものの、まだ炎上はしていない。城壁との距離は二メートル弱、充分に跳び移れる。彼はそれを指さして叫んだ。

「マルシア、あれだ！」

彼女は大きくうなずいた。ウェーブのかかった金髪が風に揺れ、澄んだ碧い瞳が煌めく。

「行きましよう、あれを伝えて跳び移るよ！」

十人は櫓に向かって疾走した。あちらこちらに味方の死体が転がっている。運が悪ければ次にこうなるのは自分たちだ。皆、真剣な表情を浮かべている。

櫓にたどり着くと、その後ろには階段が付いていた。マルシアが先頭となって駆け上がり、次に竜也、ガルフ、ブラッドが続く。

櫓の頂上に着くや否や、マルシアは城壁に跳び移った。幅五メートルほどの壁の上は敵兵でごった返している。彼らは金髪の少女の姿を認めると、一斉に斬りかかってきた。そのときだ。

閃光が次々と走り、群がる敵兵を斬り裂いた。首をはねられて倒れる者、腕を落とされて泣き喚く者、武器を弾き飛ばされてあわてふためく者。マルシアは眉一つ動かさずに彼らの間を駆け抜け、その度に血飛沫が上がる。

続いて跳び移ったのは竜也だった。

「うおおおおお、らあああああつ！」

近くにいた敵兵が突きかかったが、一瞬で槍を真つ二つにされた揚句に顔面を叩き斬られた。あわてた敵兵が三人で包囲しようとしたが、横を払い抜けられ鮮血を噴き出して倒れる。

さらにガルフも跳び移ってきた。怪力にものを言わせ、巨大な金づちを振り回して敵兵を肉塊に変えていく。

竜也は周囲の敵を薙ぎ倒しつつ叫んだ。

「マルシア、この後どうするんだ！」

城塞都市への突入

煉瓦造りの城壁の上でマルシアが叫ぶ。

「下に降りられる場所を探して！ 内側から城門をこじ開けるんだよ！」

門を開けてしまえばいくら頑丈な城壁があつたところで役に立たない。五万の軍勢が都市の中になだれ込めばこちらの勝ちだ。竜也は周囲の兵士を斬り伏せつつ、素早く視線を走らせた。

そのとき、いいものを見つけた。城壁の上と地面とを結ぶ階段だ。あれを使えば中に降りることができる。

「マルシア、あそこに階段があるぞ！」

「じゃあ、まずあれを確保しましょう！」

そう言われても、これ以上ないくらい難しい。あの階段は防御側の兵士たちを城壁に登らせるためにある。なので常に敵兵が利用しており制圧するのは至難の技だ。しかも、今この場にいるのはマルシア隊の十人だけ。対して周囲の敵は軽く百人を超えている。

「マルシア、本当にやるのか！」

「もちろん！ 私たち下つ端がのし上がると思つたら、そのくらいできないと話にならないよ！」

竜也は覚悟を決めた。ここまで来たらやるしかない。

「ガルフ、ブラッド！ 道を開くぞ！」

「おう！」

「任せろ！」

ガルフが巨大な金づちを振り上げ、目の前にいる兵士を叩き潰した。凄まじい血飛沫が上がり周囲を赤く染めていく。それでも敵はひるまない。革の鎧を着込み曲刀を握りしめた屈強な男たちが、脇目も振らずに斬りかかってくる。

こちらも負けてはいない。ブラッドが疾走し、三又の槍を構えて応戦する。

「ブラッド様をなめんじゃねえ！」

矢継ぎ早に繰り出される鋭い突きが、男たちを次々と槍玉に上げていく。やがて敵兵の間から声が上がった。

「こいつら強いぞ、油断するな！」

今頃気づいたところで遅い。竜也は剣を振りかざして突進し、前方に立ち塞がる男たちを斬り捨てた。死体は邪魔なので城壁から蹴落とす。

「俺の行く手を阻む気なら、死ぬ覚悟で来るんだな！」

大声で叫ぶと、兵士たちはひるんで後ずさった。そこにガルフが一撃を加え、彼らは肉塊と化して転がる。

個々の力量はこちらの方が圧倒的に上だ。しかし、困ったことに味方の支援がない。接近した櫓はことごとく炎上してしまい、跳び移ることができたのは自分たち十人だけときている。街の中にはそれこそ何百何千という敵がいるわけで、この人数ではどうにもならない。

生き残る方法はただ一つ、城門を開いて味方を招き入れることだ。竜也たちはマルシアを中心に階段へと走った。一カ所に留まればなぶり殺しにされるのが目に見えている。彼は斬って斬って斬りまくったが、敵の数が半端ではない。いよいよ剣が刃こぼれして使えなくなっただので、倒した人間の剣を奪い取ってさらに戦い続けた。

総勢十人の味方は今や七人に減っている。常に敵に囲まれた状態でこれだけ生き残っているのはむしろ上等だ。ただ一つだけ言えるのは竜也、マルシア、ガルフ、ブラッドのうち一人でも欠けたら全滅するということである。この四人の奮闘によって被害を抑えているわけで、それがなくなればもうどうにもならない。

なんとか階段までたどり着いたものの、下には曲刀を構えた男たちがひしめいている。このまま突っ込めば全滅は必至だ。竜也がどうしようか迷っていると、マルシアがガルフに素早く近づいて耳打ちした。

「わかった、任せろ」

一人が階段を登って斬りかかってきた。直後に竜也が右手を一閃し、その首をはねている。しかし敵の勢いは止まらない。喚声を上げながら次々と向かってくる。

そのとき、ガルフが近くにある死体を担ぎ上げて叫んだ。

「うおおおおおおおおおつ！」

竜也とブラッドは驚いて目を見張った。その間にガルフは、登ってきた敵兵に死体を投げつけている。相手はたまらずに階段を転げ落ち、それに他の男たちも巻き込まれた。直後にマルシアが叫ぶ。

「突撃！」

七人は一丸となって突進した。周囲の男たちは度胆を抜かれてしまい声も出ない。やることなすこと無茶苦茶だ。その上、戦闘能力はありえないほど高いときている。

竜也は先頭に立って地を駆けた。目指すは城門だ。立ち塞がった敵は無を言わず斬り倒す。そのほとんどが一分と持たなかった。斬撃の速度に歴然とした差があるのだ。元々剣才があり、しかも毎日たゆまぬ練習を繰り返していた竜也の前に立っていられる相手は皆無だった。

やがて城門にたどり着いた。どっしりした鉄製の格子戸が、味方の突入を阻んでいる。これを開けるには近くにある巻き上げ器を使うのだが、結構な力がある上に時間を要する。マルシアはここで、怪力を誇るガルフを指名した。彼は無言でうなずき、巻き上げ器に取り付く。これを回せば格子戸が上がるわけだ。

ガルフは真っ赤になりながら力を込める。それによって少しずつ城門が上がっていったが、敵兵が黙って見過ごすはずもない。激昂して次々とマルシア隊に襲いかかってくる。

竜也は歯を食いしばり、縦横無尽に剣を振るった。今が正念場だ。ここで倒れれば今までの苦労は水の泡である。なんとしても踏み止まる必要があった。

決死の奮闘

ガルフが巻き上げ器の操作に全力を注いでいる今、戦えるのは六人だけだ。それに対して敵は何百何千という。斬っても斬ってもきりがない。

達也、マルシア、ブラッドの勢いは未だに衰えていなかった。だが他の三人はくたくたに疲れてしまい今にも倒れそうな状態だ。竜也はそれを見て声を上げた。

「しつかりしろ、今が正念場だ！　ここであきらめたら全部終わりでぞー！」

三人は涙目になっている。いくら気合いを入れても、疲れきった体は回復しない。竜也の言う事はわかってはいるがどうにもならないのだ。

崩れ立った彼らに向かって周囲の敵兵が一斉に襲いかかる。竜也がかばおうとしたが間に合わない。

駄目だ、やられる。三人がそう思った瞬間、すさまじい血飛沫と悲鳴が上がった。見ると、周囲の敵兵が斬り裂かれて倒れている。

その中央には金のロングヘアをたなびかせたマルシアが立っていた。「何をしてるの、あなたたちは！　死にたいわけ？」

その怒鳴り声に三人はおろか、周囲の敵兵まですくみ上がった。鋭い眼光と言いつ中から立ち上る殺気と言いつ、およそ少女のものとは思えない。竜也はその様子を見て、何が彼女をここまで突き動かしているのか疑問を持った。

だが、今はそんな事を気にしている場合ではない。竜也はひとまずなだめる事にした。

「マルシア、そう怒るなって。こいつらはお前ほど強くないんだし」「何を甘い事を……」

「お前にできて、こいつらにできない事だつてあるんだよ」「

「そう……わかったよ。じゃあ仕方ないね」

彼女は怒りを収め、再び敵兵へと向かっていく。三人は未だにすくみ上がっている。竜也は周囲の敵兵を突き倒し、彼らに向かって口を開いた。

「お前ら、あいつに見下されて悔しくないのか？」

三人はうつむいた。確かに悔しいのだが、自分たちが足を引つ張っているという事実は認めざるをえない。

「このまま役立たずとして終わりたくなきゃ、せめてマルシアを援護しろ。いくら強くてもあいつは女なんだ」

彼らは強くうなずき、マルシアの後を追った。残ったのは竜也とブラッドだけだ。どちらも敵兵に囲まれている。

「おい、ブラッド！」

「なんだ！」

「お前はこんな所でやられるほどやわじゃないよな！」

「当たり前だ、俺を誰だと思ってる！」

「それを聞いて安心した。行くぜ！」

「おおっ！」

竜也の剣が煌めき、幾筋もの閃光が次々と敵兵を薙ぎ倒していく。包囲していた男たちは思わず絶叫した。あまりにも強すぎる。

生と死の狭間で

そのとき、敵兵の後ろから一人の男が進み出た。年齢は二十歳前後。赤い長髪に白い肌、鋭い目つきに高い鼻、痩せた顔と体をしている。身に着けているのは革の鎧で、持っている武器は一振りの曲刀だ。

「どいてろ、てめえら。そいつは俺がぶち殺す！」

周囲の兵士たちが一斉に道を空ける中、男はにやけながら近づいてきた。さらに、曲刀を突き付けながら言う。

「こら、派手に暴れてくれたじゃねえか。だがそれもここまでだ。五体満足で死ぬると思うなよ」

竜也も男をにらみつけて剣を突き付ける。

「俺は轟竜也だ。お前は？」

「名乗る必要なんかねえよ。どうせてめえは死ぬんだからな！」

彼は地を蹴って跳びかかってきた。同時に斬撃が竜也を襲う。常人の目には留まらないほどの速度だ。

「くっ！」

辛くもそれをさばいたが、相手はさらに踏み込んで次の一撃を放ってくる。竜也は敵の強さに舌を巻いた。どうやら口先だけではない。

「ハッハー、防戦一方か！ 手も足も出せないまま死ぬ！」

男は剣を振りかざし真っ向から斬り下ろした。しかし竜也は身を翻してかわし、横薙ぎの一閃を放っている。切っ先が相手の頬をかすめ、赤い筋を作った。

「この野郎！」

男は袈裟がけに斬りつけ、続けて逆袈裟に斬りつける。さらに顔面や胸を狙った突き、胴や足を狙った薙ぎ払いが続く。竜也は猛攻にひたすら耐えつつ隙を狙った。危機的状态に置かれているのはわかってる。だが勝機がゼロとは限らない。わずかな光明をも見出

だせずに死ぬか、それを見出だして生き残るかは自分次第だ。

赤毛が放った渾身の斬撃が襲ってくる。それをかわした直後、竜也はわずかな隙を見つけた。考える間もなく突きを放つ。

「ちっ！」

男は咄嗟に避けたものの体勢を崩した。それを見逃す竜也ではない。顔面めがけて斬りつけ、受け止められた所で後退しつつ足を薙ぎ払った。相手の上半身は革の鎧で覆われているが太ももはむき出しだ。ざっくりと斬られて倒れかかった所に竜也の一撃が命中し、赤毛は首から鮮血を噴き出した。

「お、俺が……負けただと……？」

彼はその場に崩れ落ち、二度と動く事はなかった。

既にガルフが城門を開き、五万の味方が都市の中へなだれ込んで立っている。竜也は安堵のため息をつきながら座り込んだ。極度の疲労で立ってられない。そこにブラッドが笑みを浮かべながら近づいてきた。

「竜也、やったな」

リーダーの資質

ブラッドが拳を突き出し、竜也はそれに自分の拳を合わせた。もう周囲に敵はいない。二人とも生き残る事ができたのだ。

「竜也、一番手柄は間違いなく俺たちだぜ。もっと喜べよ」

ブラッドはそう言いながら、浅黒い顔に笑みを浮かべている。しかし竜也は素直に喜べなかった。命令された事とは言え、自分は数多くの人間を殺したのだ。彼らの人生を奪ってしまったのである。

「ブラッド……」

「ん？」

「俺は軽率だった」

「なんでそう思うんだよ？」

「戦争という理由があるのが、やった事は殺人だ。いくらマルシアへの義理を果たすためとは言え、これは……」

彼は、近くに転がっている赤毛の骸を眺めた。元々この男とは面識がない。戦場で敵味方に別れる事がなければ殺し合う事もなかったはずだ。

渋面を作っている彼の所にガルフが近づいてきた。

「おい、どうした。勝ったのにしけたツラすんなよ、もっと喜べ」

「人を何人も殺して喜べる方がおかしいだろ」

「お前なあ……」

ガルフが大きな手で竜也の肩を叩きながら言う。

「人を殺したのを喜ぶんじゃないくて、自分たちが勝って生き残った事を喜ぶんだよ」

竜也はその言葉を聞いても沈んだ表情をしている。ガルフはブラッドと顔を見合わせて肩をすくめた。処置なしといった感じだ。

やがて、血刀を握りしめたマルシアが近づいてきた。満面に笑みを浮かべている。

「みんなありがとう、味方の大勝利だよ。私たちの手で指揮官を討

ち取る事はできなかつたけど、城門を開いたのは大きな手柄だと思
うよ」

竜也は目を合わそうともしない。彼女は眉をひそめながらブラッ
ドにたずねた。

「どうしちゃったの、彼？」

「さつきからご機嫌斜めなんだよ」

「へえ……竜也、何が気に入らないの？」

竜也は彼女をにらみつけた。三人の部下をつけたはずなのにその
姿が見えない。

「……三人はどうした？」

「え、えーと」

マルシアは困惑した。実は戦死してしまったのだが、それを言っ
ていいものかわからない。

「答えるよ、あいつらはどうした？ 死んだんだな？」

「え、あ……うん……」

「見る。お前の小隊は最初、総勢十人だったよな。それが今はたっ
た四人だ。状況がわかってるか？」

彼女は顔面蒼白になり何も言えない。ひたすらうつむいている。

「お前の采配は確かに勝利をもたらした。でも、その一方で六人の
人間を死なせたんだよ。それなのにどうして笑っていられるんだ？」

「それは……」

マルシアが答えられないのを見て、ガルフが口を開いた。

「それが戦争つてもものだからだ。勝つには相応の犠牲を払う必要が
ある。仕方ないだろ？」

「戦争がどうかという話じゃない。指揮官は部下の命を預かってる
んだ。それを理解しろって言いたいんだよ」

戦場からの帰還

竜也はマルシアを見つめながらさらに言う。

「あの六人の能力は元々低かった。でもな、リーダーはそれも理解した上で部下を引つ張っていかなきゃならないんだよ。単に勝ちを収めるのがお前の役目じゃない。一人でも多くの部下を無事に自宅へ帰す。そこまできて始めて一流の指揮官と言える。部下を散々犠牲にした代償に勝利をもぎ取るなんざ、二流三流のやる事だ。わかるか？」

「り……竜也。あのね」

彼女はおずおずと口を開いた。ただ、相手が怖くて目を合わせられない。

「戦争に勝つためには、部下を駒として使わなきゃならない場合も……」

「馬鹿！」

怒鳴りつけられてマルシアはすくみ上がった。これではどちらが上官かわからない。

「部下たちにも人生がある。家族がいる。お前はなんの権利があつて彼らを駒にするんだ？」

マルシアはうつむきながらも心の中では反発していた。戦争は殺し合いだ。綺麗事を言っているのは勝てない。さらにつけ加えるなら、部下を犠牲にしても勝利をもぎ取らねばならない物なのである。敗北は滅亡につながり、自国に住む人々の運命を狂わせてしまうのだから。

兵士六人の犠牲で戦争を勝利へ導いたのならそれは成功だ。竜也には全体を見る目、いわゆる大局観が欠けている。マルシアはその点を指摘したいと思いつつも逆らわなかった。彼は今の自分にとって最も頼りになる存在だ。ここで衝突して袂を分かつのは得策でない。

「ごめんなさい、あなたの言う通りだよ。今後は気をつけるから」
「わかればいいんだ」

やがて城塞都市の制圧が完了し、マルシア隊は帰還した。ガルフやブラッドは兵舎に行く事になったが竜也は別枠らしい。つれていかれたのはマルシアの部屋だった。床には緋色の絨毯が敷いてあり、木製のテーブルや椅子、暖炉やベッドがある。茶色い壁には金色の燭台が埋め込まれている他、数枚の絵画も飾られており単なる小隊長の部屋には見えない。

竜也は部屋の中央にある丸いテーブルに近づき、椅子に腰を下ろした。マルシアもお茶菓子を並べてから腰を下ろす。しばらく沈黙が流れた後、竜也は周囲を見回しながらたずねた。

「なんでお前だけこんな扱いなんだ？」

「ラグラスがね、男ばかりのむさ苦しい部屋に押し込めておくわけにはいかないって」

「それにしても豪華すぎないか？」

「気を使ってくれてるんだろっね」

「女性っていうだけで？」

マルシアが沈黙したのを見て、竜也はピンときた。

「まさかあのおっさん、お前の事を……」

「違う違う。あの人は奥さんいるし、しかも溺愛してるから」

薄幸の姫君

竜也にはいよいよわからない。単なる小隊長のマルシアがなぜ優遇されるのだろう。首をかしげていると、彼女はこちらを見つめながら言った。

「私の本名を教えてあげる」

「え、マルシアじゃないのか？」

「マルシア・レイゼル・リヴ・ウィンストンだよ」

「やけに長いな」

「うん、まあね。特別扱いされてるのはそれが理由。戦場じゃそうもいかないけど」

名前が長いと特別扱いされるという理屈が、竜也にはさっぱり理解できない。

「じゃあ俺がリユーヤ・チンパンジー・トドロキって名前だったら優遇してくれるのか？」

「う、うーん」

「なんかよくわからないな、もっと詳しく教えてくれよ」

「ごめん、無理」

竜也は追及をやめて紅茶を飲みだした。マルシアも無言で飲んでいる。しばらく沈黙が流れた後、彼女が再び口を開いた。

「そう言えばさあ。私は潔く降伏したけど、あのお姫様には全然その気がないんだよね。目茶苦茶強い上にあきらめが悪いから。今もラグラスの部下を斬り倒しながら逃げ回ってると思うよ」

「え、お姫様って？」

「アイリーン様だよ。まあ今は王が代わっちゃってるから、元王女とでも言えばいいのかな」

「ええええええ？」

「何も知らないんだね、あなたって」

「当たり前だろ、元々この世界の人間じゃないんだから」

マルシアは席を立ち、一枚の地図を持ってきた。それには四つの大陸と海が描かれている。

彼女が地図を指差しながら言う。

「今私たちがいるのはエルブレイス王国。ルザルム大陸にある七つの国の中で一番の強国だよ。去年まではアルバート様が王位についてたけど、今はグラナドウス様に代わってる」

「えーと、それは強引に奪い取ったんだっけ？」

「うん、革命を起こしてね。戦乱の中でアルバート様もご家族も亡くなられたけど、アイリーン様だけが生き残ってるよ」

竜也はアイリーンの端正な顔を思い出していた。今はどうしているだろう。無事に逃げのびる事ができたのだろうか。

「それでね、今のエルブレイス王はものすごく好戦的で野心的なのだからしょっちゅう兵士を前線に送って、領土の拡張に努めてるんだよ」

竜也は無言でうなずいた。自分たちはそのために城塞都市へ派遣されたらしい。

「ガルフやブラッドは他の国から捕虜としてつれてこられたの。それで奴隷として扱われていたんだよ。重労働をさせられたり殺し合いをさせられたりね」

「俺もそうだったわけか」

「うん。今は違うから安心して」

「それで、お前は？」

マルシアは黙り込んだ。自分の身の上についてはしゃべりたくないらしい。

マルシアの告白

それきりマルシアは口を閉ざしてしまい、何も話そうとしない。竜也はしばらく菓子を味わった後にたずねた。

「わかった、もう聞かない。それで、俺は今後兵舎に寝泊まりすればいいのか？」

「ここに泊まればいいよ」

思わず茶を噴き出しそうになったが、なんとかこらえた。いくらなんでもそれはない。

「今後、あなたの言う事ならなんでも聞くよ。その代わり……」

「その代わり？」

「私の剣になつて。お願い」

彼女は真剣な顔をしてこちらを見つめている。竜也は面喰らいながらも口を開いた。

「部下として力を貸してるだろ。それじゃ不満なのか？」

「そんなレベルの話じゃないの」

「えっ……」

「こつちに来て」

マルシアは立ち上がり、ベッドに座り込んだ。さらに手招きをする。それを見た竜也は硬直した。どうすればいいのかわからない。

「ねえ」

「わ、わかったよ」

彼はどきどきしながらマルシアの横に座った。ウェーブのかかった金のロングヘアに碧い瞳、白い肌。切れ長の目にすっきりした輪郭、すらりと長い手足。文句なしに美少女だ。

「私には殺したい人間が二人いるの。でも所詮は女だし、自分の力だけじゃどうにもならない。毎日歯噛みをしながら暮らしていた所にあなたが現れたんだよ」

「そ、そっか」

「今後、竜也と私は一心同体、一蓮托生」

「え……」

「あなたは私を自分の物だと思っていいよ。その代わり、私もあなたを使わせてもらうから」

竜也は戦慄した。彼女は誰かを殺すために自分を利用しようとしているのだ。

「冗談じゃない、殺人の片棒を担ぐなんてまっぴらだ」

「お願いだよ……」

マルシアは突然抱き着いてきた。いつの間にかその手には短剣が握られている。

「くっ……」

彼女が切れ長の目を細めながら言う。

「私はあなたを見込んだからこそ、この話を打ち明けたんだよ。断るって言うなら生かして帰すわけにはいかない。ここで死んでもらうから」

しっかりと抱きしめられた上、首筋に短剣が突き付けられている。逃げられない。

「お前……正気か？」

「至って正気だよ。お願い、私と一心同体になって」

「……わかった」

「本当に？ もし裏切ったら後ろから刺すよ？」

「裏切ったりしない、約束する」

マルシアはにっこりと微笑んだ。

「確かに聞いたよ。今後、あなたの体は私の物だからね」

「ああ」

「その代わり、あなたも私の体を自由に使っていていいから」

「う、うん」

とんでもない約束をさせられたものだ。竜也は驚きのあまりひたすら固まっていた。

最強の副官

竜也はその後、マルシアの部屋に寝泊まりする事になった。しかし彼女に手を出してはいない。ここにいる理由は、兵舎より快適だからというだけだった。

マルシアにはそれが不思議でたまらない。自分の体を投げ出して竜也を味方に引き入れたのに、彼は指一本触れようとしないのだ。その態度は以前と何も変わらない。こつも淡泊だと逆に不安になってくる。

彼女はベッドに横たわりながら声をかけた。

「ねえ、竜也」

「何？」

「あなたって女性に興味ないわけ？」

「あるよ」

「じゃあ、なんで私に手を出さないの？」

「自分の彼女でもない人間にどうして手を出せるのか、逆に聞きたいくらいだよ」

「へー、変わってるね。その若さでさあ」

彼の前で着替えていても、下着姿でうろついてもまるで反応がない。マルシアはその自制心に感銘を受けた。これが年配の人間ならいざ知らず、竜也はやりたい盛りの若者なのだ。目の前に半裸の美少女がいたら、これ幸いとばかりに迫っても不思議ではない。

「これはいい買い物をしちゃったよ、しかも代金未払いで」

「はあ？」

「ううん、なんでもない」

神業と言えるほどの剣技、強健な体、それに加えて鉄の自制心。しかも、ガルフやブラッドといった歴戦の猛者すら従える男。今の自分にとってこれほど頼もしい味方は他にいない。マルシアは嬉しくてたまらなかった。きつと彼は自分の剣となり盾となってくれる

だろう。しかもこれ以上ないくらい強力な剣と盾に。

竜也はゴルフたちに会うため部屋を出た。長い廊下を歩いていくと、向こうに長身の男性が見える。金色の甲冑と緋色のマントに身を包んだラグラスだ。

「よう、おっさん」

「竜也、ちょうどよかった。先日の報奨金を渡そうと思ってな」

彼はずっしりと重い麻袋を手渡してきた。中には銀貨が入っている。

「なんかどえらい金だなあ、この国でも銀は貴重なんだろう？」

「ああ、まあ好きに使え。それから、お前を小隊長に格上げしようと思っただがどうだ？」

「それは辞退させてもらうよ。興味ないし」

「残念だ。マルシアは中隊長に格上げされるのに」

「ああ、じゃあ彼女の補佐役にしてくれよ」

「ふむ、ではマルシアの副官という扱いでいいか？」

「うん」

「了解した」

竜也はラグラスと別れ、兵舎へと歩いていった。レンガ造りの建物に入ってゴルフたちを探したが見つからない。そこで、近くにある野外訓練場へと足を運んだ。

二人目の王女

野外訓練場という名前は付いているが、実際は単なるただっ広い空き地だ。ここでは兵士たちが木製の剣で打ち合ったり、砂を入れた袋を上げ下げして体を鍛えたりしている。竜也はガルフとブラッドが模擬戦をしているのを見つけた。ガルフは大金づちを模した武器を、ブラッドは三又の槍を模した武器を持っている。どちらも木製だ。

ガルフの声が響き渡り、同時に強力な斬り下ろしがブラッドに襲いかかる。

「おおおおっ！」

だがそれは綺麗にかわされた。今度はブラッドの反撃だ。正確無比な鋭い突きが相手を目がけて放たれる。

ガルフは体を回転させてかわし、同時に武器を一閃させた。しかしこれも当たらない。その凄まじい攻防に周囲の兵士たちが感嘆の声を上げている。

「やっぱ強えな、あいつら」

「ああ、闘技場でもすば抜けてたしな」

「奴らだけは敵に回したくないもんだ」

竜也はその声を聞きながら歩いていき、二人に声をかけた。

「よう、がんばってるな」

ブラッドが満面に笑みを浮かべる。

「おお、竜也！」

ガルフも微笑みながら、構えていた武器を下ろす。

「お前、小隊長に出世したんだって？ よかったな」

「いや、それは断った」

「なんだ、せっかくのチャンスなのに」

「そんなもんに興味ないよ」

ガルフはブラッドと顔を見合わせて肩をすくめた。彼らにとって

竜也の出世は嬉しい話だが、本人が興味なしと言っなら仕方がない。ブラッドがここにこしながら言う。

「そういや、ラグラスが報奨金をくれたんだよ。せつかくだから街に繰り出してうまい物でも食べようと思っただけだよ」

ガルフも口を合わせる。

「そうそう、ついでに女も引っかけようかと思ってな。まあ、元奴隷の俺たちに誘われてついてくる奴がいるかどうかわからないけど。竜也も来るか？」

「えっ」

「ああそうか、お姫様と一緒に暮らしてるんだし女には餓えてないよな。いや、元お姫様が」

竜也は目をしばたいた。自分がそんな人間と暮らしているなど初耳だ。

「お姫様って？」

今度はガルフが目をぱちぱちさせている。

「お前、本当に何も知らないのな。無知もここまで来るとすごいぞ」
「だから、俺は他の世界の人間なんだっつもの。それより姫って誰だよ、アイリーンの事か？」

「マルシアだよ」

「はあ？」

呆然としてみると、ブラッドが呆れながらも説明してくれた。

「かつて、この世界には八つの国があっただな」

「え、七つじゃないのか？」

「一つ滅亡したんだよ。マルシアはその王女だったんだ」

新しい任務

竜也はその場に立ち尽くしていた。この世界に来て出会った二人の女性がどちらも元王女だったという事実に驚きを隠しきれない。

「なんで滅亡した国の王女がここにいるんだよ？」

「さあ、それは知らない。本人に聞いてみたらいいんじゃないか？」

「自分の事を話したがないんだ、あいつ」

「そうか。まあ悲惨な過去だし無理もないな」

竜也はしばらく二人と雑談した後、マルシアの部屋に戻って聞いてみたが返答はなかった。

それから三日後、竜也とマルシアはラグラスに呼び出された。場所はラグラスの部屋だ。中央に長方形のテーブルがあり、その周りに二十脚の椅子が並べられている。呼ばれたのは自分たちだけではないらしい。他にも、革の鎧を着込み長剣を佩いた十人の男性が席に着いている。年齢は二十代、もしくは三十代だ。

ラグラスは全員が着席したのを見届けてから口を開いた。

「今回、皆には輜重隊として働いてもらう。する事は食糧と武器の運搬だ。目的地はラウムハウトの砦で敵国の領地内にある。先般、我が軍がそこを陥落させて占領したのだが、食糧と矢が不足しているそうさ。なので大至急届けてもらいたい」

竜也は話を聞きつつ、周囲の男性たちを観察していた。九人は精悍な顔とたくましい体をしているが、残る一人はひよろひよろと痩せており頼りない。戦闘に巻き込まれたらすぐ死にそうな感じだ。

ラグラスの話がさらに続く。

「今回集まってもらったのは中隊長と副官だ。全員がばらばらに動いてくれているので総指揮官を決めておく。コルネリオ殿」

「は、はっ」

返事をした人間に皆が視線を向ける。なんとあの痩せた男だ。

「本来は大隊長が指揮を執るのだが、あいにく一人もおらぬのでな。貴殿にお任せする。よろしいかな？」

「はっ、全力を尽くさせていただきます」

「よし、決まりだな。出発は二日後だから各々準備をしておいてくれ。では解散」

中隊長たちは次々と席を立ち退出していく。竜也とマルシアも出ていこうとしたそのとき、ラグラスに呼び止められた。

「待て、お前たちにはまだ話がある」

「なんだよ」

「まあ座れ」

残されたのは竜也とマルシアだけだ。他の人間がいなくなったところでラグラスは扉を閉め、席に着いて再び話し始めた。

「今回の任務について何か質問はないか？」

「聞いていいなら聞くけどさ、なんであんなのが指揮官なんだ？」

輸送任務 1

「彼はさる大貴族のご子息でな、粗略に扱えないんだよ」

「この国って強いのが全てなんじゃないのか？ 実力のある奴が上に行くんだろ？」

「例外中の例外があれだ。それでな」

ラグラスは声をひそめて話を続ける。

「おそらく彼は、戦死するか逃げ出すかのどっちかになると思う。

その後はマルシアが指揮を執れ。これは委任状だ」

彼は懐から一枚の紙を出してマルシアに渡した。何やら文章が書いてある他、サインもしてある。

「もう一つ言っておく。食糧を届けるのは至上命令だ。途中で敵襲にあつて奪われたなら、なんとしてでも奪い返せ。逃げ戻ってくる事は許さん」

マルシアが真顔でうなづく。

「かしこまりました、どうぞお任せください」

「まあ、お前なら心配ないだろう。頼んだぞ」

竜也はマルシアと一緒にラグラスの部屋を出て廊下を歩いた。彼女は顔をこわ張らせ、全身から殺気を噴き出している。何やら物騒な雰囲気だ。

「おい、マルシア」

「何？」

「任務の前だから緊張してるのか？」

「そんなんじゃないよ」

「じゃあなんで……」

「聞かないで」

竜也は口を閉ざして歩き続けた。彼女は一心同体と言いながら、自分自身についてなかなか教えてくれない。そこが不満ではある。やがて二人は部屋に戻り、出発に向けて準備を始めた。

二日後の早朝。

輜重隊の面々が勢揃いした。総勢一千人、十個中隊で構成される大隊だ。総指揮官はコルネリオ。金髪碧眼のほっそりした優男で、銀色の甲冑と群青色のマントを身に着けている。

その他の隊長や兵士たちは革の鎧、長手袋、ロングブーツ、長剣に弓矢といったいで立ちだ。ガルフの大金づちとブラッドの三又の槍だけが例外である。

運搬するのは大量の穀物と根野菜、弓矢。到着までに三日はかかるので日もちのしない物は運べない。その他に水やらパンやらも携帯しているが、これらは自分用だ。いずれ尽きてしまっただろう。

ラウムハウトの近くにある街までは一本の街道が通じている。普段は交易を目的とする商人が行き来しているのだが、戦争が起これば馬車や兵士が使用する。今回コルネリオ隊はこの街道を通っていく事になった。

竜也は用意された荷馬車の列を眺めた。山のように荷物を積んでいるので速く走らせるわけにもいかない。おまけに隊員の大部分が歩兵ときている。つまり大量の食糧を抱えながらゆっくり進んでいくわけで、機動力は最低レベルだ。騎馬隊に襲撃でもされたら全滅の危機が待っている。

輸送任務2

ガルフが、馬車の荷台に山積みになされた麻袋を叩きながら言う。

「竜也、とりあえず食いつぱぐれだけはないぞ」

「いや、そりゃそうだけどな……」

マルシアに視線を移すと、彼女はコルネリオをじっと見つめている。竜也は笑みを浮かべながら話しかけた。

「もしかして、ああいうのが好みなのか？」

「違うよ、かわいそうだな」と思って」

「なんで？」

「敵国の街道を食糧しよって進軍するんだよ？ 干し肉持って狼の群れの中を歩くのと変わらない。あの人たぶん死ぬだろうね。別にいいけど」

「ちょ、お前も行くんだろ……」

「ラグラスもよく『あんな役立たずは死ねばいいのに』とか言ってるし」

「えっ？」

竜也は目を白黒させている。マルシアは全然気にせず、ぽんぽんと彼の肩を叩いた。

「頼りにしてるからね。あ、それから……今後は私、二刀流でいくから。一本より二本の方がいいよ」

「……そっすか」

やがて進軍が始まった。荷馬車が動きだし、その周囲を兵士たちが固める。先頭にいるのはコルネリオと二つの中隊だ。マルシア隊は馬車の左側に配置された。

自国を出るまでに約一日かかったものの、その間には何も発生しなかった。問題はこれからだ。

軍勢が自国と隣国の国境にたどり着いたとき、竜也はマルシアにたずねた。

「なあ、他の道を行くのは駄目なのか？」

「それはそれで厳しいね……他にいい道がないから。荒地とか湿地帯とかを通るよりは街道を進んだ方がずっと速いよ。確かに目立つけどね」

街道は整備されているが、周囲は荒地や湿地帯である。車輪がぬかるみにはまって動けなくなったりしたら大変だ。はまらなかつたとしても行軍の速度は遅くなる。しかも、目的地付近へはまっすぐに続く街道を使わないなら、それだけ余計な距離を歩かなければならない。

「でもこれじゃ、狙ってくださいと言わんばかりだよな」

友軍が砦の一つを確保したものの、周囲に点在する城、砦、城塞都市は手付かずだ。いつ敵が現れてもおかしくない。そんな中、隊長と御者を含めてたった千人で進むというのはどうなのだろう。竜也は不安を感じざるを得なかった。

一方、先頭にいるコルネリオは傍らの部下に文句を垂れている。

「あー、なんという事だ！ この私が輜重隊だと？ ふざけるな。

もつとふさわしい役目があるだろう！ ああん？」

「は、はっ」

「そう思っただろ、ああん？」

「は、誠に」

「違うか、ああん？」

「……」

輸送任務3

部下のげんなりした顔も気にせず、コルネリオの愚痴はさらに続く。

「こんなかつこよくて勇敢で天才な私が食糧運びだと？ ラグラスは目が腐っているに違いない。これだから凡人は困るのだ！ 本来なら華々しく先陣を切り、並み居る敵をばったばったと薙ぎ倒し、女の子たちをキヤーキヤー言わせて、ぐふふふ。聞いてるのか、ああん？」

部下は呆れてそっぽを向いているが、コルネリオはお構いなしに話し続ける。竜はその様子を見てつぶやいた。

「う、うぜえ……なんだあいつ」

マルシアも眉をひそめながら同意する。

「いつもあんな感じだからねえ、近寄りたくないよ」

「あんなの部下として戦わなきゃならないのか……」

「大丈夫、あれは真っ先に逃げるから無視でいいよ」

そのとき、馬に乗った若者が前方から向かってきた。斥候を務めている騎兵だ。彼はコルネリオのそばで馬を止めて報告した。

「申し上げます！」

「何事だ、私に焦がれる女性たちが大挙して押し寄せたのか？」

「いいえ、敵襲です」

「ぶぎゃー！」

「騎兵が五百、歩兵が一千。正面から来ます」

「ぶぎゃぶぎゃー！」

「距離は約一千マイル、もうじき現れると思われれます」

「ぶぎゃぶぎゃ、ぶぎゃぎゃあああー！」

馬から転げ落ちそうになっているコルネリオを、周囲の部下たちがあわてて支えている。指揮官としての判断が求められるときであるのに、本人はそれどころではない。

見かねた部下の一人が口を開いた。

「どうか落ち着いて、ご指示をお願いします」

「な、なんだと？　これが落ち着いていられるか！　味方は千、敵は千五百。どう考えても勝ち目はないでないか、ああん？」

ひたすら騒ぎまくる彼を見て、マルシアの顔がぶるぶると震えている。今にもぶち切れそうだ。

「竜也」

「え？」

「敵兵と戦う前に、あれを叩き斬っていいかな。いいよね？」

「駄目に決まってるだろ、落ち着け！」

そのとき、前方に騎兵の姿がちらほらと見えだした。まだ襲撃してくる気配はないにも関わらず、コルネリオの狼狽ぶりは今や最高潮だ。

「てつてて敵だああ！　死ぬ、死ぬうつうつ……うえつうえつ」

涙を流し鼻水を垂らしながら騒ぐ彼を見て、竜也は啞然としていた。あまりにもひどい。指揮官がこれでは全滅もありえる。

輸送任務4

竜也はマルシアに近づいてささやいた。

「やばいぞ、どうする?」

「うーん……とりあえずひっぱたいてみようか。』目を覚ましなさい、このお馬鹿!』って」

「そんな事したら余計に泣き叫ぶぞ」

眼前に広がる荒野に続々と敵兵が集結している。もう一刻の猶予もない。

「マルシア、そろそろなんとかしないと……」

「ああ、もう!」

彼女は眉を吊り上げながらコルネリオに近寄った。竜也やガルフ、ブラッドも続く。

「コルネリオ様!」

「ぶぎゃー」

「すぐに部隊を横に展開させてください。縦に並んだ状態では弓矢を使えません」

「ぶぎゃあああ」

「幸い、こちらには山ほど矢があります。活用しない手はないでしょう。騎馬隊の突撃を受ける前に彼らの足を止めるのです」

「ぶぎゃあああ」

「いい加減にしないで、このお馬鹿!」

思いきり頬をひっぱたかれ、コルネリオは目をむいて叫んだ。

「貴様、総指揮官に手を上げたな! 万死に値するぞ!」

「申し訳ございません」

「悪いと思ってるならするな!」

「懲罰なら甘んじて受けます。でも今は危機的状況の打開を優先させてください」

「むっ……」

コルネリオは真顔でマルシアを見つめた。確かにこのままでは全滅するだけだ。

「ふむ、やむをえん。それなら奥の手を使おう」

彼の瞳に強い光が宿っている。マルシアはその様子を見て胸を撫で下ろした。そんな秘策を隠しているとはさすが総指揮官だ。

コルネリオは右手を高々と上げ、部下たちを見回しながら言った。
「全軍退却！」

マルシアは絶句し、竜也は息を呑んだ。敵の兵数が自軍を上回る今、退却は有効な方法に思える。しかし、実行すればおそらく助からない。味方の大部分が歩兵であるのに対し敵には五百人の騎兵がいるからだ。

人間がいくら走って逃げたところで馬の速度にはかなわない。結果として、コルネリオ隊は背後から騎馬隊の突撃を喰らう事になる。散々蹂躪された所で歩兵にも追いつかれ、包囲殲滅されるという筋書きだ。つまり待っているのは全滅である。

竜也は真っ青になりながらマルシアに話しかけた。

「冗談抜きで終わるぞ、こりゃ」

彼女は強くうなずき、コルネリオに向かって叫ぶ。

「どうかご再考を、そのような事をすれば全滅です！」

「やかましい、退却と言ったら退却だ！ 上官の命令が聞けないのか！」

コルネリオはまるで耳を貸そうとしない。マルシアはあきらめ、自分の隊の人間をつれてその場を離れた。

輸送任務5

マルシアはコルネリオから距離をとり、竜也と密談を始めた。あんな指揮官の下についていたら命が危ない。

「どうしよう。こうなったら戦列を離れて別の方向に逃げる？」

「軍令を無視してか。そうした所で助かる保証はないぜ」

「何をしたところで助かる保証なんかないよ」

「いや、でもなあ……」

自分たちだけ他の方向へ勝手に逃げ出したら、残された友軍はどうなるだろう。不利な状態に加えて味方の逃亡が追い討ちをかければ浮足立つ事は間違いない。後は統制を失い、包囲殲滅されるか各個撃破されるかのどちらかだ。

「マルシア、一人でも多くの味方が助かる方法を探そう。俺たちだけ逃げるのはなしだ」

「うーん……」

「まず、総指揮官に退却を思いとどまらせよう。いきなり退くのはあまりにも危険すぎる」

「どうやって？」

「ラグラスの委任状を使うんだ」

竜也はマルシアに耳打ちをした。彼女が大きくうなずく。

「なるほどね、わかったよ」

「あと、その後の作戦なんだけどさ。とりあえず問題は騎馬隊だろ？」

「うん」

「それなら効果的な方法がある。あの臆病者に伝えてくれ」

竜也はマルシアに戦法を教え、コルネリオの所へ向かわせた。

一方、コルネリオは部下たちを前に騒ぎ立てている。

「ええい、何をしている。さっさと退却を始めろ！ 私を守りなが

ら退くんだ！」

「わ、わかりました」

「周りに人間の壁を作れ。お前ら兵士などいくら死んでも構わんが、私が死んだら終わりだからな！」

周囲の部下たちはげんがりしていた。この男は自分が助かる事しか考えていない。もちろん指揮官の命は重要だが、だからと言って彼だけが助かればいいというわけでもないだろう。

皆があきらめて退却の準備を始めた所に、ひょっこりとマルシアが現れた。顔には笑みを浮かべている。

「コルネリオ様」

「なんだ、女。まだ何か用か」

「逃げたいのなら、ご自分だけお逃げになってください。私たちは残ります」

「はあ？」

コルネリオはしばらく彼女を見つめた後、盛大に吹き出した。

「馬鹿か貴様は、そんな事したら誰が指揮を執ると言うのだ！」

「私が執ります」

「ふざけるな、なんの権限があつて……」

マルシアはラグラスの委任状を取り出して突き付けた。コルネリオは目を丸くしてそれを見つめている。

「な、なんだ……これは……」

「見ての通りです。あなたが逃走した場合、私が引き継ぐ手筈になつていのです」

「逃走と退却は違うだろうが！」

「もちろん違います。ですから、あなたは部隊を放棄してご自分一人でお逃げになってください。そうしていただければ私は堂々と指揮を執る事ができます」

コルネリオは驚きのあまり声も出ない。彼女に委任状が出されているなど夢にも思わなかった。これは、自分がラグラスに全く信用されていないという事の現れではないか。

輸送任務6

「コルネリオの顔がみるみる赤く染まっっていく。

「どいつもこいつもコケにしおつて。私を誰だと思ってる。国内随一の名門貴族、ラルフスタイン家の嫡男だぞ。わかってるのか、ぶぎゃー！」

彼は拳を振り上げ、地団駄を踏み、つばを撒き散らして騒ぎたてる。見た目は二十歳くらいなのに中身は幼い子どもだ。マルシアは爆笑したいのを必死でこらえながら、祈るような仕種をした。

「心中お察し致します。ラグラス様はひどいですね」

「黙れ、貴様も同じくらいひどいわ！」

「いいえ……偽らざる本心を申し上げれば、委任状など受け取りたくなかったのです。コルネリオ様のように勇敢で聡明な方が指揮を執られるのが一番ですもの」

「なんだと？ さっき一人で逃げると言っていたではないか！」

「コルネリオ様がどうしても退却したいと仰せになるなら、そうせざるを得ないのです。輜重を守るのは至上命令ですから。しかし実際の所、私のような小娘がいくらがんばった所であなた様の足元にも及びません。どうかここに残っていただけませんかでしょうか？」

「知った事か、もう退却すると決めたのだ！」

「本当にそれでよろしいのですか？」

マルシアはまっすぐに相手を見つめた。一方、コルネリオはうろたえている。

「何がいけないと言うのだ。私は危険が迫ったから退却命令を出し、お前たちはそれに従う。問題ないだろうが！」

「食糧と武器を輸送するよう命じられながら、敵の姿を見た途端にそれを放り出して退却した。この事実が国元に伝われば、あなた様の評判は地に堕ちる事となりましょう。ラルフスタイン家の名前にも傷をつける事になります。よろしいのですか？」

「コルネリオは言葉に詰まった。プライドだけは人一倍高い彼にとつて、そんな屈辱は耐え難い。」

「どうかお願いです。この戦いを勝利に導けば、コルネリオ様は勇将として讃えられる事になるでしょう。それは、あなた様に心酔している私たちにとつても何よりの喜びです。指揮をお願い致します！」

「う、うーむ……そなたらが私に心酔していたとは知らなんだ」

「なにとぞお願い致します。あなた様が指揮を執る姿を見れば皆も勇気づけられるでしょう。この戦いに勝てるかどうかはコルネリオ様にかかっているのです」

「むう……」

彼は腕を組んで考え込んだ。踏みとどまって戦うにしても策がない。このまま敵軍と衝突すれば敗北は必至である。

輸送任務7

困惑しているコルネリオを見て、マルシアは笑みを浮かべた。

「敵軍には五百人からなる騎馬隊があり、こちらにはそれがない。確かにその差は大きいと思います。まともなぶつかれば一敗地にまみれるでしょう」

「わかっている。しかし、どうにもならないのだ。周りを見てみるがいい」

コルネリオは周囲を見回した。マルシアもそれに習う。四方には渴いた大地が広がっているだけで、敵兵と騎馬以外には何も無い。

「聞け。えーと、マル……」

「マルシアです」

「野戦において地の利は大事だ。例えば兵数で劣っていても、有利な場所を占拠していれば勝機はある。しかし、こんな平地では手の打ちようがない。むしろ敵の騎馬隊に有利に働くだけだ」

マルシアはコルネリオを少し見直した。てっきり何も考えていないかと思っていたが、そうでもないらしい。

「大丈夫です。有利な地形がないのなら、それに相当するものを作ればよいのです」

「ほう……」

彼は感嘆しながら目を見開いた。その瞳に光が宿っている。

「聞こう。そなたの策が我々を救う鍵になるやもしれぬ」

マルシアはしばらくコルネリオと言葉を交わした後、竜也の所に戻ってきた。その顔に笑みを浮かべている。

「うまくいったみたいだな」

「うん、聞き入れてくれたよ。すぐに実行するってさ」

「そうか、よかった。後はあいつに任せよう。まだ心配ではあるけどな」

竜也もまた、少しだけコルネリオを見直していた。独断専行の指揮官とばかり思っていたが、部下の話を聞く耳も一応は持っているらしい。それならまだ望みはある。

やがて、コルネリオは中隊長を集めて指示を始めた。

エルブレイス軍コルネリオ隊を狙うのは、カールハイム軍ウエルズ隊だ。総勢千五百人。内訳は歩兵が千、騎兵が五百。歩兵の装備は剣、と弓、槍、革の鎧。騎兵も同じである。

隊長のウエルズは慎重な性格だった。敵軍を捕捉しながらも突撃を敢行しなかったのはそれによる所が大きい。

本来、カールハイム軍が手っ取り早く勝利したいのであれば次のような方法がある。まず、弓を構えた歩兵を前に出して射撃戦を行う。目的は二つ。一つはコルネリオ兵の漸減であり、もう一つは矢を尽きさせる事だ。

なぜ矢を尽きさせる必要があるかと言うと、騎兵にとって飛び道具は脅威だからである。人馬が合わせて突撃すれば破壊力は相当な物だが、それを射撃する側から見れば恰好的だ。兵を射れば落馬するし、馬を射ればその足が止まる。つまり、十分な射撃能力を持つ相手に対して突撃を敢行するのは無謀でしかない。

輸送任務 8

そのため、まず敵の射撃能力を削ぎ落とす必要があるわけだ。

しばらく射撃戦を続けければコルネリオ隊の矢は尽き兵士の体力も落ちてくる。そこを狙って騎馬隊を一気に突撃させ、戦列を分断。敵が浮足立った所を見計らい歩兵が突撃、各個に撃破する。これで終わりだ。

ところが、この方法には大きな落とし穴が存在する。敵が輜重隊である事を考えていないのだ。ウエルズが放った偵察兵の報告によれば、コルネリオ隊は大量の弓矢を保持している。つまり、敵の矢が尽きる前にこちらの矢がなくなってしまう。そうなれば歩兵も騎兵も、共に射撃の的になるだけだ。

ウエルズは自分のあご髭をいじりながら思案に暮れていた。三十がらみの男性だ。短い黒髪に浅黒い肌、彫りの深い顔に鋭い目つき、がっしりした体格。鉄兜と鎖かたびらを身に着け、腰には剣を佩いている。決して臆病な性格ではないのだが、味方が受ける甚大な被害を考えるとなかなか攻撃に踏み切れない。

そこで彼は消極策をとった。兵力差を見せつけて威嚇し、敵が怖じけついて逃げだすのを待つのである。偵察兵の報告によれば、エルブレイス軍の指揮官は「退却退却」と騒いでいたらしい。願ったりかなったりだ。正面きつて戦えばこちらにも大きな被害が出るが、逃げる敵を背後から攻撃する事ができれば被害を最小限に抑えられる。

やがてコルネリオ隊に動きがあった。縦一列に並んでこちらを向いている馬車が、大きく円を描くように方向転換して後退を始めたのである。

ウエルズはそれを見て吹き出しそうになった。敵の指揮官は輜重に乗せた馬車ごと退却するつもりらしい。そんなお荷物を抱えて逃げ切れるとも思っているのだろうか。

部下の一人が話しかけてくる。

「ウエルズ様、今こそ攻撃の機会では？」

「いや、奴らが完全に背を向けるまで待て。ただし、いつでも突撃できるように準備だけはしておくんだ」

彼はにやにやしながらコルネリオ隊を眺めていた。エルブレイスの指揮官はよほどの馬鹿に違いない。いつ騎馬隊の突撃を喰らってもおかしくない状態で、輜重などに構っている場合か。

自然に笑みがこぼれてくる。

「くくっ……まさかここまで頭の悪い人間がいたとはな。己の愚かさを悔やみながら荒野に骸を晒すがいい。ははは、はーっははは！」

輸送任務9

ところがどうも様子がおかしい。コルネリオ隊は荷馬車の列で巨大な円を作り、全員がその中に入った上で馬をはずし始めたのだ。さらに、積んでいた麻袋を馬車と馬車の間に次々と投げ下ろしている。

ウエルズはその様子を呆気に取られながら眺めていた。コルネリオ隊は人も馬も、荷馬車と積み荷で作った囲いの中に入ってしまった。これでは騎馬隊が突撃できない。

部下の一人が興奮しながら言う。

「ウエルズ様、あれは一体……」

「どうやら一杯食わされたわ。退却退却と騒いでいたのは演技だったか」

「我々はたばかられたのですか？」

「そつだ。敵の指揮官の名は？」

「コルネリオだそうです」

「なんとという策士だ……敵ながら恐れ入った」

偵察の報告によれば、さっきまでは一兵卒に至るまで「退却」の言葉を口にしていた。それが今はどうだ。

カールハイムの偵察に見られている事を想定し「退却」という偽の情報を流す。それで敵を油断させておいて、その間に馬車で防壁を作ってしまう。なかなかできる事ではない。

実際は演技でなかったのだが、彼がそこまで見抜くのは無理だった。コルネリオ隊の鮮やかな動きを見て「敵の指揮官はひとかどの策士だ」と思い込んでしまったのである。

「くっ……たかが輜重隊に、なぜそこまでの人材が……」

ウエルズは齒噛みして悔しがったが、状況は変わらない。

「ウエルズ様、いかが致しましょう」

「防壁の中にいる敵と戦うのは難しい。挑発して外におびき寄せ」

そこで数人の兵士がコルネリオ隊に近づき、馬車の外側から次々と罵声を浴びせた。

「こんな防壁に頼らなければ戦もできないとは、エルブレイスの指揮官も堕ちたものだな！」

「出てこい、腰抜け！ まともには戦う力がないから、こんな穴ぐらにこもっているんだろう？」

「国に帰ったら言い触らしてやるぞ。エルブレイスのコルネリオは天下一の臆病者だとな！」

彼らが爆笑していると、銀色の甲冑を身に着け群青色のマントをまとった男が颯爽と現れた。コルネリオである。

「ほう、私が臆病者だと？ 貴様らの目は節穴か。それとも、見た目は人間だが実は考える力のない木偶なのか？」

ウエルズ兵たちがむっとする中、彼はさらに続ける。

「考えてもみよ。私は千対千五百という兵数差を知りながら、輜重を捨てずこの場に踏みとどまった。対して貴様らの指揮官は有利な立場にありながら手も足も出せずにいる。どちらが腰抜けなのか、少し考えればわかるではないか。ああん？」

兵士たちは一言も言い返せない。さらにコルネリオの話は続く。

「私が防壁を築いたのは少しでも戦を有利に進めるための策だ。臆病風に吹かれたからそうしているのではない。それに比べてカールハイム軍はどうだ。無為無策のまま時間だけを費やしているではないか。今までした事と言えば安い挑発だけときている。これを無能と言わずしてなんと言うのだ。あまり笑わせるな、ぶぎやー！」

兵士たちは激昂し剣を抜いた。そのときだ。

一本の矢が空気を切り裂いて飛んできたかと思うと、彼らの足元に突き刺さった。驚いて周囲を見回すと、荷馬車の上に弓を構えたマルシアが立っている。

コルネリオの話がさらに続く。

「今のは警告だ。次ははずさん。死にたくなければ、さっさと帰って無能な指揮官に伝えよ。『貴様など生かしておく価値もない、そ

の首は私がもらい受ける』とな。わかつたか、ぶぎやぎやー！」

大きく口を開けて爆笑するコルネリオを見て、ウエルズ兵たちは怒り狂った。しかし手が出せない。いつの間にか、無数の敵兵がこちらに向かって弓を構えているのだ。彼らは歯を食いしばりながらその場を後にした。

ウエルズ兵がいなくなったのを確認すると、コルネリオはその場へへたり込んだ。全身にびっしょりと汗をかいている。それを見たマルシアが近づいてきて声をかけた。

「お見事です、コルネリオ様。さすがとしか言いようがありません
「寿命が十年縮んだぞ」

「でも、これで相手が仕掛けてくればしめたものです。有利な状態で戦を進める事ができますから」

「うまくいけばよいものだな」

間もなく、カールハイム軍は弓を構えて前進してきた。騎兵の姿は見えない。コルネリオ隊に防壁があるのを見て、歩兵に切り替えたのである。

マルシアはそれを見て笑みを浮かべた。全てが竜也の目論見通りに進んでいる。相手に騎兵を使わず歩兵同士の戦いに持ち込み、防壁を盾にしながら射撃戦を展開するのだ。これで圧倒的に不利な状況を脱する事ができた。後は兵数差という問題だけである。

輸送任務 10

やがて射撃戦が始まった。コルネリオ隊は荷馬車や麻袋の山に隠れながら敵を狙撃し、ウエルズ隊は全身をさらけ出した状態で戦う。人数では劣るものの、隠れる場所があるという点でコルネリオ隊は有利だった。

本来であれば、ウエルズはこのような状況で戦いを仕掛ける男ではない。しかし敵の指揮官による「無為無策」「無能」といった言葉が頭を占め、戦端を開かざるを得なくなったのである。

もちろん単純に攻撃するだけではない。ウエルズには一つの作戦があった。まず千人の兵でコルネリオ隊を包囲し、注意を引き付けつつ交戦する。その間に防備の薄い箇所を見つけて五百人の兵を突入させ、一気に指揮官を屠るという物である。慎重な彼にしては随分と大胆な作戦だ。しかし、それでも実行するつもりだった。

自分を無能者呼ばわりしたコルネリオを生かしてはおけない。この戦いで見事に勝利し、どちらが上か見せつけてやる。

ウエルズは腕組みをしながら、後方でじつと戦況を見守っていた。突入させる五百人の兵士は待機させているので、現在戦っているのは千人だけだ。隠れる場所がないせいでこちらの被害の方が大きい。このままでは負ける。

しかし、今は辛抱するときだ。ウエルズは心を落ち着かせながら突入の機会を待った。

一方、マルシア隊は友軍の中心で待機していた。戦闘には加わっていない。コルネリオを守るためであり、戦況をじっくりと観察するためでもある。

竜也は、カールハイム軍のうち五百人が後方で待機しているのに気づいていた。マルシアも同じだ。

「マルシア、あいつらはどうして動かないと思う？」

「指揮官を守るためかな……それにしてはちよつと多い気もするね」
「たぶん、こつちのほころびを見つけて突入するつもりなんじゃないかな」

「外側と内側から同時に攻撃されたら大変だよ。早く手を打たないと……」

竜也は大きくうなずき、次に笑みを浮かべた。

「これは逆にチャンスだ。利用しない手はないな」

彼女も微笑みながらうなずく。

「確かにね。じゃあ盛大な釣りをやってあげましょ」

マルシアがコルネリオに次の策を伝えてから間もなく、ウエルズ隊の五百人が一箇所を集中攻撃して突入した。彼らは馬車や麻袋を乗り越えて疾走する。狙いはコルネリオただ一人だ。

輸送任務 11

突入部隊の指揮官は素早く周囲に視線を走らせた。エルブレイス軍は馬車の内側に兵士をずらりと並べ、カールハイム軍の突入を阻んでいる。その中央には銀色の甲冑を身に着け、群青色のマントをまとった二十歳くらいの男性が立っていた。コルネリオである。

指揮官は彼を指差しながら叫んだ。

「見つけた、コルネリオだ！ 必ず仕留めろ、他の敵には目もくれるな！」

隊の面々が剣を振りかざして疾走したそのとき、無数の矢が空気を切り裂いて飛んできた。それが次々と体に突き刺さる。彼らはたまらずに悲鳴を上げた。

指揮官は目をむいて硬直した。反撃を受ける事は予想していたが、それにしても対応が早すぎる。いきなり内部に突入されれば、普通は多少なりとも動揺なり混乱なりするものだ。ところが全くその気配が見られない。

彼は恐るべき事実気づいた。自分たちは突入に成功したのではない。ここにおびき寄せられたのだ。コルネリオはわざと手薄な部分を作り、まんまと相手を釣って包囲する事に成功したのである。

「……謀られた」

指揮官の全身から血の気が引いていく。乾坤一擲の突入は、冥府への扉を開くだけの結果に終わってしまったのだ。

彼は、矢の嵐に倒れていく味方を目の当たりにしながらつぶやいた。

「なんとという男だ……」

コルネリオの姿は見えるのだが、彼に近づけない。このままでは全滅する。

元々、エルブレイス軍は円形に兵士を配置している。その中心に突入すれば四方から矢を受けるのは自明の理だ。それを知りながら

も敢行したのは、迅速な突入によって相手を混乱に陥れるという目論見があつたからである。それが叶わずにきつちりと反撃されてしまった今、後は包囲殲滅されるだけだ。

この苦境を打開する方法はただ一つ、犠牲を省みずコルネリオを仕留めるしかない。指揮官は目をむいて絶叫した。

「全員突撃！ 目標はコルネリオだ！」

味方が矢を受けてはたたと倒れる中、彼らは齒を食いしばって突進した。その前に立ちほだかつた部隊がある。マルシアたちだ。彼女は二本の剣を振りかざして声を上げた。

「突撃！ 一人残らず斬り捨てよ！」

先頭を切つたのは竜也である。彼は突入部隊の兵士たちをにらみつけ、一瞬でその横を払い抜けた。途端に血飛沫と悲鳴が上がる。

さらにガルフも襲いかかった。彼は巨大な金づちを振り回し、敵を革の鎧ごと粉碎していく。兵士たちは味方が肉塊に変えられていくのを見て震え上がった。もう悪夢としか思えない。

輸送任務 12

突入部隊の兵士たちは怯えながらも、竜也を押し包んで斬りかかった。直後に無数の閃光が走り、彼らの首をはねている。竜也の剣は冴えに冴え、周囲の男たちを薙ぎ倒していく。その勢いは留まる事を知らない。

指揮官が真つ青になりながら叫ぶ。

「くっ……邪魔をするな！」

その前に立ちはだかった人間がいる。マルシアだ。彼女は端麗な顔に笑みを浮かべながら言った。

「さあ、どうやって死にたい？ 要望があれば聞くよ」

「き、貴様あつ！」

指揮官は剣を振り上げて斬りかかった。渾身の一撃がマルシアを襲う。ところがそれはあつさりとかわされた。直後に、彼の目の前を二筋の光が十文字に走る。

「うわっ！」

指揮官は咄嗟に後退した。彼女の斬撃の速度を目の当たりにし、顔面は蒼白になっている。マルシアはすかさず踏み込んで左の剣を一閃させ、右の剣で斬り下ろし、続けて左の剣で突きを放った。相手は防戦一方だ。

「こ、この女あつ！ 貴様ごときに……貴様ごときにっ！」

彼は目を見開き、踏み込むと同時に斬りつけた。直後に、その首を焼け付くような痛みが襲う。マルシアの一撃を喰らってしまったのである。

首筋から大量の血を噴き出し、彼はその場に両膝をついた。既に意識はない。周囲の地面がみるみる赤く染まっていく。

突入部隊は大混乱に陥った。竜也やマルシアが戦列をずたずたに切り裂き、他の部隊が取り囲んで包囲殲滅していく。

散々矢を受けて戦闘能力と士気が低下した上に、統制まで失って

しまったのだ。こうなるとともに戦う事などできない。阿鼻叫喚の地獄の中で一人、また一人と命を落としていく。もはや戦闘と言うより虐殺に近かった。

一方、ウエルズは青ざめながらその様子を眺めていた。コルネリオを屠るために突入した部隊が逆に屠られてしまったのだ。既に彼らは全滅の危機に瀕している。

「なんと言う事だ……」

胸が締め付けられる思いだった。自分とコルネリオは指揮官としての器が違いすぎたのだ。やる事なす事、見事に裏をかかれてしまう。豪胆にして頭脳明晰、冷徹なる策士。彼がコルネリオに対して持った印象だった。

今すぐにも逃げ出したい気分だが、危機に瀕している味方を見殺しにするわけにもいかない。彼は残った兵士をかき集め、戦力を集結して突撃した。勝てるとは思っていない。味方を回収しつつ引き分けに持ち込めれば御の字だ。

輸送任務 13

ところがウエルズの采配は、彼の隊をさらなる苦境に陥らせた。

カールハイム軍は矢が尽きかけているのに対し、エルブレイス軍は使い放題ときている。しかも兵を集結させて突撃したため、またもや四方から矢を浴びる事になってしまったのだ。

ウエルズは軍勢を率いながら必死に剣を振るい、やがてコルネリオの姿を認めた。なんとか討ち取りたいが敵兵に阻まれて近づけない。そこで彼に向かって叫んだ。

「貴様がコルネリオだな、一騎打ちを申し込む！ 私と勝負しろ！」

コルネリオはウエルズを見つめ、哀れむような目つきをしながら首を振った。こんな有利な状況でわざわざそんな事をする理由がない。さらに、彼は戦闘にかけてはからっきしなのでやりようがないという理由もあった。

「臆したか、コルネリオ！ 私が怖いのか？」

「笑わせるな、貴様ごときにわざわざ私が出るまでもない。部下で充分だ」

「お……おのれっ！」

「こんな指揮官に率いられた兵士たちこそいい面の皮だな。私ならごめんこうむる」

顔を赤らめて激昂するウエルズの前に、一人の少年が立ちふさがった。竜也である。

「悪いけど、そう言う事だから俺が相手をするよ」

「引っ込んでいろ、小僧！ 貴様などに用はない！」

ウエルズは剣を一閃させた。同時に竜也も斬撃を放っている。互いに相手を狙ったにも関わらず、ウエルズの左腕だけが斬り裂かれていた。

「ぐっ……」

「もうやめておきな、あんたじゃ俺に勝てないよ」

「くっ、くそっ……」

悔しい限りだが、確かに勝てそうもない。そこで彼は跳び下がって周囲の部下たちに命じた。

「かかれ！ あの小僧を斬り刻んでしまえ！」

兵士たちが一斉に竜也を斬りつける。その直後、彼らは鮮血を噴き出しながら崩れ落ちた。ウエルズの顔から血の気が引いていく。

「ば、馬鹿な……」

たかが輜重隊と思っていたのだが、とんでもない。指揮官と言いついては部下と言いついては第一戦で働く戦闘部隊のレベルだ。呆然と立ち尽くしている彼に向かって、コルネリオが声をかけた。

「どうする、まだやるのか？ ここで死にたいのなら戦いを続けてやる。死にたくないならとっと消え失せるがいい。そうすれば見逃してやるっ」

「そう言つて我々が背を向けた途端に襲いかかるつもりだろうが！

もう騙されんぞ！」

「いや、そんなつもりはないのだ」

コルネリオが右手を上げると、エルブレイス軍はびたりと攻撃をやめた。ウエルズは呆気に取られながら相手の顔を見つめる。

「貴様……まさか、我々に情けをかけるつもりか？」

「そう取ってもらって結構だ。さあどうする？」

ウエルズは周囲の部下たちを眺めた。皆が全身に傷を負い息も上がっている。このまま戦闘を続けても勝ち目はない。

「……わかった。我々は退却しよう」

輸送任務 14

ウエルズは敗残の兵をまとめて撤退したが、コルネリオは追わなかった。優先すべきは輜重の輸送であり、敵部隊の撃滅ではない。

コルネリオ隊は再び荷物をまとめて進発した。カールハイム軍を撃退しただけに士気が上がっており、皆が晴れ晴れとした表情をしている。敵は千五百人の約半数を失ったのに対し、こちらの死傷者は二百人に満たない。大勝利だ。

また、この一戦で部下たちのコルネリオに対する評価は一変した。今までは「単なるお荷物」としか思われていなかったのが「深慮遠謀の策士」になったのである。一方、コルネリオも今までの尊大な態度を改めるようになった。今までは自尊心を保つためにそうしていたのであるが、部下たちが畏敬の念を持って接してくれる以上その必要はない。

戦果はそれだけではなかった。帰還したウエルズ隊によって、カールハイム軍にコルネリオの名が広められたのだ。自軍を上回る兵力を持つ相手を散々もてあそび、しかも最後に情けをかけて見逃す。それだけの事ができる指揮官などなかなかいるものではない。

この評判はコルネリオ隊に確実な利益をもたらした。彼らを狙うカールハイム軍が、ことごとく二の足を踏むようになったのである。エルブレイス軍は荷馬車と共に荒野を進んでいく。その中には馬に乗ったコルネリオの姿があり、周囲をマルシア隊が固めていた。

コルネリオがマルシアに向かって話しかける。

「今回勝利を収める事ができたのは、そなたのおかげだ。礼を言う」「いいえ、作戦を考えたのは竜也です。それに、あなたが部下の意見を取り入れてくださったから勝つ事ができたのです」

コルネリオは、しばらく無言で馬の背に揺られていた。部下たちの熱い視線をひしひしと感じる。悪くない。だが、それは自分の実力によってもたらされた物ではないのだ。

「マルシア」

「はい」

「私は今回、一つ学んだ事がある。自分が策士でなくても、聡明な者に策を立てさせればいい。自分が戦士でなくても、屈強な者を戦わせればいい。私のような凡庸な指揮官には、有能な部下を使いこなすという事こそが肝要だとな」

マルシアは黙って聞いていた。確かにその通りだ。指揮官が万能である必要はない。優れた者に代行してもらえばいいのである。

「マルシア、今後も竜也共々力を貸してくれ。もちろん私も精一杯努力する。頼む」

一時の休息

上官に頭を下げられて断るわけにもいかない。マルシアは笑みを浮かべながらうなずいた。

「私のような者でよければ、喜んでお力添えさせていただきます」「うむ、頼りにしているぞ」

彼女はコルネリオに信頼されたところで嬉しくもなんともない。しかし、立身出世のためにこの男を利用するのも悪くはないと思っ

た。もつとも、最終的な目的は別の所にある。出世はその過程に過ぎない。心の中にはどす黒い復讐の炎が燃え上がっている。しかし実行するのはまだ先の話だ。今は辛抱しなければならぬ。

物騒な笑みを浮かべるマルシアを、横から竜也がじつと見つめていた。

それから半日ほど荒野を歩き続けると、周囲が暗闇に包まれてきた。野営の必要がある。コルネリオ隊は一旦停止し、ここで夜を明かす事になった。

篝火の炎に照らされながら、兵士たちが天幕を張っていく。竜也はその中の一つに入って寝転んだ。地面に布を敷いただけなので寝心地は悪い。どうにもたまらず、穀物が詰まった麻袋を枕にしたが気休めにしかならなかった。

近くにはマルシアやガルフ、ブラッドが寝ている。マルシアは麻袋を並べてベッド代わりにしていたが、それでもなかなか寝つけな

いようだ。

「竜也、眠れそう？」

「全然。まいったな」

そのときガルフが口を開いた。「俺は平気だけどな、元々こういう生活をしてたし」

「え、まさか毎日地面で寝てたのか？」

「そうだよ、俺は狩猟民族の一員だったんだ。一応村はあったけど、住居はこの天幕みたいな感じだった。寝るときは布を一枚敷くだけだよ」

「すごいもんだな」

竜也はひたすら感嘆していた。自分にはとても耐えられない。

ブラッドも口をそろえる。

「俺もこんな感じだったよ。ベッドなんて贅沢な物はいらぬ。大丈夫、竜也もそのうち慣れるさ」

「うーん……」

マルシアは何度も寝返りをうっている。元々王族だった彼女にこの状況は辛い。

「た、竜也」

「ん？」

「お願い、私のベッドになって……」

「無茶言うな！」

真っ赤になっている竜也を尻目に、ガルフが両腕を大きく広げて言う。

「よし、俺のたくましい体をベッドにするがいいぜ！」

「やだ。暑苦しい」

「なんだとおおお？ 竜也はよくて俺は嫌だったのかあああ！」

「ねえ、竜也」

「駄目だっつってんだろ！」

ブラッドはその様子を見ながら苦笑した。今夜はまともに眠れなさそうだ。

将を狩る者1

マルシアはなかなか寝つけず、ガルフに話しかけた。

「ねえ、あなたはエルブレイスの人たちを憎んでないの？」

「そりゃ憎んでるさ。俺の民族は従属を拒んだだけで片っ端から殺されたんだ。自分自身も捕まって奴隷にされたしな。本当はあんな連中のために働きたくないよ」

ブラッドも同調する。

「俺も似たようなもんだ。竜也に頼まれたから従軍してるけど、そうじゃなかったら奴らを突き殺してとつくに逃げだしてる」

マルシアはそれを聞いて沈黙した。彼女もこの国に捕虜としてつれてこられた一人だ。しかも祖国を滅ぼされている。エルブレイスに対する怨みは並大抵の物ではない。

黙り込んだ彼女に竜也が声をかけた。

「マルシア、前に言ってた憎い奴ってのは……」

「やめて」

「えっ？」

「今はそれを言うときじゃないの。いずれ教えるから」

竜也は沈黙し、他の二人も口を閉ざした。重苦しい空気が流れる。そのときだ。

ガルフが突然跳ね起きた。ブラッドもそれに続く。竜也は驚いてたずねた。

「どうした？」

「コルネリオが危ない」

竜也とマルシアも剣を取って起き上がった。ガルフとブラッドは天幕の外へ跳び出していく。竜也には何が危険なのかさっぱりわからない。目をしばたきながら、マルシアをつれて彼らの後を追った。

周囲には篝火が焚かれ、見張りの兵士たちが立っている。ガルフ

は先頭を走りながら彼らに向かって怒鳴った。

「敵襲だ！ コルネリオを守れ！」

兵士たちは周囲に視線を走らせた。だが敵の姿などどこにも見えない。

「え、どこに……」

「いいから早く来い！」

ガルフがコルネリオの天幕に向かって走り、その後にブラッド、竜也、マルシアが続く。見張りの兵士たちも尋常でない空気を感じ取り、あわててその後を追った。

やがて、一行はコルネリオの天幕の近くまで来た。周囲に篝火が焚かれ、衛兵が槍を持ちながら立っている。なんの異常も見当たらない。竜也はそれを見てガルフに声をかけた。

「なんだよ、気のせいじゃ……」

その瞬間、黒い影が走った。直後に衛兵の一人が物も言わずに倒れる。恐るべき早業だ。

ガルフが目をむいて叫ぶ。

「くせ者だ！ 全員コルネリオを守れ！」

周囲の天幕から味方の兵士が次々と跳び出してくる。しかし、黒い影がいくつも現れて彼らの行く手を阻んだ。刺客は一人ではなかったのである。

竜也たちが天幕にたどり着く直前、黒い影の一つが衛兵を斬り倒して中に跳び込んだ。ガルフとブラッドがそれに続く。竜也とマルシアも入ろうとしたが、新たに出現した二つの黒い影に阻まれた。

「どけ！」

怒鳴りつけたが彼らは動かない。竜也はマルシアに声をかけた。

「俺は右の奴をやる。左の奴を頼む！」

「了解！」

将を狩る者2

竜也は刺客の一人をにらみすえた。相手が身に着けているのは頭巾に長袖の服、長ズボン、ブーツ。上から下まで黒づくめだ。腰には長剣を佩いており、両手には先の尖った金属性の棒を何本も握っている。

竜也は素早く剣を抜いて構えた。相手の体から凄まじい殺気が伝わってくる。さらに、一分の隙もない。

先に動いたのは竜也だった。地を蹴って疾走し、目にも留まらぬ速さで真つ向から斬り下ろす。それは綺麗にかわされたが、お構いなしに踏み込んで横薙ぎの一撃を放った。

刺客は跳び下がってこれを避け、同時に右手を一閃させた。数本の棒が竜也を目掛けて襲いかかってきたが、横に跳躍してかわしている。相手はさらに左手を一閃させ、その直後に剣を抜いて斬りかかってきた。

竜也は飛来する棒を髪一重でかわしつつ、刺客の剣をがっちりと受け止めた。敵はそのまま押し斬ろうとしているが、そうはさせない。素早く相手の足を蹴り飛ばし、バランスを崩した所に斬撃を放った。刺客は肩を斬り裂かれて後退する。

竜也はこの機を逃すような男ではない。一瞬で間合いを詰めて袈裟がけに斬りつけ、胴を目がけて薙ぎ払い、首を狙って突きを放つ。刺客は防戦一方だ。迫り来る熾烈な攻撃を辛うじてさばいていたが、遂に左肩を斬りつけられてよろめいた。

「があっ！」

彼が叫んだ直後、その体は真つ二つに斬り裂かれて崩れ落ちた。竜也は倒した男には目もくれず、もう一人の敵に視線を移す。

マルシアと刺客は凄まじい速度で斬り合いを演じていた。二人の周りを閃光が走り、金属音が間断なく響き渡る。だが、刺客は味方が倒されたのを確認するなり跳び下がった。その体が小刻みに震え

ている。

「こ、こんなはずは。お前たちは一体……」

若い女性の声だ。竜也が驚いて目を見張っていると、彼女はそろそろと後退しながら言った。

「覚えているがいい……この借りは必ず返す。必ずだ！」

刺客は地を蹴って逃げ出した。マルシアが後を追ったが、既に影も形もない。竜也はすぐにコルネリオの天幕に跳び込んだ。

中では、ガルフと黒ずくめの刺客が死闘を演じていた。コルネリオとブラッドは倒れ伏している。竜也はそれを見るなり激昂し、刺客目がけて斬りかかった。完全に間合いに捕らえている。しかし相手は辛くもこれをかわし、脇をすり抜けて天幕から逃げ出した。竜也が剣を振りかざして後を追う。

「待て、こらああっ！」

だが、相手の姿は既に消えていた。他の刺客もいない。竜也は敵の素早さに舌を巻きながら剣を収めた。

将を狩る者3

竜也は急いで天幕の中に戻った。ブラッドは傷つきながらも起き上がっていたが、コルネリオは伏せたままだ。

「おい、しつかりしろ！」

抱き起こすと、彼はうつすらと目を開けた。特に怪我らしい怪我はしていない。

「う、うーん……竜也か」

「そうだ。大丈夫か？」

「うむ……どうやら気絶していたらしい。突然の襲撃に驚いてしまつてな」

「とにかく無事でよかった」

竜也はブラッドに視線を移した。手足に怪我をしているが、命に別状はなさそうだ。

「お前がやられるとは驚いたな」

「いや、不覚だったよ。斬りつけてきたのをかわした直後に剣の柄で殴られたんだ。戦い方が不規則すぎてさっぱり対処できなかった」

「へえ。しかし、あいつらただ者じゃないな」

マルシアが強くうなづく。

「男の人も女の人もすごい使い手だったよ。竜也がいたからどうにかなったけど、もしいかなかったらと思うとぞつとする」

ガルフも全身に汗をかきながら同意した。

「俺も正直な所、竜也が来なければ危なかった。狭い天幕の中で大金づちは使いにくくてな。それに引きかえ、奴は短剣を何本も隠し持っていたし」

竜也が黙って話を聞いている一方で、コルネリオが地面に落ちた短剣を拾い上げながら言う。

「これはカールハイムの暗殺部隊が使う物だ。たかが輜重隊長の私を狙つてくるとは……」

彼は信じられないといった感じで首を振っている。竜也はそれを見ながら笑みを浮かべた。

「わざわざ暗殺部隊まで繰り出すなんて、あんたはよほどカールハイムの連中に目をつけられてるらしいな」

「笑顔で言うな、私は全然嬉しくないぞ」

「そうか？ こんな事をされたのは恐れられてる証拠だよ。彼らにとつちや一刻も早く消さないといけない敵なわけだ」

コルネリオは口元をひくつかせながら冷や汗を浮かべた。喜んでいいのか悲しんでいいのか今一つわからない。

一方、竜也はコルネリオの価値が跳ね上がっている事を実感していた。「敵に恐れられている指揮官」という存在は、軍隊にとつて非常に役立つ。彼は味方の心の支えになる一方、登場するだけで敵を威圧する事もできるのだ。しかも策士として知られる者なら、例え率いているのが寡兵であっても相手は警戒する。この種の間人はしばしば謀を用いて大軍を屠ってしまうからだ。

その一方、竜也はガルフの行動に驚いていた。離れた天幕の中で寝ていながらコルネリオの危機を察知するとは実にすごい。

隊の結束

「ガルフ、よく敵が侵入してるのに気づいたな」

「ん？ ああ」

彼が笑いながら言う。

「俺たちの部族は、森の中や草原で寝泊まりする事が日常茶飯事だった。危険を感じる能力がないと肉食動物にやられちまうんだよ」
「なるほどね」

これは頼もしい限りだ。刺客を防ぐ事もできるし、伏兵を察知する事もできる。

竜也は、この隊が前途有望だと感じた。指揮官のコルネリオは戦闘や策謀についてからつきしだが、なかなか芝居っ気がある。敵を欺くのはお手の物だ。これなら、大袈裟な演説をして味方の士気を鼓舞する事もできるだろう。それに名前が売れ始めている今、先頭に立って兵士を引っ張っていくには持つてこいの人物だ。

自分やマルシアは人望はないが、並みはずれた強さを誇り謀略にも長けている。ガルフやブラッドは謀略にかけてはさっぱりだが、戦闘が得意な上に危険を察知する能力を持っている。それぞれの長所を生かしながら協力していけるなら、相当強力なチームになるのではないだろうか。

コルネリオも同じ事を考えていた。竜也たちとがっちり組んでいけば、全員がもつと出世する事ができるだろう。自分も大隊長程度ではなく連隊長くらいにはなれるかもしれない。

彼は襲撃されたショックで怯えていたが、ようやく立ち直って竜也たちに呼びかけた。

「心から礼を言うぞ。そなたたちがいなかったら、私は間違いなく命を落としていた」

竜也も笑みを浮かべながら言う。

「気にすんな、隊長。あんたを守るのも俺たちの仕事だ」

ガルフも続けて口を開く。

「ついでにいくぜ、大将。これからも指揮を頼む」

マルシアとブラッドも笑顔でうなずいている。コルネリオはそれを見て、自分の中から熱い思いが湧き上がってくるのを感じた。今まで指揮官をやってきて、ようやく信頼に足る部下を持つ事ができた気がする。彼は立ち上がり、竜也たちを見回しながら言った。

「皆、これからも力を貸してくれ。頼むぞ」

四人が大きくうなずく。このメンバーがそろっていれば、何か大きな事を成し遂げる事ができそうだ。皆の心にそんな思いが浮かんでいた。

新たなる脅威 1

翌日の朝、エルブレイス軍は再びラウムハウトの砦へ向けて出発した。進むのは一直線に続く街道である。

やがて、斥候に出していた兵が前方から駆け戻ってきた。

「コルネリオ様、流れの速い川があります。しかし橋がありません！」

「ふむ、では見てみるか」

やがて彼らは川に到着した。本来ここには木製の橋があるはずなのだが影も形もない。カールハイム軍が焼き払ってしまったのだ。

コルネリオは進軍を止め、傍らにいる竜也に話しかけた。

「困ったものだな、これでは歩いて渡るしかないぞ」

「うーん」

竜也は川を観察した。水が澄んでいて底がはっきり見える。せいぜい腰くらいまでの深さしかなさそうだが、困った事に流れが恐ろしく速い。これではゆっくり進むしかなさそうだ。渡っている間に矢を射かけられたら一巻の終わりである。

「コルネリオ、ここを渡るのは厳しい。もっと浅くて流れの緩い場所を探そう」

「わざわざ街道を離れてか？ それでは大幅に時間を浪費する事になるぞ」

向こう岸には街道が一直線に続いている。無理をしても渡つてしまえば後は楽に進めるのだ。その両側には背の高い草が生い茂っている。人間の腰くらいはあるだろう。

竜也が草むらを眺めながら思案に暮れていると、突然数羽の鳥が飛び立った。何かに驚いて逃げたように見える。

「……ん？」

竜也は一瞬眉をひそめ、ガルフを呼んだ。

「あの辺り、なんだか怪しくないか？」

ガルフはじつと草むらを見つめた後、おもむろに口を開いた。その顔が緊張でこわ張っている。

「間違いない、伏兵がいるな」

竜也はうなずいた。自分が敵の指揮官だったら同じ事をするだろう。

まず橋を落としておく。こうする事によって、敵軍は流れの速い川を歩いて渡らざるを得ない。さらに街道の両側に伏兵を置き、敵の半数が渡り終えたのを見計らって一斉に挟撃するのだ。

こうなると、相手は半分の兵力で戦う事を余儀なくされる。しかも突然の挟撃を受けて混乱に陥る上に、背後が急流なので退くに退けない。後は右往左往する兵士たちを撃滅し、次に川を渡っている連中に矢を浴びせて終了となる。

あまり早く仕掛けると敵を逃がしてしまう可能性が高いので、半数ほど渡らせて逃げ辛くしてから襲撃するのがミソだ。

新たなる脅威2

竜也はコルネリオに声をかけた。

「向こう岸の草むらに伏兵の気配があるぞ」

「なんだと？ よくわかつたな」

コルネリオも向こう岸を観察した。確かに両側の草が不自然な動きをしている。伏兵がいる可能性が高い。彼は竜也に視線を戻して言った。

「よし、斥候に調べさせるか」

コルネリオの指示により、数人の兵士が向こう岸に渡っていく。

間もなく彼らは戻ってきて結果を報告した。やはり伏兵がいるらしい。コルネリオが再び竜也に言う。

「あの場所を通るのは危険だな。迂回しよう」

「その前に、伏兵がいる事を部下に伝えておいた方がいいぞ。いつ襲ってくるかわからないし」

「うむ、確かにそうだな」

「後、敵襲があつたときの対応だけ……」

竜也はこと細かに説明した。コルネリオが強くうなずく。

「わかつた。それでいこう」

彼は兵士を集め、今後の方針について説明を始めた。

「まず、皆に伝えておく事がある。向こう岸に伏兵がいる。兵数は不明だ」

部下たちが不安でざわめく。コルネリオはそれを見ながらおもむろに言った。

「あわてるな。私の指示に従っていればやられる事はない。安心して」

彼らは押し黙った。今この場で頼りになるのはコルネリオを置いて他にない。その落ち着いた態度に皆が感心しながら熱い視線を注いでいる。

実は彼自身も不安と緊張で倒れそうなのだが、指揮官が取り乱すわけにもいかない。マルシア隊の存在を心の支えにして必死に平静を保っていたのだ。

「我々はここで渡らずに迂回する。敵が追いかけてくるだろうが相手にするな。矢を射かけられたら届かない場所まで離れる」

兵士たちは緊張しながらうなずいた。敵に攻撃されながら相手にしないというのはかなりの度胸が必要である。

「こちらの狙いは敵に川を渡らせる事だ。連中がその素振りを見せても、私が指示をするまで手を出すな。何割かを渡らせておいてから攻撃に移る。常に落ち着いて行動する事を切に望む。以上だ」

コルネリオは兵を率いて川沿いに進み始めた。敵に狙われているにも関わらず少しも動じる様子がない。その姿を見た部下たちは畏敬の念をさらに強くした。「この人に従っていれば大丈夫」という安心感が全軍を包んでいる。

コルネリオは額に冷や汗をかきながら竜也にささやいた。

「有能な指揮官を演じると言うのもなかなか難しいものだな」

竜也が笑いながら言う。

「あんたならできるさ。その調子でがんばれ」

新たなる脅威3

一方、川の向こうにいるカールハイム軍は驚愕した。コルネリオ隊が川を渡ってくるのを手ぐすね引いて待ち構えていたのに、あっさりと逃げられてしまったのである。

指揮官はベルナルドという三十がらみの男だ。鋭い目つきに痩せた体をしており、カールハイムでは策士として名高い。茶色に輝く金属性の鎧を身に着け、腰に突剣を佩いている。彼は敵軍が遠ざかっただけを呆然と見送っていた。

「なぜだ？」

つぶやいたが答えは出てこない。自分に落ち度はなかったはずだ。兵士は完璧に隠してあった。ここで殲滅するつもりだったのに全てが台なしである。

まず橋を落とし、コルネリオ隊に川を徒歩で渡らせる。彼らの半数が街道に上がったのを見計らい、左右から合計二千人の兵士で挟撃。陸にいる敵を屠った後、川にいる敵を射殺。これが決まれば彼らは全滅するはずだった。

ベルナルドはエルブレイス軍の兵力が八百人余りである事も、街道を通って進軍してくる事も事前に知っていた。それどころか、指揮官であるコルネリオの性格と能力まで熟知していたのである。

「あの馬鹿貴族ならこのこと川を渡ってくるかと思っただけに……いや、待てよ」

彼はここでピンと来た。コルネリオは流れが急であるのを見て怖じけづいたのだ。それで、もっと渡りやすい場所を探すために川沿いを歩いていったに違いない。つまり、伏兵がいる事を察知したわけではないのだ。

「なんだ、そういう事か。馬鹿馬鹿しい」

ベルナルドは苦笑した。臆病なのは知っていたが、まさか川一つ渡れないほどだとは思ってもみなかったのである。

「あんな腰抜け相手に、わざわざこんな罠を仕掛けた自分が笑えるわ」

彼は、味方のウェルズ隊がこてんぱんにやられたという話を聞いていた。だがコルネリオの人となりを知っているだけに、単なるまぐれだと決め付けていたのである。

彼は傍らの部下に話しかけた。

「臆病にも程がある。まさかここまでとは思わなんだ」

「いやはや、驚きました。しかし今からでも遅くありません。奴らを追いかけて叩き潰すとしましょう」

「ふむ、そうだな。あんな痴れ者を相手に策など必要ない。さつさと片付けてしまおう」

ベルナルドは兵士を集め、急いで川沿いを進んでいった。目標はコルネリオ隊だ。

新たなる脅威 4

敵を侮るという事は、指揮官が絶対に犯してはならない禁忌の一つである。相手を過小評価すればそれだけ現実の戦闘能力と乖離が生じてしまう。結果として思いもよらぬ頑強な抵抗にあい、部下たちを苦境に追い込むはめになるのだ。

ベルナルドはそれを知りながらも相手を侮った。過小評価をしているなどは露ほども思っていない。確かに彼の見る通り、以前のコルネリオは無力だった。今もそれは変わらない。しかし現在の彼はそれを自覚し、部下の意見を積極的に取り入れている。この点で大きく進歩していたのだが、ベルナルドはそこまで見抜けなかったのである。

カールハイム軍は勇躍してエルブレイス軍を追った。その距離がぐんぐん縮まっていく。コルネリオ隊はのろのろと進んでおり、敵の姿を認めてもろくに反応しない。

双方は川を挟んだ状態で対峙した。エルブレイス軍は弓矢を抱え、少しずつ川岸から離れていく。別段あせった様子もない。

ベルナルドは違和感を覚えた。コルネリオが本当に無能で臆病なだけの指揮官なら、突然現れた敵軍を見て一目散に逃げ出すはずである。それなのに実際は、二倍を超える兵力を目の当たりにしながらのんびりと構えているのだ。

「奴め、何を考えている。いや、何も考えていないのか？」

ベルナルドは腕組みをしながらうなづいた。こういう場合、まず疑わなければならぬのが伏兵だ。しかしエルブレイス軍の背後は広々とした荒野で、兵を隠せる場所など存在しない。荷馬車の中に隠すという手はあるが、その中身が穀物や弓矢である事はすでに調べ上げている。川の中に兵を配置するというのも無理な話だ。

「うーむ……」

彼は自分たちの周りを見回した。草むらはあるが兵を隠せるよう

な高さではない。つまり、この近辺に伏兵は存在しない事になる。

次に考える必要があるのは敵の援軍だ。しかし、周辺に放つてい
る偵察兵からそういつた報告はない。それに加え、コルネリオ隊以
外のエルブレイス軍が進発したという情報も入っていない。カール
ハイムはエルブレイスの動向に対して常に注意を払っており、その
軍隊が出撃準備を始めただけですぐに反応し前線の友軍へ通達する。
それも一切ないという事を考慮すると、援軍が到着する可能性は低
い。

新たなる脅威5

伏兵もなし援軍もなしとなると、次に考えられるのは内応だ。こつそりとカールハイム兵に手を回し、戦闘が始まった途端に寝返らせるのである。

しかしながらこの可能性も低い。元々ベルナルド隊の兵士たちは首都近辺からつれてきた生粋のカールハイム人だ。彼らは家族を家に残してきているし身元もはっきりしている。劣勢のコルネリオ隊にわざわざ寝返る要素が見当たらない。百歩譲って一部の兵士が内応したとしても、大勢に影響はないだろう。

他に考えられるのは戦闘能力の差である。でも、エルブレイス軍とカールハイム軍の兵士の質はさほど変わらない。装備も似たり寄ったりだ。二千人と八百人が正面からぶつかればほぼ間違いなくこちらが勝つ。

「そうなると、つまり……」

ベルナルドは薄笑いを浮かべた。彼にとってはありえない事だが、敵は地の利と用兵術を頼りに一戦交えるつもりなのである。

「笑止千万」

彼は吹き出した。コルネリオのように無能な指揮官がそんな事をした所で結果は見えている。全滅するだけだ。

遂に大声で笑いだした彼を見て、部下の一人が話しかけてきた。

「これはもう、突撃しかありません」

「うむ、それでいい。実に楽な戦だ」

ベルナルドは兵士を集結させて叫んだ。

「全軍突撃！ 奴らを一人残らず血の海に沈めてやれ！」

カールハイム軍はそれに応じて川を渡り始めた。腰までの深さがあり流れも速い。この状態で射られれば苦しいが、エルブレイス軍はただ見ているだけである。

ベルナルドは笑いが止まらなかった。兵数も指揮官の能力でもこ

こちらが勝っている。負ける要素などない。敵はろくに反撃もできないまま全滅する事だろう。

しかし、突然異変が起きた。先頭の三百人余りが川を渡り切った途端にコルネリオが叫んだのである。

「全軍散開！」

その指示に従い、八百余りの兵士が横一列に展開した。さらにコルネリオが声を上げる。

「撃て！」

八百余りの兵士が一斉に矢を放った。それは上陸したばかりの兵士たちに次々と突き刺さる。確かに総数ではカールハイム軍が上だが、この地点においてはエルブレイス軍の方が多い。三百人は八百人の一斉射撃を受けてばたばたと倒れていく。

ベルナルド隊の兵士たちは仰天した。引き下がりたいのだが、背後の味方と川が邪魔で下がれない。その間にも矢の雨が容赦なく降り注ぐ。

新たなる脅威6

先頭のベルナルド兵は間断なく矢を浴びて逃げ腰になり、それに続く兵士たちは味方が邪魔で進めない。さらに後ろの者たちはまだ川の中だ。彼らはろくに反撃もできないまま矢の嵐に包まれた。これでは当初の予定と真逆である。

ベルナルドは味方が進退窮まったのを見ると、すかさず伝令を走らせて撤退を命じた。だが、すぐに指示が行き渡るはずもない。その間にも先頭の兵士たちはどんどん倒されていく。彼は目を見張り、体を震わせながらつぶやいた。

「こ……んな事が……馬鹿な、何がどうして……」

やがて味方は退却を始めたが、川を渡って戻る間にも矢を浴びまくり被害を拡大させた。最終的に生き残ったのは千四百人余りで、六百人近い犠牲者を出している。それに対して、コルネリオ隊には数名の軽傷者が出ただけだった。

ベルナルドは兵士を集めてから愕然とした。死者はもちろん重傷者も多く、まともに戦えそうな者は千三百人に満たない。しかも、士気がこれ以上ないほど下がっている。彼らの表情は一様に暗く、まるで生気が感じられない。

「コ、コルネリオめ……よくも……」

ベルナルドは頭に血を上らせながらうなっていたが、やがて落ちてきを取り戻した。これは全て、敵を侮った自分の責任だ。

「奴がこれほど用兵術に長けているとは思わなかった。敵ながら見事な統率ぶりだ」

それにしても甚大な被害だ。コルネリオ隊はほぼ無傷なのに対し、こちらは七百人以上が戦闘不能にされてしまっている。どう見ても完敗としか言いようがない。

しかもまずい事に、向こうの士気が上がる一方なのに対しこちらは下がる一方である。偵察兵の報告によると、エルブレイス軍の兵

士たちはコルネリオに全幅の信頼を寄せているらしい。騎馬隊を擁するウエルズ隊を野戦で払いのけ、兵数が二倍を超えるベルナルド隊まであっさりと撃退したのだから当然だ。自分が彼の部下だったとしてもやはり信頼するだろう。

実際エルブレイス軍の兵士たちの中では「うちの指揮官はすごい」「あの人についていけば安心だ」といった声が上がっているそうだ。ベルナルドにとっては業腹だが、その原因となったのが自分であるだけに何も言えない。

ただ、彼はやられっぱなしで黙っているような男ではなかった。今回負けたのは自分がコルネリオを侮り、まともに兵を率いる事などできないと思いついたからである。その認識を改めてから再び挑み、勝利をつかみ取るつもりだった。

兵数では依然としてこちらが上だ。きつちりと采配をしていけば勝てないはずはない。

凄絶なる狩り 1

両軍は川を挟んで対峙している。今のところどちらにも動く気配はない。やがて日が暮れ、周囲が闇に包まれた。

コルネリオは大型の天幕を張り、中隊長たちを集めて協議をしている。一方、竜也はガルフと共に敵の陣地を観察していた。

森や平原といった自然の中で暮らしていたガルフは、都市で生活していた竜也よりはるかに視力が高い。篝火に照らされながらうごめいている敵兵の動きを、一挙手一投足まではつきりと捉える事ができる。

やがて彼は、ベルナルド兵が少しずつ離脱している事に気づいた。戦場を放棄して逃走したという可能性も考えられるが、そんな希望的観測に傾くのは危険だ。むしろ、夜襲をかけるために姿をくらましていると思った方がいい。

「竜也、連中が少しずつ陣地を離れている。見えるか？」

「うーん、よく見えないな」

「実にゆっくりとはあるが、確実に人数が減っている」

ブラッドをつれてきて観察させたところ、ガルフと同じ事を言った。やはり動きがあるようだ。竜也は急いでコルネリオの天幕に行き彼に報告した。

コルネリオは腕組みをして考え込んでいる。

「今夜勝負をかけるつもりか？ まあ、そう見せかけるだけという可能性もある。こちらを疲弊させるのを目的としてな」

続いてマルシアも口を開く。

「見せかけなら、もっとはつきり動くのではないのでしょうか。私たちが察知できなければ意味がないわけですから」

「ふむ……そなたが敵の指揮官なら、この状態でどういう手を打つ？」

周囲の視線がマルシアに集まる。彼女は全員を見回してからおも

むろに言った。

「一番効果的なのは自陣を空にしてこっさり敵に近づき、全軍で急襲して包囲殲滅する事です。ひそかにやればやるほどいいでしょう。ただ……」

「ただ？」

「今回はできません。よほど双方が離れているならともかく、お互いの姿が見えるくらいの距離ですから。陣地が空になればあつという間にばれてしまいます。そこで……」

マルシアはコルネリオをまっすぐに見つめた。彼も真剣な表情で見つめ返す。

「一部の兵士をばれないように動かし、敵の陣地を急襲させます。それで相手が混乱しているうちに本隊が川を渡り、全軍突撃で一気に入ります。こんな感じですね」

凄絶なる狩り2

「コルネリオは深くうなずき、マルシアに再びたずねた。

「なるほど。敵がそういつた作戦に出た時、我が隊はどういつた対応をとるのが最良だ？」

「敵は兵力の一部を割いた事により、複数の部隊に分かれるわけです。分散しただけ戦力は低下しますよね。どれにベルナルドがいるかはわかりませんが、もし見つけられたら……」

「彼女は一瞬間を置き、全員の視線が集まっているのを確認した。その場にいる皆が注目し、無言で話を聞いている。」

「他には目もくれず、彼の部隊だけを集中攻撃するのです。これに勝る方法はありません」

「なるほど。では、ベルナルドの部隊が川の向こうに残っていたならどうする？」

「えーと、その場合は……まずこちら側にいる敵を殲滅してから、余力で川向こうの敵を……」

「別動隊の攻撃を受けている間に奴の部隊が襲いかかってきたら？」
「えっ」

マルシアは答えに詰まった。それでは敵の思いつぼだ。彼らの目的は別動隊が突っ込んでいる間に残りの兵を渡らせ、総勢千三百人で八百人を撃滅する事なのである。

戦端が開かれないのは双方が川を渡れないからなのであって、カールハイム軍が無傷で渡ってしまえばエルブレイス軍は敗北してしまう。八百人で千三百人に正面から立ち向かおうというのは無理な話だ。そのため、敵が川を渡るのをなんとかしても阻止しなければならない。

だが、ひそかに渡っている別動隊を止めるのは難しい話だ。おそらく彼らは、一旦散り散りになった上で夜陰に紛れて接近してくるだろう。その上こちらは本隊の動きも見張っていなければならない。

コルネリオは全員を見回しながらおもむろに言った。

「敵が別動隊を使って我々を攪乱し、その間に本隊を渡そうとしているとしよう。何か有効な対策はあるか？」

皆の意見を集めたところ「できる限り早めに別動隊を捕捉して殲滅する」という物に落ち着いた。それ以上に有効な案は出てこない。コルネリオは皆を解散させ、天幕を出て外で考え込んだ。

自分の采配に八百人を超える人間の命がかかっている。気が重い。思わずため息をついたとき、その肩を叩いた人間がいる。竜也だった。

「指揮官がしけた顔すんな、部下が不安になるだろ」

「確かにそうだ。しかし……」

コルネリオが竜也をまっすぐに見つめて言う。

「皆が出した戦法で勝てると思うか？ 別動隊の動きをつかめなければ終わりではないか」

凄絶なる狩り3

竜也はふつと笑みをこぼした。

「いや、負けるよ」

コルネリオはそれを聞いてうなだれている。このままでは自分も部下たちもあの世逝きだ。それなのに解決策を思いつかない。

「だから、指揮官がしけた顔をするなっつの」

「いくらなんでも限度があるぞ。そなたは自分の敗北が確定しても笑っていられるのか？」

「ああ、そのときは笑いながら敵を褒めてやるよ。『俺を倒すとはたいした奴だ』ってな」

「うーむ……私にはできんな」

「それはともかく、まだ負けと決まったわけじゃないだろ。戦いはこれからだつてのに」

コルネリオはじつと竜也を見つめた。篝火に照らされる中、その碧い瞳がらんと輝いている。

「まさかとは思うが、策があるのか？」

竜也がうなずいたのを見て、コルネリオは歓喜の声を上げた。

「どうしてさっさと言わんのだ！ よかった、これで我々は……」

「落ち着け。正直な話、いちかばちかの賭けなんだ。失敗したら間違いなく全滅する。軽々しく実行できる物じゃない」

その真剣な表情を見て、コルネリオの顔がこわ張っていく。

「……わかった。とりあえず説明してくれ」

竜也はゆっくりと話し始めた。周囲には誰もおらず、パチパチという炎の音だけが聞こえてくる。

「まず敵の狙いについて説明しよう。奴らは俺たちの背後に別動隊を回して急襲するつもりだ。そのまま川岸へ追い詰め、もしくは追い落とし、ベルナルドの本隊と一緒に挟撃して全滅させる。これが連中の描く勝利の絵だな」

「なるほど……決まれば我々の敗北は必至だ」

「でも、このままだと見事に決まるだろう。そこで俺たちがする事は……」

「コルネリオはごくりと唾を呑み込んだ。

「する事は？」

「指揮官を狩る」

「暗殺か！」

「違う、ベルナルドもその辺は警戒してる。奴の周りは屈強な兵士が固めてるよ」

「では、どうやって……」

竜也は自分の策を打ち明けた。恐ろしく大胆な物である。タイミングを間違えれば全滅間違いなしだ。コルネリオはその凄まじさに、身が引きしまる思いだった。

「これほど危険な物だとは……」

「カールハイム軍はこっちより多いんだ。そんな敵を相手にしながら安全に勝とうなんて甘いよ」

「しかし……」

「やるかやらないかはあんた次第だ。どうする？」

コルネリオはうなずいた。その顔は強い決意に満ちている。

「やるう。このまま黙って潰されるくらいなら、危険を冒してでも勝利をもぎ取ってやる」

「その言葉を待ってたよ。さあ、行こうか」

凄絶なる狩り4

今回、マルシア隊の百人だけが先に進発する事になる。コルネリオが率いる七百人余りはその後だ。

コルネリオは竜也とマルシアを交互に見て言った。

「頼んだぞ。我が隊の命運はそなたらにかかっている」

竜也が笑みを浮かべながら言う。

「あんたこそしくるなよ。本隊の到着が遅れたら、俺たちは全滅するしかないんだから」

「わかつている。任せろ」

彼が強くうなずいたのを見て、マルシアも微笑んだ。

「すっかり指揮官らしくなりましたね」

「そうか？ 前と変わらぬと思うが」

「間違いですよ、まるで別人です」

コルネリオも笑みをこぼす。

「必ず生きてまた会おう」

竜也たちはうなずき、隊員を率いて夜の闇へとすべり出した。狙いはベルナルドだ。

マルシア隊の百人はひっそりと陣営を離れ、ガルフとブラッドを先頭に歩いていく。彼らは自然の中で暮らしていただけあって、夜の闇の中でも少しづつなら進む事ができる。敵の目に触れないように接近する必要があるので松明は使えない。二人の高い視力と野性の勘だけが頼りだった。

川の向こうにベルナルド隊の篝火が見える。ガルフたちはそれを目印にしてゆつくりと進んでいく。やがて一行は川に入り、身をかがめながら少しづつ渡り始めた。敵に気づかれた様子はない。

竜也は複雑な心境だった。他人を殺すのはやはり気が引ける。ここが戦場であるとは言え、相手の人生を奪ってしまう事には変わりない。

全員が渡りきった所で、彼はマルシアにささやいた。

「できれば殺し合いなんかしたくないもんだな」

「気持ちわかるけど割り切つて。相手を殺さなきゃ自分が死ぬだけだよ」

「……うん」

「あなたががんばってくれなきゃ困るよ。頼りにしてるからね」

「わかった」

マルシア隊は足元の草を踏みしめながら、じりじりと距離を詰めた。ベルナルド隊は総勢八百人程度に減っている。五百人弱が別動隊として離れたのだ。

竜也は目をこらして観察したが、ベルナルドの位置はつかめなかった。最初の襲撃で斬り倒すのは無理だ。となると、今するべき事は敵の攪乱である。

ガルフが不敵な笑みを浮かべながら言う。

「しかし、奇襲を狙ってる敵に奇襲をかけようとは恐れ入ったぜ」
竜也も笑みをこぼした。

「先にやったもん勝ちだからな。行くぞ」

マルシア隊の百人は散開し、それぞれ違う場所からベルナルド隊の陣営に侵入した。そこかしこに天幕が張られ、篝火が煌々と周囲を照らしている。さらに、槍を持った兵士が肩をいからせながら歩いているのが見えた。

凄絶なる狩り5

竜也は陣地に侵入するなり一人を斬り倒した。近くにいた他の兵士が目をむいて叫ぶ。

「て、敵だ！ いつの間に……」

次の瞬間、彼は大金づちで叩き潰されて崩れ落ちた。ガルフの一撃だ。周囲のベルナルド兵が声を聞きつけてこちらに向かってくる。竜也は顔を引きしめ、剣を構えて叫んだ。

「かかつてきやがれ！」

敵の一人が槍をしごいて突きかかった。空気を切り裂く鋭い一撃だ。身を翻してこれかわし、直後に右手を一閃させた。相手が血を噴いてその場に膝をつく。

「どんだん来い！」

続けて二人が斬りかかってきた。片方の攻撃をかわしつつ、もう片方の足を薙ぎ払う。斬られた男がよろめいた隙に、もう一人の顔面を突いて倒す。さらにその剣を引き抜き、よろめいている男の横を払い抜ける。竜也の一連の動作を見て兵士たちは息を呑んだ。その速さと言い正確さと言い、まさに超一流である。

「らあああつ！」

彼は敵兵の集団に向かって疾走した。光の筋が次々と走り、驚愕している彼らを刻んでいく。

「ぐあつ！」

「ぎゃあああつ！」

兵士たちは必死に抵抗したが、その勢いは止まらない。竜也は目についた敵を片っ端から斬り捨てた。

ガルフも大金づちを振り回して暴れまくっている。一人を真つ向から叩き潰し、一人を弾き飛ばし、さらに一人を突き倒す。その凄まじい破壊力にベルナルド兵は震え上がった。直撃を喰らえばもなく肉塊に変わってしまう。

「ば、化け物！」

「なんだこいつら、強すぎるぞ！」

叫んだ彼らの顔面が真っ二つに斬り裂かれた。マルシアは倒した敵に目もくれず、その横を走り抜けていく。

マルシア隊の猛威に晒される中、一人の男が立ち上がった。身長は百九十センチほど。見た目は三十歳前後で隻眼、引きしまった顔に隆々とした筋肉。上半身は裸で下半身には革の腰当てと腰布を着け、左右二本の曲刀を握っている。

彼は物影からマルシア隊の面々を観察し、やがてつぶやいた。

「あのガキが一番強いな」

男はゆっくりと歩いていき、竜也の近くで立ち止まった。その鋭い眼光と言い威圧感と言い、並の人間なら震え上がってしまうほどだ。

「おいこら、そのガキ！」

どすの効いた声で怒鳴られ、竜也は振り返った。見ると、隻眼の大男がこちらをにらみつけている。

「調子に乗るのもそこまでだ。俺が大人の恐ろしさを教えてやる！」

凄絶なる狩り6

竜也は剣を構えて男を見据えた。その巨体と言いだしのなさと言いだし侮れない。その辺にいる兵士たちとは明らかに格が違う。

次の瞬間、男が地を蹴った。鋭い斬撃が連続で襲ってくる。竜也はそれをさばきながら跳び下がった。しかし、そこへさらに突きが殺到する。

「くっ……」

横に跳躍しながら薙ぎ払ったがかすりもしない。相手は一瞬で距離を詰め、頭上から渾身の力を込めて斬り下ろした。

「おおおっ！」

辛うじて受け止めた途端、凄まじい衝撃が伝わってきた。まともに喰らえば即死間違いなしだ。男はすかさずもう片方の剣で横薙ぎの一撃を放った。竜也は後退してかわしている。

距離をとって身構えると、相手は口元を吊り上げた。

「やるじゃねえか、たいした腕だ。味方だったらさぞ心強かっただろうによ」

竜也も微笑しながら口を開く。

「俺も、あんたが味方だったらよかったと思ってるよ」

「てめえからは俺と同じ匂いがする。小せえ頃から訓練と戦いに明け暮れてきた奴に特有の匂いかな」

竜也は小学生の頃から剣道の道場に通り、中学も高校も剣道部に所属している。毎日、鍛練は欠かした事がない。

「てめえみたいな奴を殺すのは惜しいが、戦場で相まみえた以上は仕方ねえ。先にあの世へ逝きやがれ！」

男の斬撃が閃光と化して襲いかかる。竜也はその場から動かさず、全て払いのけ、すかさず逆袈裟に斬りつけた。相手は回転しながらこれを避け、同時に右手を一閃させる。

「うらあっ！」

竜也は髪一重でかわし、首を目がけて突きを放った。相手が後退すると、間髪入れずに踏み込んで斬りつける。さらに袈裟がけの斬撃、胴を狙った突き、首を狙った薙ぎ払いが続く。男は眉一つ動かさずにさばいていたが、遂に太ももを斬り裂かれてよろめいた。

「ちっ！」

竜也はそれを見て跳び上がった。直後に相手を真っ向から斬りつける。だがこれは受け止められた。次の瞬間、もう片方の剣が襲ってくる。

身をかがめてかわすと、相手の胴がから空きになった。ここで決めるしかない。目を見開いて一瞬で払い抜けた。

「がっ……」

胴を真っ二つにされた男が崩れ落ちていく。竜也は絶命した相手を一瞥してから言った。

「俺の前に立ったのが運の尽きだ。じゃあな」

凄絶なる狩り7

ベルナルドは、天幕の中で敵襲の報告を受けた。知らせた兵士は息を荒げ、全身に汗をかいている。

「と、とんでもない連中が……強すぎてまるで歯が立ちません！」

「落ち着け。敵の兵数は？ 率いているのは誰だ？」

「何人なのかさっぱりわかりません。指揮官もです。一人一人の動きが完全にバラバラで、統率されているとはとても……」

ベルナルドは舌打ちした。これでは「手ごわい敵が襲撃してきた」という事しかわからない。

「もういい、自分で確かめる」

彼は天幕の外に出て周囲を確認した。至る所で敵兵が暴れているが、その人数は把握できない。ただ、こちらよりはずっと少ないように見える。

「ふーむ」

敵の陣営に目を向けたところ、その兵士の大半が残っている。となれば、ここにいるのはたいした人数ではない。援軍がないという事が確定している以上、コルネリオが動かせるのはどうあがいても八百人余りにすぎないのだ。

ベルナルドは突剣を引き抜き、振り上げながら叫んだ。

「落ち着け！ 敵は多くても二百人程度だ。あわてずに対処すれば問題ない！」

しかし、その途端に大問題が発生した。竜也やガルフといった強力な戦士に、指揮官の位置を知られてしまったのである。

真っ先に突進してきたのがガルフだった。大金づちで周囲の兵士を弾き飛ばしながら向かってくる。その剛腕が繰り出す凄まじい一撃にベルナルドは肝を冷やした。まともに喰らったら即死確定だ。

彼は脇に冷や汗をじつとりとかきながら、部下たちに声をかけた。「そいつを止める！ いくら強いと言ってもたかが一人だ、集団で

斬りかかれ！」

兵士たちが剣を振りかざしてガルフに向かっていく。ベルナルドがそれを見てほっとしていたとき、一人の部下が走り寄ってきて叫んだ。

「コルネリオの本隊が接近中です！」

「なんだと？」

彼は敵陣に目を向けた。弓矢を持った敵兵が一齐に川を渡っていく。これを止めないと、八百人強と八百人の戦いになってしまう。

「し、しまった……止める、奴らを止める！」

「その余裕がありません！」

「この役立たずどもが！先に襲撃してきた連中をさっさと片付けなからこうなるのだ！」

部下を叱責した所で戦況は悪化するばかりだ。ベルナルドの全身から血の気が引いていく。

「奇襲しようとした我々が奇襲されるとは……」

こうなれば、別動隊が参戦するまで持ちこたえるしかない。千三百対八百の戦に持ち込めればこちらの勝利だ。

凄絶なる狩り⑧

ところが、別動隊は全くと言っていいほど機能しなかった。

元々、彼らの目算はこういった物だ。敵の哨戒に気付かれないう個々に川を渡り、人数がそろった所で一気に切り込む。そうしてコルネリオ隊を混乱に陥れている間に、ベルナルド率いる本隊を呼び寄せるのである。

想定外だったのはコルネリオ隊が急いで川を渡り始めてしまった事だ。これによって別動隊は、ろくに人数がそろわないうちに攻撃せざるを得なくなった。数十人ごとにまとまって切り込んだものの七百人には敵わない。襲撃する事が気付かれていなかったならまだしも、完全にばれているのである。結局、彼らは戦果を上げる事もできないまま個々に撃破された。

対岸のベルナルドにその情報は伝わっていない。やきもきしながら別動隊の到着を待ったが、来たのはコルネリオの本隊だけである。彼は危うく卒倒する所だった。これは完全に負け戦だ。

「な……んだと……？ 何がどうしてこうなった？」
策士として高名なベルナルドだったが、まるで頭が働かない。

こうなると、カールハイム軍八百人対エルブレイス軍八百人強の戦いだ。人数の点ではほぼ変わらないが、士気と統制の点で大きな差がある。カールハイム軍は完全に浮足立っているのに対し、エルブレイス軍はほぼ完璧だ。しかも、竜也やガルフといった猛者が中央で大暴れしている。勝敗は明らかだった。

全身にぐっしょり汗をかいたベルナルドの目に、二十歳前後の男の姿が映った。金髪碧眼のほっそりした優男で、身に着けているのは銀色の甲冑と群青色のマントだ。彼は剣を振りかざしながら叫んでいる。

「これは戦争ではない、狩りである！ 我々はベルナルドという男を狩りに来たのだ！ 見つけ次第斬り刻め！」

エルブレイス軍の士気は最高潮に達した。自分たちは圧倒的優位に立っている。しかもコルネリオが指揮を執っている以上、負けるはずがない。そんな思いが彼らを後押ししている。

ベルナルドの顔が真っ赤に染まった。怒りで血管が切れそうだ。

「あの若造が、いい度胸だ！」

彼は周囲の兵士をかき集め、コルネリオに向けて突撃した。しかし、その周りを敵兵がしっかり固めており届かない。

「くそっ！」

歯噛みしているうちにコルネリオと目が合った。彼は笑みを浮かべながらこちらを見ている。

「これはこれは、ベルナルド殿。わざわざ首を差し出しに参られたのかな？」

凄絶なる狩り9

ベルナルドはいよいよ激昂した。もし目の前にコルネリオがいたなら、有無を言わず突き殺している所だ。

「貴様、これで勝ったつもりか？ まだ勝負はついていないぞ！」

「ほう、策士として名高い貴公の言葉とは思えないな。既に勝敗は決まっているはずだが」

実際の所、カールハイム軍は劣勢だが壊滅はしていない。未だに六百人近い兵士を残している。しかし、指揮官も部下も正常な判断力を失ってしまっている今、態勢を立て直すのは不可能だった。

ベルナルドが再び突撃しようとしたとき、その前に立ちはだかった男がいる。竜也だ。

「やつとたどり着いたよ。悪いけどあんたには死んでもらう。そうすりゃ他の連中は逃げるだろうしな」

「どけ、小僧！ 貴様などに用はないわ！」

ベルナルドは一瞬で距離を詰め、鋭い突きを放った。完全に決まったと思っただが見事にかわされている。

「こいつ！」

彼は間髪入れずに踏み込んだ。凄まじい速さで突きまくったが難なくさばかれてしまう。あせり始めた所に相手の剣が殺到した。太ももに一撃を受けて鮮血が噴き出す。

「ぐっつ……」

彼は必死に後ずさり、部下たちの中に隠れた。竜也はそれを薙ぎ倒しながら迫ってくる。

「我が命運、ここで尽きたか」

ベルナルドは覚悟を決め、突剣を握って地を蹴った。せめて相打ちに持ち込みたい。だが渾身の一撃は空を切り、彼は血飛沫を上げて倒れ込んだ。

指揮官を失ったカールハイム軍は潰走し、エルブレイス軍だけが

残された。生き残ったのは六百余人である。コルネリオ隊はベルナルドの亡きがらを埋葬し、再びラウムハウトを目指して出発した。

コルネリオ隊は無事ラウムハウトに到着し、その後エルブレイスに帰還した。竜也の策とマルシア隊の戦闘能力で勝利を収めたような物だ。しかし、彼はそれを黙っていた。

帰還して間もなく、竜也とマルシアはラグラスの部屋に呼ばれた。ここにこして実の上機嫌だ。

「まあ座れ」

二人が促されて椅子に座ると、ラグラスはテーブルを挟んだ向かい側に座って口を開いた。

「今回お前たちは、ウェルズ隊の千五百人とベルナルド隊の二千人を撃退した。たった千人でな。これは称賛すべき事だと思う」

マルシアはじつと話を聞いているが、竜也はそっぽを向いている。「興味がない」と言わんばかりだ。

「そこで一つ知りたいのだが、戦闘時の作戦を考えたのは誰だ？まさかあの馬鹿貴族ではないだろうか？」

二人とも答えようとしない。ラグラスは身を乗り出してマルシアを見つめた。

「誰なのだ？」

「さ、さあ……」

論功行賞

マルシアは答えられなかった。実は知っているが、本人から口止めされていたのだ。

「お前たち二人のどちらかではないのか？」

竜也はそっぽを向いたまま答えない。ラグラスは仕方なく話題を移した。

「まあいい。とにかく、マルシアは大隊長に昇進させる」

「光栄です」

「竜也、お前もだ。ベルナルドを討ち取った功績を評価してな」

「やだね」

「え？」

ラグラスは目をしばたいた。いくらなんでもこれは受けるだろうと思っていたのである。

「お前……」

「人を殺した事を評価されて昇進とか、ごめんだよ」

「そうか……ではせめて報奨金を受け取れ」

「いらね」

マルシアがあわてて口を挟んだ。

「た、竜也。そのくらいは受け取りなよ」

「そうだ、受け取れ。これはベルナルドを討った報酬ではなく、ラムハウトまで荷物を運んだ給金だと思え」

「じゃあもらう」

彼が金貨を受け取ったのを見て、マルシアはため息をついた。実に扱いにくい。一方、ラグラスはしきりに首をかしげている。

「妙な奴だなあ……」

「そうか？ 俺から見れば、人を殺して喜んでるあんたの方がよっぽど妙だよ」

ラグラスが顔をしかめているのを見て、マルシアは青くなった。

これ以上ここにいろとろくな事にならない。

「で、ではそろそろ失礼します。竜也、来て！」

「なんだよ、引っ張るなっつもの」

マルシアは彼を自分の部屋へつれていき、ベッドに座り込んだ。

竜也は近くの椅子に座っている。

「あなたって本当、軍人に向いてないね」

「まあな。やっぱり人を殺して褒められるってのはおかしいよ。城塞都市を落としたときも金をもらったけど、やっぱり返そうかと…」

…

「いいからもらっておきなっつて」

竜也は黙り込んだ。マルシアが彼をじっと見つめながら言う。

「ねえ、あなたがいた世界ってさ……」

「ん？」

「戦争ないの？」

「あるよ。なんでそんな事を聞くんだ？」

「竜也って人が理解できないからだよ」

「へ？」

彼は目をぱちくりさせた。何が理解できないのかさっぱりわからない。

「まず、あなたってめっちゃめっちゃ強いよね。剣の腕は神がかってるし、頭も切れるし」

「はあ」

「なら、自分の能力を発揮できるのは戦争でしょ。なのに人を殺すのが嫌とかさあ。そんなんじゃない、本気で戦えるわけじゃないじゃない」

「いくら強くても、戦わなくていいなら戦いたくないよ。人を殺すのも本当は嫌だし」

マルシアは目を見開いて沈黙している。竜也はおずおずとたずねた。

「俺、何か変な事言っただか？」

マルシアの想い1

マルシアは竜也を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。

「あなたって、先代の王様に似てるね。考え方がさ」

「先代って言うと、アイリーの父親か？」

「そう、あの人もそんな感じだったよ。エルブレイスという強国の王でありながら戦いが嫌いで、他国へ進攻する事なんて一度もなかった。もめたときは外交で解決してたよ」

「いい王様じゃないか。戦争を起せば多くの人間が犠牲になる。勝利によって利益を得たとしても、それは他者の犠牲の上に成り立つ物だ。やらないに越した事はないさ」

しかし、そんな王が革命で殺されてしまったのは残念な話だ。

「なんで反乱が起こったんだろうな。俺だったら喜んで従うけど」

「民衆からは支持されてたよ。でも一部の貴族が結託して、強引に政権を奪い取っちゃったんだよね」

「ひどい話だな」

「それで新たに即位した人が、周りの国に次々と攻め込んで……私の国も」

彼女は顔を伏せた。その体が小刻みに震えている。竜也は横に座って声をかけた。

「マルシア、やめとけ。思い出さなくていい」

「エルブレイス軍は二十万を超える大軍で首都に攻め込んだ。それに対してこっちは一万。戦争じゃなくて虐殺だったよ。彼らは逃げ遅れた女性や子どもまで容赦なく殺し、私の父上や母上も……」

「マルシア」

竜也は彼女の肩を抱きながら言った。

「辛かったな。戦争がどれほど残酷な物か、お前はそのときよくわかっただろう。俺の住んでる日本って国も、戦争に負けてひどい目にあっただ。その悲惨さは今も語り継がれてる」

彼女は顔を伏せたまま沈黙している。竜也はさらに続けた。

「だから俺は戦争が嫌いだ。軍隊に入って戦場に行くなんて本当は嫌でしょうがない。成り行きでこうなったけど、やっぱり今回を最後に……」

「待って」

彼女は竜也を抱きしめた。途端に甘い香りが漂ってくる。

「お、おい……」

「あなたが戦争を嫌いなのも、人を殺すのが嫌なのもわかったよ。でもお願い、もうしばらく私に力を貸して」

竜也は困惑した。彼女の考え方が理解できない。自分の国を攻め滅ぼされながら、なぜエルブレイスに加担するのだろう。

「あのさ……なんでお前はこの国で出世したいと思うんだ？」

「殺したい人間が二人いるから。前に言わなかった？」

「いや、聞いたけどさ。それとこれとが結びつかないんだよ」

マルシアの想い2

マルシアが碧い瞳に光をたたえながら言う。

「例えば……あなたが女の子だったとして、強大な軍事国家の上層部にいる人間の命を狙うとするじゃない。どういう方法をとる？」

竜也は考え込んだ。自分が美人なら、色香を餌にして近づき刺し殺す。美人でないなら、侍女として雇ってもらい食事に毒を盛る。これらはいずれも直接的な方法だ。

間接的な方法としては専門家に暗殺を依頼する、敵対する人間をたらし込んで殺させるといった物がある。謀反の濡れ衣を着せて主君に誅殺させるという手も考えられるが、単なる少女にそれは難しい。

「うーん……」

どれも成功率が低いように思える。そもそも、軍事国家の中核にいる人間を殺す事自体が至難の技だ。仮に成功したとしても逃げ切れるとは思えない。

「無理っぽいぞ。なんとか接近する事ができても、女の力でそいつを倒せるかどうか微妙だ。毒殺を狙うにしても毒味されれば終わりだし、成功させた後に逃げ切れるかどうかも怪しい。警護の兵に囲まれてるだろうから暗殺も厳しいし、とてもとても……」

「そうだよな。だからエルブレイスのために働いてるの。彼らが私を信用すれば成功する確率が少しは上がるから」

「へ？」

竜也は硬直した。彼女が狙っている相手はこの国の人間らしい。

「お前が殺したい相手って……」

マルシアがじつと見つめてくる。

「誰にも言わないって約束できる？」

「約束する。絶対に言わない」

彼女は耳元に口を近づけ、小声でささやいた。

「師団長ラグラス」

あるう事が直属の上司だ。竜也の全身から汗が噴き出す。

「も、もう一人は……」

「現国王グラナドウス」

それを聞いて完全に血の気が引いた。体が震えて止まらない。

「お、お前……」

彼女が口元を吊り上げ、再びささやく。

「逃がさないよ、竜也。あなたは私と一心同体。生きるときも死ぬときも一緒だからね」

顔面蒼白になっていると、マルシアに強く抱きしめられた。やわらかい体の感触が伝わってくる。

「私の国を攻め滅ぼした部隊の指揮官と、それを指示した国王。絶対に許さない。この命に代えてでも息の根を止めてあげる」

その端麗な顔に浮かぶ凄絶な笑顔に、竜也は鳥肌が立った。確かに美しい。しかし、この少女は自分を奈落の底に引きずり下ろす危うさを持っている。

「とんでもない奴と組んじまったな」

竜也は苦笑した。彼女が進もうとしている道はあまりにも危険だ。思い止まらせるに越した事はない。

マルシアの想い3

マルシアはベッドに寝転んだ。竜也もすぐ近くで横になっている。「ごめんね、こんな女で。前は違ったんだけど」

「いやいや、自分を卑下するなっつて」

「巻き込んだじゃって悪いとは思ってるよ。でもあなたほど頼りになる人ってなかなかいないし……許してね」

伏し目がちに言う彼女を見て、竜也はたずねた。

「なあ、他に選択肢はないのか？」

「えっ」

「自分の国が滅ぼされて悔しいのはわかるよ。でも、お前がしようとしている事は本当に危険だ。一人はまだなんとかなるかもしれないけど、もう一人は確実にやばい」

彼女は沈黙している。竜也はさらに続けた。

「復讐のために自分を犠牲にする事はないよ。お前は美人だし、色々な意味で強い人間だ。明るく前向きに生きていけば幸せな人生を歩んでいけるさ」

「駄目なんだよ」

「え？」

マルシアが竜也をまっすぐに見つめて言う。

「今の私を支えてるのは、復讐を遂げたいっていう想いだけなんだよ。それがなくなったら心が粉々に砕けてしまう。もう立っていらなくなる」

「そんな……」

「私の時間は、自分の国が滅ぼされたときから進んでないんだよ。もし進む事があるとしたら、それは」

彼女は一呼吸置いてからおもむろに言った。

「復讐を遂げてからの話だね」

竜也はため息をついた。これでは、いくらやめるように説得した

所で効果はなさそうだ。

「わかった、もう止めない」

「ありがとう。これからもよろしくね」

翌日、竜也はラグラスの部屋に行ってみた。扉は開いている。中をのぞくと、彼は椅子にどっかりと座り書類とにらめっこしている。

「おっさん、入っていいか？」

「おお、構わんぞ。そこに座れ」

竜也は中に入り、テーブルを挟んでラグラスの前に座った。

「不用心だなあ。ドアは開きっぱなしだし、護衛はいないし」

「風通しがよくて結構じゃないか。それに、四六時中むさい男にくつつかれてたらうつとうしい事この上ない」

竜也は苦笑した。これではマルシアにぐさりとやられる日も遠くない。

「それで、何か用か？」

「ちょっと聞きたくてさ。なんでマルシアをこの軍に入れたんだ？」

「ああ、それはな」

ラグラスは書類から目を放さずに答えた。

「あいつは味方が倒れていく中、たった一人で奮戦した。それは凄まじい強さだったぞ。全身に返り血を浴び、前には倒した兵士の山俺はそれを見て『こいつは使える』と思った。それで降伏させて部下にしたわけだ」

「え……普通、滅ぼした国の王女を兵士にするか？」

「使える奴は誰でも使う、それが俺の信条だ。例え、それが牙を剥く毒蛇であつてもな」

国王の指令 1

竜也は呆れ返った。そんな人間を部下にした所で造反する事は何に見えている。

「おっさん、あんたはアホなのか？」

「合理的と言え」

「マルシアは家族や臣下を皆殺しにされたんだろ？ あんたを恨んでる事がわかりきってるじゃないか。そんな人間をよく部下にできるな。俺なら怖くて夜眠れないぞ」

「そうか？」

ラグラスはにこにこ笑っている。竜也はそれを見てげんなりした。「お前は意外と小心者だな。自分を恨んでいようがいまいが、戦力になるならいいじゃないか」

「……どういう神経してんだよ」

竜也は、もし自分がラグラスだったらという事を想像してみた。夜中にベッドで寝ているとマルシアが現れ、ゆっくりと剣を抜く。彼女は渾身の力で突きを放ち、痛みで跳び起きた自分はその笑顔を見つめながら意識を失う。

「こ、怖い……怖すぎる……」

思わず身震いしていると、ラグラスが笑顔で言った。

「マルシアは俺を殺したいと思ってるだろうな。それはそれで構わないさ」

「はあ？」

「あいつは賢い。『相手を確実に殺せる』という状況が訪れない限りは手を出さないはずだ。だから今の所は大丈夫だよ」

「護衛も置かずドアも開けっ放しで、どこが大丈夫なんだ？」

「自分で言うのもなんだが、俺は剣の達人だ。一対一であいつに遅れを取る事はない。心配はいらん」

「へえ」

どうだかな、と竜也は思った。マルシアの実力は本物だ。まとも
に戦って彼が勝てるのか疑問である。

沈黙していると、ラグラスはさらに言った。

「近いうちに、隣国サンクタリスとの間で大規模な戦争がある。お
前とマルシアも参加しろ。総指揮官はコルネリオだ」

「え？」

竜也は思わず目を見張った。意外な人選だ。ラグラスはコルネリ
オをまるで認めていないはずなのに、どういふ風の吹き回しだろう。
「なんであいつを？」

「俺が決めたわけじゃない。国王が奴を気に入り、直々に抜擢した
のだ」

「へえ……」

「輜重というお荷物を抱えながら敵軍を撃退したのが大きかったな。
しかも相手は策士として知られるベルナルド、兵数はこちらの倍以
上。普通なら惨敗している所だ」

竜也は黙って聞いていた。自分たちが上げた戦果は相当評価され
ているらしい。

「兵士たちの間でも、奴を信奉する人間が増えていてな。『稀代の
策士』だの『青い軍神』だの言ってるよ」

国王の指令2

竜也はそれを聞いて苦笑した。コルネリオは軍神どころか凡人にすぎない。よくもそこまで持ち上げられたものだとつくづく思う。

「おっさんはコルネリオを見てどう思う？」

「愚物だ。あんな者に万単位の軍勢を預けるなど本来あってはならない。しかし……」

彼は一呼吸置いて考え込んだ。

「少しずつだが変化の兆しが見える。以前のような軽率さが鳴りを潜めた。その点だけは評価できるな」

「ふーん。それで、今回の敵はどんな奴なんだ？」

「隣国サンクタリスの正規軍。兵種は重装歩兵。総勢五万人」

「こつちは？」

「軽装歩兵二万、軽騎兵一万」

「ふざけんな、殺す気か！」

「勝てば死ななくて済む。がんばれ」

竜也は味方の兵数を増やすよう説得したが、ラグラスは頑として聞かない。エルブレイスは四方が陸続きの上に隣国を全て敵に回している。これ以上の人数を割けないというのが実情だった。

「冗談じゃないぞ、エルブレイスはこの大陸で最大最強の国なんだから？」

「確かにそうだが、年がら年中戦争をしている上に四方が全て敵だからなあ」

「なんで同盟を考えないんだよ……」

「今の国王にとって他国は侵略の対象でしかない。同盟なんぞはなから頭がないのさ」

それを聞いて思わず舌打ちした。四方を敵に回すというのは戦略的に好ましくない。いくら最強であったとしても、周辺の各国が力を合わせて立ち向かってきたらやられてしまう。

「もしかして……この国って、危機的状況にあるのか？」

「その通りだ。人口も兵士数も一番多いが、近隣諸国が全て敵ではさすがに厳しい」

竜也はため息をつきながらラグラスの部屋を出た。今回の戦争に参加したが最後、生きて帰れるとはとても思えない。三人で五人を倒せと言われれば自分の剣技でどうにでもなる。しかし三万人で五万人となると、いくら剣を振るった所でなんの意味もない。

エルブレイスに未来はあるのだろうか。そんな思いが頭をよぎった。この国のために命をかけて戦った所で焼け石に水のような気がする。

彼が悩みながらマルシアの部屋に帰ると、コルネリオが来ていた。涙を流し、鼻水を垂らしながら体を震わせている。

「竜也……待っていたぞ」

「わああ、汚ねえな！ とにかく鼻水を拭けよ！」

国王の指令3

マルシアが鼻紙を差し出すと、コルネリオは思いきり鼻をかんでから言った。

「大変な事になってしまった」

「聞いたよ。サンクタリス軍五万を相手に三万で戦えって話だろ？」

「その通りだ。とても私にできる芸当ではない。だからお前とマルシアの力を借りようと思って……」

彼は懐から短剣を差し出した。それは金色に輝いている。

「純金製だ。受け取ってくれ」

「えっ」

「足りないなら、もっと進呈する。だから……」

「いらぬよ、そんなもん」

コルネリオはまたもや涙を流している。竜也はそれを見て思わず苦笑した。

「断れよ、そんな話。『俺にはできません』って言えばいいだろ」

「言ったさ。でも聞き入れてくれないのだ」

「だから、できない物はできないって突っぱねろよ」

「国王も含めて、皆ができると思ひ込んでしまっているのだ。『前回勝ったのは私の力ではない』と何度言っても信じてくれない」

「じゃあしょうがないな、がんばれよ」

「竜也！」

コルネリオは竜也の肩をつかんで激しく揺さぶった。

「お前が手を貸してくれなければ、私を含めて三万人のエルブレイス人が死ぬ事になってしまう。頼む、この通りだ！」

彼は平伏し、床に頭をすりつけている。竜也はあわててその体を起こした。

「やめろって。俺もやりようがないんだよ。三万対五万じゃ勝つのは無理だ。天変地異でも起こらなきゃな」

「そこをなんとか、頼む！」

竜也は心底困惑した。前は人材がいなかったから自分が作戦を立てたが、今回は歴戦の軍師が立てるべきだ。ど素人の高校生が三万もの命を預かるなど論外である。

「うーん……」

頭を抱えていると、マルシアが微笑んだ。

「やりなよ」

「簡単に言うな。コルネリオ、他に人材はいないのか？」

「いるのかもしれないが……誰に声をかけても皆『あなたにはとても及びません』と言って引き下がるのだ。皆、私が国内随一の策士と信じて疑わない」

竜也はいよいよ困り果てた。勝っても負けても多くの人間を死なせる事になる。心底やりたくない。しかし、無為無策のまま戦争に参加すれば自分もともエルブレイス軍は全滅する。

この際、軍隊を抜けて逃げるか。そんな考えが脳裏をよぎった。しかし、目の前で平身低頭しているコルネリオを見捨てるに忍びない。

竜也はふっと笑みをこぼした。

「わかった、俺でよければ手を貸すよ」

「ありがとう……ありがとう！」

大平原の会戦 1

それから数日後、コルネリオ隊は隣国サンクタリスとの国境へ向けて進発した。

総勢三万人。内訳は軽装歩兵が二万、軽装騎兵が一万である。

武器は剣、槍、クロスボウ。防具は革の鎧、手袋にブーツ。歩兵はそれに加えて木製の盾を持っており、騎兵は持っていない。

彼らは数日の行軍の後、国境付近にある大平原に到着した。エルブレイスの動きはサンクタリスに知れ渡っており、既に五万の兵士が集結している。指揮官はレオニス。四十がらみの精悍な男性で、百戦錬磨の強者である。短い銀髪に白い肌、掘りの深い顔、鍛え上げられた体。身に着けているのは鎖かたびらだ。

サンクタリス軍は全て重装歩兵で構成される。武器は剣、槍、クロスボウ。防具は革の鎧、手袋、ブーツの他、鉄製の兜と盾を装備している。

この盾がかなりのくせ者だ。恐ろしく巨大で、体の大部分を隠してしまう。重装歩兵が密集して盾を構えたと隙がなくなる。歩兵はおろか、騎兵が突撃してもそれを破るのは難しい。

反面、彼らの弱点として機動力が乏しい事が挙げられる。盾が巨大で重量もあるからだ。しかし、前方からの攻撃に対しては滅法強いので利用価値はある。

竜也は戦場をつぶさに観察した。見渡す限りの大平原だ。やがて彼はコルネリオに話しかけた。

「使える物が何もない。崖とか川とかあれば利用するのになあ」

「敵も、それを見越してここで待ち構えていたのだらう。三万と五万が正面からぶつかれば勝負は見えているからな」

ここが起伏に富んだ地形なら、それを利用して戦力の差を埋める事も可能だ。しかし単なる平原ではどうしようもない。さらに、伏兵も置けなければ援軍もないときている。

竜也はコルネリオに近づいて小声で言った。

「これじゃ策も何もあつたもんじゃない。兵種の違いを利用して戦うしかないぞ」

「それで勝てる保証はあるのか？」

「これだけの兵力差だ。何をどうしようが勝てる保証なんかないでも……」

竜也の顔に笑みが浮かぶ。

「あんたは最後まで堂々としてろよ。兵士たちに勇気を与えるのも指揮官の努めだぞ」

「ふっ……」

コルネリオも笑みを返す。

「お前がいる限り、私は大丈夫だ。敵味方問わず、勇姿を見せつけてやるさ」

「おう、頼むぞ」

二人はしっかりと手を握り合つた。どちらの顔にも闘志がみなぎっている。

コルネリオは各部隊に指示を与えた後、剣を振りかざして叫んだ。

「歩兵隊前進！ これよりサンクタリス軍を粉砕する！」

大平原の会戦2

レオニスも剣を振り上げて叫ぶ。

「全軍前進！ ゴミ共を叩き潰せ！」

サンクタリス軍隊は総勢五万、エルブレイス軍は三万。兵力の差は歴然としている。しかも、コルネリオは騎馬隊とマルシア隊を後方に待機させたまま戦闘に参加させていない。

これでは勝負になるわけがなかった。当然のようにエルブレイスは押されまくっている。そもそも敵は巨大な盾を持った重装歩兵、こちらは普通の盾しか持たない軽装歩兵なのだ。仮に人数の差がなかったとしても、正面から戦えば敗北は明らかなのである。

味方の被害が拡大する中、コルネリオは涼しい顔で戦況を観察している。それを見た部下たちは苦境に立たされながらも奮戦した。軍神とまで言われる男が何もしないわけがない。そんな思いがエルブレイス軍を包み込んでいる。

いよいよ戦闘が白熱してきた。両軍の兵士がぶつかり合い、至る所で悲鳴と血飛沫が上がる。エルブレイスの敗色は濃厚だ。このまま押し切られるかと思われたとき、コルネリオが剣を振りかざした。

「騎馬隊前進！」

五千の騎馬隊が敵の右側を駆け抜けた。こちらから見ると左側だ。同時にクロスボウを斉射し、敵兵を次々と倒していく。

サンクタリス兵たちは狼狽した。今まで前方の敵と戦っていたため、盾はすべて前面に向けてしまっている。しかも密集隊形をとっているのです、迫り来る矢を避ける事もできない。

あわてて右側に盾を向けようとしたそのとき、今度は逆側に五千の騎兵が現れてクロスボウを斉射した。背後から矢を受けた兵士たちはばたばたと倒れていく。

指揮官レオニスはこの状況を見て瞠目した。密集隊形をとった事が裏目に出てしまっている。これでは狙い討ちだ。

「右翼の兵は右側に盾を向けよ！ 左翼の兵は左側に盾を向けるのだ！」

剣を振り上げて指揮を執る彼の姿を、少し離れた場所から見ていた者がいる。マルシア隊のガルフだった。

「竜也、あれだ。間違いない。奴を中心に兵が動いている」

「よし、仕留めるぞ」

彼らがじわじわと距離を詰め始めたとき、味方の歩兵隊から喚声が上がった。コルネリオが全軍突撃をかけたのだ。マルシアがそれを聞いて微笑む。

「これに乗じて彼を倒しましょう」

竜也も笑顔でそれに応じる。

「ああ、やってやるうぜ」

次の瞬間、マルシアがレオニスに剣を向けて叫んだ。

「マルシア隊、突撃！」

彼女の部隊である千人が突進した。今まで戦闘に参加せず、この機会を待っていたのである。戦意はこれ以上ないほど強い。

大平原の会戦3

サンクタリス軍は大混乱に陥った。騎馬隊に攪乱された所に歩兵隊の突撃を喰らったのである。態勢を立て直す間もない。

エルブレイスの騎兵はこのときとばかりに暴れまくった。混戦になれば巨大な盾は役に立たない。いくら前方に強くても、横や後ろから好き放題斬られてしまう。重たいので機敏に動けないのだ。

騎兵たちが敵兵を馬蹄で蹴散らし、槍玉に上げていく。それを見た歩兵たちも勇気づけられ、次々と斬りかかった。流れはエルブレイスに傾いている。

そんな中でも指揮官レオニスは冷静だった。周囲を部下に守らせながら兵士たちに声をかけ、態勢を立て直しを図っている。

「落ち着け！ 兵数はこちらが上だ。あわてずに戦えば必ず勝てる！」

やがて彼は、マルシア隊の存在に気づいた。それは周囲のサンクタリス兵を薙ぎ倒しながら向かってくる。

「皆、集まれ！ 円陣を組むのだ！」

レオニスは歩兵を集めて円陣を組んだ。巨大な盾で固めた鉄壁の守りである。ところが、マルシア隊には全く通用しなかった。

先頭のガルフが盾ごと重装歩兵を蹴倒し、円陣の中にいる者たちに大金づちの一撃を叩き込んだ。密集しているだけに逃げられない。狼狽している彼らをブラッドの槍が突き刺し、マルシアの左右二本の剣が斬り裂いていく。レオニスはたまらず叫んだ。

「散開！」

兵士たちがばらけた所を見計らい、真一文字に疾走してきた男がいる。竜也だ。彼は指揮官を間合いに捉えるが早いか真つ向から斬り下げた。

「らあっ！」

レオニスは素早く剣を抜いて受け止めている。竜也は引き下がり

ながら右手を一閃させたが、綺麗にかわされた。

「この小僧、いい度胸をしているな。私を倒せるとでも思っているのか？」

「思っ
てなきや突撃しないよ。わざわざ命を捨てるほど馬鹿じゃない」

レオニスは薄笑いを浮かべている。竜也はそれを見てむっとした。「何がおかしいんだよ」

「身の程知らずも、ここまで来ると立派な物だと思っ
てな。女と子どもは引っ込んでいろ」

「お前こそ、その歳で戦えるのか？ さっさと兵をまとめて退却した方が身のためだぞ」

「ふっ、ぬかしよるわ」

レオニスは素早く後退し、周囲の部下たちに命じた。

「その小僧を刻んでしまえ！」

重装歩兵たちが盾を捨て、剣を煌めかせながら斬りかかってくる。指揮官の近くに配置されていただけあって精鋭ぞろいだ。

彼らの凄まじい斬撃が降り注いだ途端、無数の閃光が走った。歩兵たちは首筋から鮮血を噴き出して崩れ落ちていく。

竜也は血にまみれた剣をレオニスに突き付けて叫んだ。

「雑魚をけしかけて勝てると思っ
なよ。次はお前の番だ！」

大平原の会戦4

レオニスは竜也の強さに目を見張った。ただ者ではない。戦士としては間違いなく超一流だ。

「皆、集まれ！ そいつを片付けろ！」

彼の命に応じ、再び兵士たちが集まってきた。しかし、今度はマルシア隊の面々も黙っていない。ガルフやブラッドを先頭に敵を蹴散らしていく。

サンクタリス兵は必死に戦ったものの、相手が悪すぎた。ガルフの大金づちの一撃が兵士を剣ごと弾き飛ばす。ブラッドの槍が次々と顔面に突き刺さる。マルシアの目にも留まらぬ剣撃が一瞬で手足を斬り裂く。

その凄まじい戦闘力に重装歩兵たちは震え上がった。対峙した途端に絶命させられてしまう。サンクタリス軍の精鋭が集まっていると言っのにまるで勝負にならない。

レオニスはその様子を見ながら、周囲の部下たちに退却を命じた。こんな部隊に噛みつかれてはたまらない。一旦引き下がり態勢を立て直す必要がある。

しかし、竜也がそれを許さなかった。彼に向かって疾走し、護衛の兵士たちを次々と薙ぎ倒す。遂にレオニスは意を決し剣を構えた。「そんなに死にたいか、小僧。望み通り冥土へ送ってやる！」

彼は闘志をみなぎらせ、目を見開きながら斬りつけた。速度と言いつ威力と言いつ、並の男ならあっけなく両断されているレベルだ。竜也は受け流し、顔面を目掛けて薙ぎ払った。しかし、切っ先が相手の頬をかすめたにすぎない。

「おっさん、強いな」

「ほう、言葉を発する余裕があるか。その歳でたいした物だ」

竜也は地を蹴って間合いを詰め、激しい突きを連続で放った。レオニスの剣がそれをさばいていく。猛攻を受けながらも崩れ立つ様

子はない。この指揮官は四十歳を超えていながら、サンクタリス軍五万の中で最強の剣士である。相手の攻撃の威力、速度、細かい動きに至るまでしっかりと把握していた。

「小僧、名はなんと云う？」

「竜也」

「そうか、俺はレオニスだ。貴様ほどの戦士と剣を交えられた事を嬉しく思うぞ」

「俺もだ。あんたほどの敵を前にして血が騒ぐよ」

周囲ではマルシア隊と重装歩兵たちが激烈な戦いを繰り広げ、喚声と悲鳴が間断なく上がり続けている。竜也はそれを聞きながら顔を引きしめ、再び突進した。その剣が閃光と化して走る。

「うおおおっ！」

触れる者をあの世へと導く幾筋もの光。それがレオニスを目掛けて殺到した。体は鎖かたびらで覆われているが、首から上はむき出しだ。一発でも喰らえば命はない。

戦士の意地

レオニスは縦横無尽に剣を振るい、相手の攻撃をさばききった。顔色一つ変えていない。次第に竜也の額に汗がにじんでくる。

竜也は口元をゆがめて微笑した。

「まさか、これほどとはな」

「まだまだ若い者に負けるつもりはないぞ。貴様が超一流の剣士であつてもな！」

今度はレオニスが疾走した。とても四十代とは思えない俊敏さだ。竜也が身構えた瞬間、凄まじい斬撃が次々と降ってきた。

竜也は必死に受け止めた。一撃一撃が恐ろしく重い。受け損なえば真つ二つにされてしまう。

そのとき、近くで戦っていたマルシアが叫んだ。

「竜也、大丈夫？ 手を貸そうか？」

「いや、いい。こいつは俺が倒す！」

レオニスがそれを聞いて笑っている。

「馬鹿な奴だ。二人がかりなら俺を倒せたかもしれないものを」

「俺にも戦士としての意地があるのさ」

「くだらん。そうやって無理をするから死ぬ事になる！」

次の瞬間、レオニスは上下左右から連続で斬りつけた。竜也がたまらずに後退するのを見てさらに踏み込み、剣を二閃三閃させる。

それがかわされてもまだ止まらない。首筋を狙った斬撃、腰を狙った薙ぎ払い、胸を狙った突き、足を狙った斬撃に頭上からの斬り下ろしが続く。竜也は懸命にさばき続けた。反撃したいのに隙がない。

「一丁かますしかないな」

彼はにやりと笑った。それを見たレオニスが眉をひそめる。

「貴様、この期に及んで何を……」

「こつこつ事さ」

彼は一気に跳び下がり、相手の間合いからはずれた。もはやどちらの攻撃も届かない。レオニスは、いよいよ意図がわからずに首をかしげている。

「飛び道具でも使うつもりか？」

「まさか」

竜也は剣をしまった。その鞘を左手、柄を右手で握りしめながら腰を沈めていく。

レオニスはそれを見て相手の意図を理解した。突進すると同時に抜き打ちで倒すつもりだ。この一撃に全てをかけるというわけなのだろう。

「ふっ、なるほどな。おもしろい」

彼は笑みを浮かべ、剣を上段に構えた。相手が間合いに入り次第叩き斬るつもりだ。

「さあ、来い！」

「おう！」

竜也は地を蹴った。前方には剣を構えた歴戦の強者がいる。思惑通りにいかなければ一瞬であの世逝きだ。

相手の間合いに入った途端、斬撃が降ってきた。こちらはまだ剣を抜いてすらいない。

「遅いわ、死ね！」

竜也は目を見開き神経を集中させた。ここが勝負所だ。

会戦の終結 1

両断されると思われた瞬間、竜也は身を翻して紙一重でかわしていた。レオニスの顔が恐怖でゆがむ。

「し、しまっ……」

その直後、彼の横を竜也が一瞬で払い抜けた。既に勝負は決している。

「見事……だ……」

レオニスはその場に倒れ伏し、二度と動く事はなかった。

指揮官を失ったサンクタリス軍はいよいよ混乱した。副官や大隊長を中心にまとまるうとしているのに、マルシア隊がそういった人間をことごとく斬り捨ててしまう。これによって指揮系統が完全に失われ、戦闘を続ける事すら困難な状態に陥った。

残る道は逃走である。サンクタリス兵は次々と走り去っていく。エルブレイス軍はそれを追い回し、包囲して殲滅した。もはやレオニス隊にまともな戦闘能力はない。叩き潰すのに時間はかからなかった。

やがて戦争は終結した。エルブレイス軍の死者は一万三千人余り。サンクタリス軍は一人弱が逃げ延び、指揮官を含む四万人以上が死亡した。エルブレイスの大勝利である。

コルネリオは生き残った兵を集め、彼らの顔を見回しながら叫んだ。

「この戦の勝利は私がつかみ取った物ではない。諸君らの奮闘によってもたらされた物である。皆に心から感謝の言葉を述べたい。ありがとう。そして最後に……」

彼は剣を振り上げて言った。

「エルブレイス万歳！」

兵士たちも剣や腕を振り上げて叫ぶ。

「エルブレイス万歳！」

「コルネリオ様万歳！」

竜也は微笑しながらコルネリオを見つめていた。銀の甲冑に身を包み、群青色のマントをたなびかせた姿は実にりりしい。二万の兵数差をもともせずに勝利した以上、今後も青い軍神と呼ばれる事になるだろう。

やがてエルブレイス軍は帰途についた。負傷者は多いが士気は上がる一方だ。

砂利が敷かれた街道を進みながら、コルネリオが竜也に声をかけた。

「生き延びる事ができたのはお前のおかげだ。礼を言うぞ」

「気にすんな」

「この恩は生涯忘れない。もしそれを返す機会が訪れたなら、私は迷わずに返すつもりだ」

竜也は苦笑した。恩を売るつもりなど全くない。むしろ、速やかに忘れてくれた方がさっぱりしていいくらいだ。

沈黙していると、さらにコルネリオが言った。

「とりあえず、何かほしい物があればなんでも言ってくれ。金でもいいし美女でもいい」

「いらね」

「竜也……」

「気持ちだけ受け取っておくよ」

会戦の終結2

竜也はたいして金に興味はない。美女はマルシアがいれば充分だ。それより気になるのは、今後もエルブレイスのために戦う必要があるのかという事だった。

エルブレイスは強大であるのをいい事に、周辺の国家に対して侵略行為を繰り返している。そんな国のために奮闘するというのが馬鹿らしくて仕方ない。

今回の戦いで四万人を超えるサンクタリス人を葬ったが、彼らは死ななければならぬような罪を犯したわけではないのだ。単に自分の国を守るために戦っただけで、むしろ非はこちら側にある。

「俺は何をしてるんだ」

そんな思いが頭の中に浮かんできた。

奴隷同然の身分から脱するために剣を振るい、コルネリオを助けるために策を弄した。しかしそれらは全て、エルブレイスの侵略行為を助長する事につながってしまうのだ。

うつむきながら歩いていると、ブラッドに声をかけられた。

「どうした、勝ったのにしけたツラしやがって」

「いや……逆に聞くけど、お前は嬉しいのか？」

「ああ。生き残る事ができたからな」

「そうか」

竜也は無理に笑顔を作った。心の中ではちっとも笑っていないのだが、仲間に心配をかけたくない。

「俺も生き残れて嬉しいよ。いろいろとありがとうな、ブラッド」

「別に礼を言われるほどの事はしてねえよ。気にすんな」

その後、竜也は帰還しマルシアの部屋に戻った。彼女は疲れきってベッドで寝ている。一方、竜也は椅子に座ってうとうととしていた。

再び気がつくと、そこは建物の中だった。周囲には白く巨大な円柱が整然と立ち並び、床には金色や銀色の糸で刺繍された緋色の絨

毯が敷きつめられている。窓のステンドグラスを通して柔らかな光が屋内に差し込む。天井を見上げれば、甲冑を着込んだ騎士の絵が一面に描かれている。

全然見覚えがない場所だ。なぜ自分がここに立っているのか理解できない。抜き身の剣を握っているが、その理由もさっぱりである。「何やってんだ、俺」

とりあえず剣をしまおうとしたそのとき、前方から数人の兵士が駆けてきた。皆、銀色の甲冑を着込んでいる。何事だろうと思っているとその中の一人が叫んだ。

「アンドリユー様、どうか落ち着いてください！ あのような下賤の者と、あなた様が結ばれる事などありえないのです！」

「はあ？」

「次期国王であるの方がよりによって……平民であればまだ方法はありませんが、いくらなんでも奴隷は無理です！」

「へ？」

なんの話やらさっぱりわからない。首をかしげているうちに、自分の口からこんな言葉が飛び出した。

「それで……貴様らはイリーナをどこへやった！」

竜也は内心驚いた。こんな事を言っつもりなどなかったのに、体が勝手に動いてしまう。

すると、兵士の一人がおずおずと答えた。

「お許してください。彼女はもう、この世におりません」

失われた記憶

竜也の目尻が怒りで吊り上がり、頭に血が上っていく。

「おのれ、許さん……誰の差し金だ！」

「国王陛下です。どうか怒りをお収めください」

「黙れ！」

竜也は右手を一閃させた。顔面を斬り裂かれた兵士が悲鳴を上げて倒れる。

「もう貴様らを臣下だとは思わん。現国王ももはや父親ではない。一人残らずあの世へ送ってやる！」

怒鳴った所で意識が途絶えた。再び気がつくと、マルシアの部屋の椅子に座っている。

「なんだ、夢か。変だと思った」

それにしても、やけに生々しい夢だ。建物も人間も恐ろしくリアルだったし、自分の心の中にはイリーナを失った悲しみが残っている。

やがて、マルシアがベッドから声をかけてきた。

「どうしたの？ 過去に倒した人でも出てきた？」

「いや、そうじゃなくて……」

竜也は今見た内容をそのまま話した。自分がアンドリューという名の王子だった事。イリーナという奴隷に恋をした結果、その女性が殺された事。マルシアは目を丸くしながら聞いている。

「その話、聞いた事があるよ。本に載ってるのを見た事もある。竜也はどこで知ったの？」

「いや、知らなかったんだけど」

「嘘ー！ 絶対、どこかで聞くなり本で読むなりしたんだよ」

竜也は記憶をたどってみたが、やはり心当たりがない。

「うーん……ちなみに続きはどうなるの？」

「アンドリュー王子は恋人を殺された事に激怒して、関わった臣下

全員と国王を叩き斬ったんだよ。それから自害して終わり」

「ひどすぎる話だな、いろいろと」

呆れ返っている竜也を見て、マルシアはしきりにうなずいている。「だよねえ。一番かわいそうなのはイリーナだよ。美少女だったから王子様に見せめられて、奴隷だったから殺されて。運が悪かったとしか言いようがないよ。本人にはどうにもできないもんね」

「うん。あと、一番ひどいのは国王だな。実の親を叩き斬った王子も王子だけど」

「それだけ愛してたって事でしょ、イリーナを」

「うへえ、重い愛だなあ。それって作り話？ 実話？」

「さあねえ、昔の話だし。その国が実在してたかどうかすらわからないよ」

「ふーん、まあいいや。それよりさ……」

竜也は真顔でマルシアを見つめた。彼女もベッドから身を起こしてこちらを見つめている。

「いい加減、戦争に参加するのが嫌になった。もう人を殺すのはうんざりだ。気が滅入るよ」

「その気持ちはわかるけど我慢して。私はもっと昇進しなきゃならないんだよ。そうしないと標的に近づく事すらできないから」

竜也の想い

竜也は、マルシアの言葉を聞いて疑問を持った。

彼女が奮闘すればするほどこの国は強大になってしまふのだ。そんな事をしていくくらいなら、敵対する国に身を投じてエルブレイスと戦った方がいいのではないだろうか。

「マルシア、他へ行った方がいいんじゃないか？」

「……逆に聞くけど、なんの力もない女の子がこのこ出かけていつて何ができるの？」

「いや、お前ほどの実力ならどこの軍隊だって受け入れてくれるよ」

「まさか。門前払いがいいとこだよ。それに運よく入る事ができたとしても、自分の思い通りになるとは限らない。拠点防御を命じられて皆に籠る事になったり、エルブレイス以外の方面に回されるかもしれないじゃないの」

「うーん……」

竜也は腕を組んで考え込んだ。マルシアに復讐を果たさせるためとは言え、エルブレイスのために戦うという事自体が無駄に思えてしょうがない。

「じゃあ、戦争にわざと負けてこの国を窮地に追い込むっていうのは？」

「それをやるなら、よっぽどの大部隊を率いていないと効果がないね」

「なんか、今のままじゃものすごい遠回りだな」

「まあね」

しばらく彼女と話した後、気晴らしに街へ出る事にした。マルシアは行きたくないらしい。仕方なく一人で部屋を出た。

彼が普段いるのは国王の居城であり、周囲には街が広がっている。城の大手門から街の出口まで一直線に目抜き通りが貫き、その両側に商店が建ち並び。しかし営業している店はまばらで、通りを歩く

人も少ない。

「なんか、さびれてるなあ……」

マルシアに聞いた話だと、ここアストリアはエルブレイスの首都だそうだ。人口は二百万を超えるらしい。それなのに、この活気のなさはどういふ事だろう。

竜也は目抜き通りをあてもなく歩いた。両側には煉瓦で造られた建物が並んでいる。一階部分はアーケード付きの商店で、二階から上は集合住宅であるようだ。

腹が減っていたので食べ物を探したが、手に入ったのは固いパンだけだった。しかも食べる場所すらない。仕方なく店先でぱくついていると、一人の男性が通りの真ん中で叫んだ。

「奴隷の競りを始めるぞ！」

その声に応じ、周囲から男たちが少しずつ集まってくる。竜也は興味をひかれて近づいた。

やがて目抜き通りに人垣ができた。さっきまで閑散としていたのだが、今は活気に満ちている。客は男性ばかりだ。競りが行われる時間をあらかじめ知っており、それに合わせて集まってきたのである。

アストリアの街1

人垣の中央には台座が置かれ、その後ろに十代から二十代の女性が並んでいた。右足首と左足首が縄でつながれている。小股で歩く事はできても走る事はできない。彼女たちの逃亡を防ぐための物である。

しばらくすると、薄汚れた服を着た小男が現れて競りを始めた。「じゃあ始めるぜ。隣国アルムハウトからさらってきた綺麗どころだ。まずはこの女、千五百オンスからいこうか！」

最初の一人が台座に上げられた。金色のショートヘアに白い肌、緑色の瞳。すつきりとした目鼻立ちにしなやかな手足をしており、水色のチュニツクを身に着けている。

「さあさあ、誰かいないのか。こんないい女を好き放題できるんだぜ。買わないなら持って帰るぞ！」

たちまち周囲から声上がる。

「二千オンス！」

「三千オンスだ！」

竜也は気分が悪くなった。さつき食べたパンが一個百オンスである。平気で人間を売り買いする神経が信じられないし、こんな安値で取引されているのはもつと信じられない。

段々値段が吊り上がっていく。彼はそれを見ながら、この競りをぶち壊しにしてやろうと考えた。

「さあ、一万オンス以上はいないのか。いなけりやこれで決まり…」

…

「二万オンス」

竜也の一言で、一瞬にして客が静まった。奴隷商人の男が手を打って喜ぶ。

「売った！」

これで一人の美女を手に入れた。競りはさらに続く。竜也はどん

どん値を吊り上げ、十五人いた奴隷を全員買ってしまった。これぞ競りはお開きだ。

商人はほくほく顔で帰っていったが、一方で怒りをあらわにした者がいる。周囲の客たちだった。

でつぶりとした男が進み出て竜也をにらみつけた。年齢は三十前後。上半身は裸で下半身に赤いズボンを履いており、手には曲刀が握られている。

「おう、こら。てめえ一人で買い占めやがって、俺たちをなめてんのか！」

他の客も殺気立ちながらにらみつけてくるが、竜也はどこ吹く風だ。男はますます激昂した。

「こら、聞いてんのか！ 殺すぞ！」

「やれるもんならやってみろ」

「この野郎！」

太った男は曲刀を振りかざし、他の者たちも一斉に抜刀した。竜也の味方は一人もいない。男が目を見開いて斬りつけてくる。

「このガキが、くたばれ！」

竜也は身を翻してかわした。自分も剣を持っているが、抜いてすらない。

「おっさん、空気を斬って楽しいか？」

アストリアの街2

太った男はさらに斬りつけたが、かすりもしない。彼の顔がどんどん赤く染まっていく。

「このガキが、なめやがって……お前ら、見てないで手を貸せ！」
遂に周囲の男たちも襲いかかってきた。竜也一人に対し、敵は十人だ。普通であれば斬り刻まれて絶命する所である。

その瞬間、彼の剣が煌めいた。直後に金属音が響き渡り、男たちの手から剣が消えている。竜也が弾き飛ばしたのだ。

「げえっ！」

「な、なんだこいつ！」

「ひ……ひいつ、強すぎる」

彼らは青ざめながら逃げだした。残ったのはさっきの太った男一人だけだ。

「くっ、てめえ……一体どこのどいつだ！」

「お前に名乗る必要なんかはないよ」

「この俺をコケにして生きて帰れると思うなよ！」

男は後ろ手に隠していた手斧を振り上げ、真っ向から斬り下げた。だが相変わらず当たらない。

「なら、これでも喰らいやがれ！」

今度は横薙ぎに一閃させたが、これも綺麗にかわされている。

「うがぁあつ！ 畜生！」

彼がさらに斬りつけようとしたそのとき、柄の部分を通つ二つにされた。竜也は涼しい顔で剣を鞘にしまい込んでいる。

「あきらめな、おっさん」

「こ、このガキ……次に会ったときはただじゃおかねえからな！」
男は唾を吐いて走り去った。残ったのは竜也と十五人の女性だけだ。

近づいていくと、奴隷たちは身をすくめた。完全に怯えてしまっ

ている。竜也は彼女たちの両足を拘束している縄を全部断ち切り、さらに言った。

「これで自由だ。気をつけて自分の国に帰りなよ」

奴隷たちは目をしばたいたいている。やがてその中の一人が口を開いた。最初に競りにかけられた女性だ。

「……まさか、助けてくださったのですか？」

「そうだよ」

「あ、ありがとうございます！ エルブレイスにあなたのような方がいらつしやるなんて……」

「俺はこの国の人間じゃない」

「えっ？」

女性は目を見開いて沈黙している。竜也は微笑み、銀貨の入った袋を渡した。

「大分使ったから残り少ないけど、帰るときの費用にしてくれ。じやあな」

呆然と立ち尽くす彼女を背に、竜也は再び歩きだした。「こんな偽善をして何になる」という思いが心の中に渦巻いている。

「ひどいもんだ。俺はこんな国のために必死で戦ってたのか」

だんだんと自分に腹が立ってきた。他人に流されて生きるからこっついう目にあうのだ。

アストリアの街3

竜也は城へ帰る事にした。気晴らしのために街へ出たが、むしろ気分は悪くなるばかりだ。これならマルシアの部屋にいた方がずっといい。

無言で歩いていると、背後から声をかけられた。

「あ、あの……」

振り返ると、さっきの奴隷が立っていた。金色のショートヘアの女性である。歳は十七、八といった所だ。

「あれ、まだいたのか。何か用？」

「先ほどは本当にありがとうございます。私はセレスティアと申します。せめてあなたのお名前を……」

「竜也だよ」

「リユーヤ様ですね。このご恩は生涯忘れません」

「忘れていいよ」

どうせ二度と会う事はないし、借りを返してもらえないだろう。竜也はそう思いながら彼女と別れた。

城に戻ってマルシアの部屋に入ると、コルネリオが来ていた。椅子に座り、涙を流し鼻水を垂らしている。

「竜也……待っていたぞ」

「わああ、汚ねえな！ とりあえず鼻水を拭けよ！」

コルネリオはマルシアから紙を受け取り、鼻をかんでいる。竜也は「前にもこんな事があったな」と思いながら苦笑した。

「何があったんだよ、また無茶な作戦でも押し付けられたか？」

「違う、命を狙われているのだ。自分の邸宅の庭で散歩をしていたとき、目の前を矢が横切った。近くの木に突き立ったのでよく見たら、紙が結び付けられている。そこにはこう書かれていた。『あなたのお命、頂戴致します。紅蓮のアニトラ』とな。もう恐ろしくて恐ろしくて……」

竜也は呆れ返った。大の男が、女に命を狙われて震えているというのも情けない。

「そんな奴、返り討ちにしてやればいいだろ」

「馬鹿を言うな！ 紅蓮のアニトラと言えは有名な殺し屋だぞ。一度狙われれば命はない。もうどうすればいいのか……」

「ラグラスに報告したか？」

「したさ。『ご自分で対処してください』と言われたよ」

すっかり青ざめているコルネリオを見て、竜也は気の毒になってきた。

「わざわざ予告状を出すあたり、よっぽど腕に自信があるんだろうな。わかった、任せろ。しばらくの間、俺とガルフとブラッドが護衛をしてやるよ」

「本当にすまない。お前には借りを作ってばかりだな」

「気にすんな。じゃあマルシア、しばらく留守にするよ」

竜也はガルフとブラッドをつれてコルネリオの邸宅へ向かった。城下街を歩いたが刺客らしき気配はない。しかし彼はがたがたと震えている。

「どうして私の命を狙うのだろう。今は部隊を指揮していないのに」

「そりゃ、あんたが邪魔なんだろうさ。その殺し屋ってどこの国の人間なんだ？」

「カールハイムだよ」

「……そりゃ、狙われて当然だろ」

コルネリオ邸1

竜也はコルネリオの呑気さ加減に呆れ返った。

「あなたなあ……例えば、エルブレイスをどこかの国が侵略したとする。そこに『青い軍神』なんて呼ばれる連戦連勝の指揮官がいたらどう思う？」

「迷惑極まりないな」

「だろ？ 消えてほしいと思われるのも当然じゃないか」

「私一人を暗殺した所で、状況が変わると思えないのだが……」

竜也は思わず苦笑した。このコルネリオという男は、自分の価値をまるで理解していない。

「あのさ。今のあなたはエルブレイス軍の中で信仰されてるんだ。

それは味方にとって大きな力になる。指揮官としての価値はこの上なく高いんだよ」

「そういう物か」

「そういう物だよ」

ラグラスはコルネリオをたいして評価していない。当然ながら、指揮官には不向きだと考えている。しかし竜也は、この男が指揮官に向いていると思っていた。

コルネリオは臆病である。ただ、それだけではないのが彼のいい所だ。敵の戦力に対して恐怖を感じながらも、兵士たちの前でそれを押し殺す事ができる。これは大きな強みだ。

恐怖心が麻痺した人間が指揮官になれば、部下たちを死地に追いやってしまう。だがコルネリオにはそれがない。敵の強さと怖さを充分に理解した上で立ち向かっていける人間こそが指揮官に向いている。

もう一つの理由は、部下の諫言をきちんと聞く事だ。これも非常に大きい。自分の能力を絶対視して、他人の言う事に耳を貸さない指揮官は思わぬ落とし穴にはまる。コルネリオにはそういった危険

性がない。

知謀にかけても武勇にかけてもさっぱりな人間なのだが、竜也は高く評価している。同時に、将来マルシアがエルブレイスと敵対したとき、この男が大きな壁となつて立ちはだかる可能性も感じていた。

やがて一行はコルネリオの邸宅に到着した。敷地内は芝生で覆われ、黒い鉄柵が周囲を取り囲んでいる。それはいいのだが、所々に木が植えてあるのが問題だ。竜也はコルネリオに声をかけた。

「自宅の敷地に木を植えてるのは感心しないな。刺客が隠れる場所を提供してやつてるようなもんだ」

「なるほど、すぐに撤去しよう」

コルネリオは衛兵を呼んで指示を与えている。竜也はそれが終わったのを見計らつてさらに言った。

「それに衛兵が少なすぎる。門の前に二人、ドアの前に二人いるだけじゃ心もとない。屋外に四人しかいないじゃないか。腕の立つ人間が来たらあつさりやられるぞ」

コルネリオ邸2

コルネリオ邸は煉瓦でできた五階建ての住宅だ。竜也はそれを外から見て指摘した。

「一階に大きな出窓がいくつもある。侵入してくれと言ってるようなもんだ。なんとかふさげないか？」

「考えてみよう」

「それから、できる限り外出を控える。歩いているときに弓矢で狙われたら対処できない。どうしても出たきゃ鉄兜と甲冑を身に着けるんだ。あと、四方に衛兵を配置しろ」

「心得た」

「それから……」

「まだあるのか」

コルネリオはげんなりしている。竜也はそれを見てすっと目を細めた。

「死にたきゃ勝手にすればいいさ。別に俺は困らないし」

「わかった、わかった！」

「続きは中で話そうか。ここにいると危ないから」

竜也たちは邸宅の中へ入った。廊下には群青色の絨毯が敷き詰められており、壁には絵画が飾られている。他にも甲冑やら巨大な壺やら、等身大の彫像なども置かれていた。

「コルネリオ、余計な物は全部片付ける。刺客が隠れる場所を作るな」

「あ、ああ」

「それから、寝るのは五階の一番奥の部屋にしろ。俺たちも同じ部屋で寝る。加えてドアの前にも廊下にも衛兵を配置するんだ。そうすれば刺客は護衛にぶち当たる」

「なるほど」

「屋上から壁伝いに侵入する事も考えられるな。部屋に窓がなけり

やいいんだが」

「一番奥の部屋にはないはずだ」

「よし」

その日から、竜也とコルネリオは行動を共にするようになった。アニトラについて調べてみたがよくわからない。判明したのは女性である事と、赤い髪をしているという事だけだった。

護衛に関しては、竜也とガルフとブラッドの三交替制をとっている。あまり長い時間くっついていても集中力が持たない。今は夕食の時間で竜也が担当だ。

コルネリオは席に着いて食事をしている。テーブルに並べられた食べ物には全て毒味済みだ。

竜也が彼の後ろに立っていると、使用人の一人が近づいてきた。最近雇われた女性でブレンダという。年齢は十七。黒いツインテールに白い肌、ぱっちりした目に整った輪郭、すらりと長い手足をしている。瞳が赤く、やたら胸が大きい。着ているのはメイド服だ。彼女はグラスに入れた飲み物を持ってきて竜也にすすめた。

「お疲れ様。飲み物はいかが？」

「ありがとう。でも今はいいよ」

「ふふっ、真面目な護衛だねえ」

コルネリオ邸3

竜也は直立したまま微動だにしない。コルネリオはそれを見て声をかけた。

「そんなに気合いを入れて護衛しなくてもいいぞ。なんなら一緒に食事をするか？」

「馬鹿言え。あんたが狙われたときに、メシ食ってて反応が遅れたらどうするんだよ」

「うーん……では、せめて飲み物くらいもらってくれ。申し訳なすぎで見てもらえん」

「わかった。じゃあ少しだけな」

ブレンドが満面に笑みを浮かべながらグラスを差し出す。竜也は受け取って口にした。赤紫色の液体でやたら辛い。

「なんだこれ？」

「特製飲料」

「ごめん、ちよつと無理」

香辛料を山ほど入れたような凄まじい味に、思わずグラスを突き返した。ブレンドが頬をふくらませてから言う。

「飲めないの？」

「無理だよ、こんなの」

「心を込めて作ったのにい！」

「本当にごめん」

竜也はひたすら恐縮している。コルネリオはブレンドをなだめようと口を開いた。

「気持ちにはわからないでもないが、その辺でやめておけ」

「えー、せつかく作ったのに」

「じゃあ私がもらうよ」

「わかりました、どうぞ」

コルネリオはグラスを受け取り、液体を口に含んだ。みるみるう

ちに顔色が変わっていく。

「うっ……」

「おいしいでしょ？」

「う、うう」

竜也はあわてて彼を止めた。

「おい、やめとけ。無理すんな！」

「く、くっ……失礼」

コルネリオが席を立ててトイレに向かう。竜也は急いでその後を追った。ブレンダもついてくる。

トイレの前で待っていると、彼女が話しかけてきた。その手にはさっきのグラスが握られている。

「そんなにおいしくないかなあ、これ」

「味見してみればわかると思うよ」

「そう？ じゃあちよつとだけ……」

ブレンダは液体を口に含んだ。途端にその顔から血の気が引いていく。

「う……っ」

彼女がトイレに駆け込んだのを見て、竜也はため息をついた。中から激しい咳が聞こえてくる。

「げほっ、ごほっ！ うええっ！」

「……よくあんな物を他人にすすめるよな」

やがてコルネリオが出てきた。顔面が蒼白になっている。あまりのまずさにまいってしまっただらしい。

「竜也、食欲が失せた。今日はもう寝る」

「そうか、わかった」

コルネリオは寝室に行き、ベッドに入った。竜也はその横にある椅子に座っている。この部屋にはもう一つベッドがあり、そこで寝ているのはガルフだ。ブラッドは外出している。

コルネリオ邸4

部屋の広さは大体十メートル四方だ。ベッドと椅子が二つずつ置いてある他、戸棚と燭台しかない。

衛兵はドアの外に四人を配置してある。装備しているのは剣と鎖かたびらだ。中に入ろうとすれば彼らと戦わざるを得ない。仮に全員を倒したとしても、竜也やガルフがひかえている。並の殺し屋がどうにかできる状況ではなかった。

コルネリオはベッドで寝入っている。竜也が椅子に座ってそれを眺めていると、突然ガルフが跳ね起きた。

「どうした？」

「様子がおかしい。見てくる」

その直後、ドアを叩く音がした。開けてみると衛兵が立っている。「侵入者です！ 黒づくめの男性が二人、武器は長剣と短刀。四階で交戦中です！」

竜也は慄然とした。一階から三階までの廊下には、それぞれ十人ずつ衛兵を配置してある。なのにあっさりと突破されるとはどう言う事なのだろう。

彼は必死に自分を落ち着かせながらたずねた。

「侵入者は二人だけで間違いないのか？」

「現在確認しているのは二人だけです！」

「こっちの被害は？」

「二十人を超えています！」

「嘘だろ……」

化け物じみた強さだ。竜也はコルネリオを揺り起こし、さらに剣を引き寄せた。自分の出番はすぐに回ってくるだろう。

ガルフが大金づちを担ぎ上げて言う。

「俺が行く。竜也はここに残れ」

「いや、俺も行った方が……」

「そうしたら誰がコルネリオを守るんだ。他の刺客が衛兵に化けて潜り込んでいるかもしれないのに」

竜也は沈黙した。確かに陽動という可能性がある。自分が刺客の立場ならそうするだろう。仲間を使って護衛を攪乱する一方、倒した兵士の鎖かたびらを着込んで内部に侵入するのだ。あとは何食わぬ顔で標的に近づき、隙を見て突き殺せば終了である。

彼はガルフを見てうなずいた。

「わかった、外の二人は任せろ。よろしく」

「ああ。例えやられたとしても、必ず一人は片付ける。後始末は頼むぞ」

ガルフは部屋から出ていった。残ったのは竜也とコルネリオ、報告に来た兵士と四人の衛兵である。確認した所、兵士たちは間違いなくコルネリオの部下だ。つまりこの部屋に刺客はいない。

竜也はドアを閉め、その前に五人の兵士を配置した。刺客が侵入した瞬間に叩き斬る寸法だ。自分はコルネリオと一緒に部屋の奥へ下がっている。万が一包囲を抜けられたとき、最後の壁になるためだ。

コルネリオは青ざめた顔をしながら震えている。竜也はそれを見て微笑した。

「どうした、青い軍神の名が泣くぞ」

コルネリオ邸5

コルネリオはひきつった笑いを浮かべている。

「そうだな、ここを戦場だと思つて堂々とするよ」

「ああ、頼むよ。あんたがそんなんじや士気が下がる一方だから」
そのとき、ドアを激しく叩く音がした。同時に若い女性の声がする。ブレンダだ。

「大変です、開けてください！」

衛兵の一人が身構えながらたずねる。

「どうした？」

「刺客が強くて……ガルフさんがやられちゃいます、なんとかしてください！」

コルネリオは急いでドアを開けさせた。ブレンダが部屋に入るなり叫ぶ。

「急いでください、早く早く！」

竜也は齒噛みした。コルネリオのそばを離れる事はできないし、ガルフを見殺しにする事もできない。

やがてコルネリオが真顔で言った。

「仕方ない、衛兵五人を援護に向かわせよう」

竜也はうなずいた。全員で行くのは論外だ。コルネリオが狙撃されればおしまいだからである。また、彼一人を残していくのも危険だ。となれば戦力を分散せざるを得ない。

五人の衛兵は駆け出していき、竜也はそれを見送ってからドアを閉めた。残ったのは彼とコルネリオ、ブレンダだけである。

ブレンダがガタガタ震えながら言う。

「殺し屋の人たち、本当に怖くて……それにめっちゃめっちゃ強いんです」

コルネリオは笑みをこぼし、彼女に近づいた。

「すまないな、巻き込んでしまって。でも心配ないよ、竜……」

そのとき竜也が叫んだ。

「よける！」

「えっ？」

コルネリオは咄嗟に身を翻した。目の前を釘のような物が通りすぎる。投げたのはブレンダだ。

彼女は一瞬で肉迫し、背中に隠していた短剣でコルネリオを斬り下げた。だが竜也が間に入って受け止めている。

「くっ……お前が紅蓮のアニトラか？」

「うん」

「赤い髪をしてるはずじゃ……」

「黒く染めてるだけだよ」

彼女は跳び下がると同時に右手を一閃させた。先の尖った金属製の棒が三本、竜也の顔を目掛けて飛んでくる。彼はわずかに動いただけでこれをかわした。棒が顔の横を通りすぎていく。

アニトラは竜也を見つめて微笑んだ。

「強いねえ。私の仲間がやられるわけだよ」

「え？ お前の仲間と戦った事なんかないぞ」

「あるでしょ、覚えてないの？ 忘れたとは言わせないよ。カールハイムのウェルズ隊を破った後……」

「ん、ああ。そっぴりや刺客を撃退したな。お前、あの子の女が」

コルネリオ邸6

竜也は剣を構えてアニトラを見据えた。コルネリオは後方に下がっている。

彼女が再び右手を一閃させた。直後に数本の金属の棒が空気を切り裂いて飛んでくる。竜也は素早く横に移動してかわした。額に冷や汗がにじむ。

アニトラが薄笑いを浮かべながら言う。

「やっぱり強いね、あなた。ねえ、私の相棒になってくれない？」

「誰が殺しの片棒なんか担ぐか」

「そんな事言わないでよ。竜也みたいにまっすぐな人、すごく好みなんだよね。いろいろ尽くしてあげるからさあ」

彼女はメイド服の胸元を開き、胸の谷間を見せつけた。さらに舌を出し、ピンク色の唇をゆっくりとなめ回す。竜也はそれを見てげんなりした。

「お前も女の端くれなら、恥じらいつて物を持ちなよ」

「うわ、男に言われたし！」

「いいから胸をしまえ」

彼女は顔を赤らめながら胸元を閉じた。その顔がぶるぶると震えている。

「よくも女に恥をかかせてくれたね」

「羞恥心がないお前が悪いんだろ……まあ、目の保養にはなったよ」

「どうしても仲間になる気はないわけ？」

「ないつつつてるだろ」

アニトラは十本の細い棒を取り出した。先端が尖っており金属製だ。長さは十センチくらいで、それを左右の手に五本ずつ握っている。

「仕方ないね、残念だけど死んでもらうよ！」

彼女は右手を一閃させ、さらに左手を一閃させた。十本の棒が竜

也に向かつて飛んでいく。

竜也がそれをかわした瞬間、眼前に相手の顔があった。直後に閃光が走る。

「うわっ！」

彼の首筋を短剣がかすめた。アニトラがさらに踏み込み、右手を目がけて斬りつける。竜也は防戦一方だ。

たまらず体勢を崩した途端、脇腹に短剣の一撃が殺到した。とてもかわしきれない。やむを得ず左手の甲で受けた。激痛が走り、血飛沫が上がる。

「くっ！」

竜也は瞬時に相手を薙ぎ払い、かわされたと見るや跳び下がった。左手から鮮血が流れだし、服を赤く染めていく。

ここで退くわけにはいかない。痛みをこらえながら剣を構えると、アニトラが口を開いた。

「まだやる気？ 本当に死んじやうよ？」

竜也が笑みを浮かべながら答える。

「冗談言つな、最後に立ってるのは俺の方だよ」

「その余裕はどこから来るわけ？」

「さあね」

コルネリオ邸7

アニトラは隠し持っていた金属の棒や短刀、針などを次々と投げつけた。だが竜也にはかすりもしない。段々と彼女の顔から笑みが消えていく。

「し、しぶとい……」

「どうした、当たらないぞ」

アニトラの顔に汗が浮かんできた。左手に傷を負っているとは言え、竜也は超一流の使い手だ。飛び道具がなくなった状態で正面きって戦えば勝ち目はない。

いよいよ、残るは短刀四本だけになった。彼女は左右の手に二本ずつ握り、慎重に敵の隙をうかがう。

「竜也、困るよ。降参するかおとなしく死ぬかどっちかにしてくれない？」

「お前が降参するって手もあるぞ」

「もしそうしたら、あなたは私をどうする気？」

「黙ってラグラスに突き出すだけだよ」

「じゃあ、やだ」

アニトラが右手の一本を放った。続けて左手の一本を放ち、残った二本を時間差で投げつける。竜也がそれらを叩き落とした瞬間、彼女が横を払い抜けた。

「うっ！」

服が破れて血が流れ出した。短剣で左腕をやられたのだ。アニトラは再び間合いを詰め、竜也を真っ向から斬り下ろす。

彼は髪一重でかわし、すかさず体当たりをした。アニトラはまともに喰らってしまい弾き飛ばされていく。

彼女は地面に落ちる瞬間に受け身をとり、素早く起き上がった。再び剣を構えて突進しようとしたが、体がふらついてどうにもならない。あせっているうちに金属音が響き渡った。持っていた短剣が

弾き飛ばされている。

「あつ……」

彼女の目の前に剣が突きつけられた。もう武器は何一つない。竜也が痛みに顔をしかめながら言う。

「俺の勝ちだ。降参しろ」

アニトラは笑みを浮かべている。

「わかった、降参するよ。でもさあ、ラグラスに突き出すのはやめてくれない？」

「馬鹿言え、お前みたいな危険人物を置いておくのなんかごめんだよ」

「お願い、あなたの部下にして。まだ死にたくないの」

竜也が困惑してコルネリオを見ると、彼は渋面を作って言った。

「やはり、上に伝えないのはまずい。捕まえたという報告はさせてもらおう」

他の刺客二人はガルフと衛兵によって倒され、アニトラだけが残った。とりあえず部屋の椅子に縛りつけてある。

ラグラスに使者を送った所「今回の件に関しては一任する」という答が返ってきた。コルネリオがその手紙を見ながらぶつぶつ言う。

「結局丸投げか。たいした上司だ、まったく」

「で、こいつをどうするんだ？」

「お前が捕まえたんだし、好きにしろ」

竜也は眉をひそめながらアニトラを見た。逃がしたら逃がしたでまた襲ってきそうだし、部下にするのも論外だ。

「牢屋につないでおくしかないかな」

コルネリオ邸 8

その途端、アニトラが竜也を見ながら口を開いた。顔には媚びた笑みを浮かべている。

「ねえ、部下にしてよー。何でも言う事聞くからさあー」

全然悪びれた様子がない。竜也は呆れながら、白い布で縛られた左手を突き出した。

「これは誰がやったんだ？ え？」

「私です、ごめんねー。奉仕するから許してー」

「奉仕って？」

「それはもう、いろいろとね。うふ」

「縄を解いた途端に逃げ出す気だろ？」

「ううん、それはないよ。部下にしてくれるならね」

あまりにしつこく頼むので、竜也は根負けして縄を解いた。途端に彼女が立ち上がる。

「嬉しい、ありがとー！」

「あ、ああ」

「よろしくね、竜也！」

アニトラが抱きついてくる。竜也は驚き、口をぱくぱくさせた。その耳元で彼女がささやく。

「いつかまた勝負してね。そのときは確実に殺してあげるから」

「えっ？」

「ふふっ、冗談だよ」

なんだか冗談に聞こえない。竜也は引きつった笑みを浮かべた。

竜也はアニトラをつれて王城へ行き、ラグラスに引き合わせた。

彼はあまり興味がないらしい。報告を受けたものの、どうでもいいという顔をしている。

一方、アニトラはラグラスの部屋の中をうろつくと歩き回って

た。壁にかけてある絵画を眺めたり、隅に飾られている金色の甲冑をさわってみたりして落ち着きがない。

ラグラスが彼女を見て声をかけた。

「お前は誰の命令で動いていたんだ？」

「うちの組織のお頭です！」

「お頭は誰の命令で動いていた？」

「知りません！」

「組織の名と規模は？」

「カールヴィッツです。何人いるかは知りません！」

「それは国営の組織なのか？」

「違います。普段は一般人の依頼を受けて暗殺に励んでました！」

明るくはきはきと答えるアニトラを見て、ラグラスは目をしばたいた。暗殺組織の一員とは思えない。

「お前、なんでそんなに明るいんだ？」

「そうしてないと心がどんどん荒むからです！」

「ふーん。まあ、今後は竜也のために力を尽くしてやってくれ」

「りょーかいました！」

竜也は彼女をつれてマルシアの部屋に行った。中に入った途端、マルシアが目を細めてたずねる。

「誰、その子？」

「紅蓮のアニトラ」

「はあ？　なんでここにいるの？」

「俺の部下になったから」

「冗談でしょ！」

すかさず剣を引き寄せたマルシアを見て、アニトラはにっこりと微笑んだ。

「こんにちは。あなたとは一回戦ってますよね」

紅蓮のアニトラ1

マルシアは首をかしげている。

「え？ 初対面だと思うけど」

「ううん、前に戦ってますよ。ほら、コルネリオ隊がウエルズ隊に勝った後」

「ああっ！」

マルシアは叫ぶなり剣を構えた。

「あのときの……竜也、離れて！」

「やめてくださいよお、今は味方なんですからあ」

「あなたなんか信用できない」

「やだ……竜也、この人怖いよ！。助けてえ」

竜也の背後に隠れたアニトラを見て、マルシアは柳眉を吊り上げた。怒りのあまり血管が切れそうだった。

「何を甘えた声出してるわけ？ 殺し屋のくせに！」

「なんでそんなに怒るの？ あなたに怪我させたわけじゃないし、別にいいでしょー？」

「よくない！」

マルシアは斬りかかろうとしたが、竜也が邪魔でできない。

「どいて！」

「まあ落ち着け。今こいつは丸腰なんだ」

「関係ないよ、そんなの！」

「マルシア、俺の話を聞けよ」

彼女は渋々剣を引いたものの、その怒りは収まらない。

「話って何！」

「アニトラは確かに危険人物だ。でも、味方にしたら心強いのも確かだぞ」

「それで？」

「お前が狙ってる二人も、こいつの力を借りればなんとかなるかも

しれない」

「だから、それ以前に信用できないって……」

そのとき、アニトラが進み出た。さっきまでへらへらしていたが今は真顔だ。

「あなたは、誰かを暗殺したいんですか？」

「暗殺つて言うか……この手で殺したいと思ってるよ」

「喜んで協力します！」

満面に笑みを浮かべているアニトラを見て、マルシアは困惑している。

「あのね、あなたにどうこうできる相手じゃないの」

「え、そんな強い人なんですか？」

「いや、強いとかじゃなくて……」

「誰なんですか？ 教えてください！」

竜也とマルシアは顔を見合わせた。彼女に教えていいものか非常に疑問だ。

「教えてくださいよー、誰にも言いませんからー。約束します！」

あまりにせがむので仕方なく、竜也がそつと耳打ちした。途端に

アニトラが目を見開いて叫ぶ。

「え、ええー！ 国王……」

竜也があわててその口をふさいだ。彼女はもがもがと何か言っている。

「頼むから騒ぐな。わかったか？」

アニトラが何度もうなずく。竜也はそれを見て彼女を解放した。

「とんでもない標的だねえ」

「まあな」

「でも、よかったよ。これで竜也を裏切らなくて済むから」

「へ？」

紅蓮のアニトラ2

竜也がきょとんとしていると、アニトラがにこにこしながら言った。

「本当は、部下になったふりをして刺し殺そうと思ってたんだよね」「マルシアが「やっぱり」と言わんばかりに竜也をにらむ。彼は何も言えず、ひたすら縮こまっている。

「でも、その必要はなくなったよ。あなたたちと私の利害は一致してるから。喜んで協力する」

アニトラが竜也に寄り添っているのを見て、マルシアの眉がまた吊り上がった。

「なんでいちいちくつつくわけ？ 離れてよ！」

「え、好みだから。何か問題でも？」

「彼と私は一心同体なの。あなたなんかが入る隙はないんだから！」「一心同体って、具体的にどういう関係なんですか？ 結婚してるの？ まさか子どもがいるとか？」

「し、してないけど……子どももないよ」

「じゃあ二人を結びつけてるのは、お互いの気持ちだけですよね。知った事じゃないです」

「え、ええ？ それが一番大事なんじゃないの？」

「そんなの、竜也が私に心変わりすればそれですむ話じゃないですか。違います？」

マルシアはショックのあまり、その場で硬直している。反撃したいのだが言葉が出てこない。

やがて彼女は気を取り直し、ゆっくりと噛みしめるように話しました。

「あなたは……他人の男を奪い取って、良心の呵責とかないわけ？」

「リョーシンのカシヤクってなんですか？」

「いや、だから……私に対して悪いとか思わないの？」

「全然」

マルシアはまたもや絶句してしまい、目を見開いたまま立ち尽くした。アニトラがそれを見てにこにこしながら言う。

「女の幸せってなんだと思います？」

「さ、さあ……人によって違うんじゃない？」

「私はこう思ってます。好みの男性を愛する事と、その人に愛される事」

「自分の幸せを追究するのは勝手だけど、そのために他人を踏みこじるのはひどいでしょ？」

「何言ってるんですか、恋愛なんて元々そんな物ですよ。人気のある男性を一人の女性が手に入れたら、他の女性は泣きを見るんです。それは選ばれた人が悪いんじゃないやなくて、他の人の魅力が足りなかったんです。何か間違ってますか？」

マルシアは頭がくらくらして倒れそうになった。なんとか相手を牽制したいのだがどうにもならない。

「と、とにかく……竜也は私にとって大切な人なの。お願いだから奪わないで」

それだけ言うのが精一杯だった。もつとも、そんな言葉などアニトラの心には全く届いていない。

一方、竜也は口を挟む事ができず、二人のやり取りを呆然と眺めていた。

首都攻防戦 1

翌日、マルシアは軍議に出席するために部屋を出た。今回の戦は、隣国アルムハウトの首都レンスブルグに攻め込むという物だ。

一方、竜也はコルネリオ邸を訪れていた。アニトラが一緒に行きたいとせがむのでつれてきている。

部屋に入ると、コルネリオはベッドの上でぐったりしていた。起きる気力もないらしい。竜也は眉をひそめながら声をかけた。

「おい、生きてるか？」

「ああ、竜也……来てくれたのか」

竜也は籠を差し出した。中には果物がぎっしり詰まっている。アストリアの街でかき集めてきた物だ。

「よかつたら食べてくれ」

「ありがとう……こんな大事なときに申し訳ない。ここ数年熱など出した事がなかったんだが、どうも心労が重なったようだ」

「原因の一つはこいつだな」

竜也はアニトラをちらりと見た。彼女は舌を出して笑っている。

「ごめんなさい、えへへ」

コルネリオはそれを見て目を細めた。

「今日は髪の毛が赤いんだな」

「はい、本当は赤いんです」

「そうか。今後は竜也をしつかり補佐してやってくれ」

「お任せください！」

相変わらず、明るくはきはきした物言いだ。コルネリオはその様子を見て笑みを浮かべている。

「元殺し屋とは思えないな。なんでそんなに明るいんだ？」

「そうしないとどんどん気持ち荒んで、人生投げたくなっちゃうからです」

「なるほど。なんで殺し屋になっただ？」

「父も母も名づつての暗殺者で、私は幼い頃からその道で生きる事を余儀なくされました。物心ついた頃には、もう引き返せなくなってます」

「いろんな人生がある物だな」

コルネリオは竜也に視線を移した。その顔から笑みが消えている。「竜也、今回私は戦争に参加できない。だが、お前は行く事になるだろう」

「マルシアが呼ばれてるって事は、そうなるんだろうな」

「先に言っておく。我が軍は総勢十万、レンスブルグの守備軍も十万だ。兵数だけ見れば互角だが、向こうは堅固な城塞都市に籠っている。指揮官や兵の質によほどの差があればともかく、それがなければ……」

「負けて当然だな」

「さすがだな、話が早い」

竜也も真顔でコルネリオを見つめている。そんな戦争に参加したら自分の命が危ない。

「兵力の増強は期待できないのか？」

「無理だ。そんな余裕はない」

「だったら首都の攻略なんかやめればいいのに」

「それも無理だ。国王から直々に命令が出ている。なんとしてもレンスブルグを陥落させろとな」

「ずいぶん無茶を言うもんだな。敵軍の中に内応者はいるのか？」

「残念ながら一人もないよ」

「駄目だ、お話にならない」

首都攻防戦 2

竜也は暗澹とした気分になった。城を陥落させるには守備側の数倍の兵力を必要とする。当然、その数は城の堅牢さや守備兵の精強さによつて上がっていく。

今回攻略するのは一国の首都だ。陥落させるには相当な兵力をつぎ込む必要があると見ていいだろう。

「コルネリオ。あんたがレンスブルグを攻略するとしたら、何万人くらいの兵力がほしい？」

「五十万はほしい所だ」

「やっぱり、十万で落とすのは無理かな？」

「ああ」

竜也は本気で頭を抱えてしまった。コルネリオは軍神と呼ばれており、兵士たちに絶大な影響力を持つ指揮官だ。その彼ですら無理という事は、他の指揮官が何をどうしようがほぼ絶望的である。

ひたすら悩んでいると、コルネリオがおもむろに言った。

「今回マルシア隊は私の指揮下からはずれる。よつて、お前に指示を与えるわけにはいかない。今から私が言う事は友人の助言だと思つてくれ」

「うん」

「今回の戦は間違いなく負ける。わかっているのだがどうにもできない。お前は勝つ事ではなく、生き残る事を第一に考えた方がいいと思つぞ」

「わかつた。肝に銘じておくよ」

竜也はしばらく話をした後、コルネリオ邸を後にした。できれば今回の戦争に参加したくないが、今のままではそうもいかない。

やがてマルシアの部屋に着いた。ベッドに座っているいろいろ思案してみたが、何もいい考えが浮かばない。隣にはアニトラが座り、顔をのぞき込んでいる。

「ねえ」

「ん？」

「今、どんな事を考えてるの？」

「これからどうしようかと思って……でも、全然考えがまとまらないんだよ」

「簡単な事だと思うけど」

「え？」

何が簡単なのか理解できなかった。戦争は不可避であり、敗北は必至と来ている。できれば参加したくないが、今の流れではそうせざるを得ない。

「俺には難しい話だよ。負けるとわかってる戦争に参加して、その中で生き残れなんてな」

「そんな事する必要ないって」

「え、じゃあどうすんだ？」

「私と一緒に逃げよ、ね？」

想定外の答えに頭が真っ白になってしまった。とっさに言葉が出てこない。

しばらくしてから、彼はおもむろに話した。

「お前……俺に、マルシアを置いて逃げろってのか？」

「うん。こうなった以上は仕方ないでしょ？ それとも、あの子と一緒に死にたいわけ？」

「いや、別に死にたいわけじゃ……」

「それなら決まりだね、行こ」

首都攻防戦3

メイド姿の美少女にそう言われ、竜也の心は一瞬揺らいた。しかし、やはりマルシアを置いていくわけにはいかない。

「駄目だよ、アニトラ」

「なんで？ マルシアさんがいるから？」

「うん」

「竜也にとってあの人はどんな存在なの？」

「大切な仲間だよ」

アニトラの顔に笑みが浮かぶ。

「仲間ね。恋人じゃないんだ？」

「あ……ああ」

「じゃあ一緒につれてく？」

「そりや無理だよ。今のあいつにとつちや復讐する事が全てなんだ。そのためには、エルブレイスを離れるわけにいかないのさ」

竜也が動こうとしないのを見て、アニトラはすつと目を細めた。

彼を縛りつけているマルシアに対して怒りの感情が湧いてくる。

「ねえ、なんであの子の仲間になったの？」

「復讐に手を貸すためだよ。あいつは俺に言葉を教えた上で、自分の部下として抜擢してくれたんだ。それがなかったらずっと奴隷のままだった。だから恩に報いよう……」

「ふーん、そうやってマルシアに利用されてるわけだね」

「え？」

思いがけない言葉に体が硬直した。彼女は冷たい目でこちらを見ながらさらに続ける。

「さつき自分が言った事を覚えてる？ 『今のあいつにとつちや復讐する事がすべて』ってさ。あの女にとって、あなたは復讐の道具でしかないんだよ。それをわかってるの？」

「いや、その……」

「あなたみたいなお人良しは、ああいう女にとって絶好の力モだよ。少し恩を売ってあげれば尻尾を振ってついてくる。しかも絶対に裏切らない」

「うっ……」

「竜也にとつて彼女は大切な人かもしれない。でも彼女にとつてあなたは、剣や盾と同じ存在でしかないんだよ。わかる？」

「あいつは俺の事を『大切な人』って言ってたぞ」

「うん、復讐を果たすために必要だからね」

アニトラの言葉の一つ一つが鋭い槍となり、竜也の心に突き刺さる。しかも反論の余地がない。

うつむいている彼に向かつて、彼女の話はさらに続く。

「あの女はあなたを『恩』っていう名前の鎖でがんに縛りつけてるんだよ。そうやって逃げられないようにしてから、いいようにこき使ってるわけ。うまい方法だね。たいしたもんだよ、本当に」

「で……でも、俺は強制されたわけじゃないんだ。あくまでも自分の意志で……」

「何言ってるの、もう。早く目を覚まして。私から見たら、あなたはマルシアの操り人形だよ！」

彼はショックのあまり固まっている。アニトラはその様子を見て、心の中で快哉を叫んだ。これでマルシアから竜也を奪い取れる。

後はとどめを刺せば終わりだ。彼女は相手の瞳をじつとのぞき込みながら微笑した。

「私は、そんなひどい女とは違うよ。心から竜也の事が好きなの。あなたのためならなんでもする。だから一緒に逃げよ、ね？」

首都攻防戦 4

しかし竜也は首を振った。それを見て、アニトラの顔から血の気が引いていく。

「どうして？　なんでそこまであの女にこだわるの？」

「いや、その」

「あ、わかったよ。そういう事だね。あんな美人と毎日……」

「ちよつと待て、俺はあいつに何もしてないぞ！」

「え、じゃあなんで？　全然わからないよ」

竜也は沈黙している。アニトラも無言で座っていると、彼はぼつぼつと話し始めた。

「実を言うと、俺は他の世界から来たんだ。最初は言葉すらわからなかったし、何をどうすればいいのかさっぱりだった。それを優しく導いてくれたのがあいつだ。俺は本当に嬉しかった。感謝してもしきれない」

「だから、それはあなたを利用するために……」

「だとしても、俺はここに残らなきゃならない。お前と一緒に逃げたりしたら恩知らずもいいとこだ」

アニトラは盛大なため息をついた。これはもう手に負えない。

「義理堅いって言うかなんて言うか……お人良しにも程があるよ」

「ありがとう」

「褒めてない。呆れてるんだよ」

そのとき、マルシアが部屋に入ってきた。その表情は暗く沈んでいる。

「お帰り、マルシア」

「ただいま……大変な事になっちゃったよ。十万人でレンスブルグを落とさせてさ」

「ああ、コルネリオから聞いた」

「あの城塞都市を陥落させたいなら、五十万人は必要だよ。十万ぽ

「つちでどうにかなるわけないじゃない」

「あいつも同じ事を言ってたな」

「今回は勝ち目ないね。できる限り被害を出さないように退却するのが一番かな」

そのときマルシアは殺気を感じた。目を向けると、アニトラがこちらをにらみつけている。

「なんなの、怖い顔して。私たちに協力してくれるんじゃないか？」

「二人の関係を聞いて気が変わりました。竜也を操って楽しいですか？」

「自分だけじゃ目的を遂げられないから、彼を利用してらるんですよ？」

「何、その言い方。人聞きの悪い」

「事実じゃないですか、竜也を解放してください！」

敵意をむき出しにしているアニトラを見て、マルシアも目を吊り上げた。両者の間に火花が散る。

「一体なんなの？いきなり出てきて『竜也を解放して』とかさあ。彼と私は、一緒に戦場を渡り歩いた仲なんだよ。あなたなんか出る幕はないの。引っ込んでよ！」

「それは戦友って事ですよ？男女の関係ってわけじゃないですよ？勘違いしないでくれませんか？」

首都攻防戦 5

マルシアは、剣の柄に手をかけたくなるのを必死にこらえた。その顔は怒りでひきつっている。

「これ以上竜也にちよっかいを出そうって言うなら、ただじゃすまさないよ」

「え、女として勝てないからって脅迫ですかあ？ 最低ですねえ」

「他人の男に手を出す女の方が最低でしょ！」

アニトラがにやにや笑いながら言う。

「あなたの事は聞いてますよ、かわいそうなお姫様。国を滅ぼされて独りぼっちになっちゃったんですよね？」

「なっ……」

「復讐するのは勝手ですけど、竜也を巻き込まないでくださいね。わかりました？ みじめなお姫様！」

マルシアの顔から表情が消えたのを見て、竜也はぎょっとした。身も凍るほどの凄まじい殺気が伝わってくる。

このままでは血の雨が降ってしまう。彼は急いでマルシアを取り押さえた。

「落ち着け、頼むから落ち着くんだ！」

「放して！ 許せない……あの女、絶対に許せない！」

彼女は散々わめいた後、ようやく静かになった。アニトラはそれを見てくすくす笑っている。

「以前、王女だったあなたを見た事があります。すごく綺麗で気品もあって憧れました。それがこんな風になっちゃうなんて。人間って簡単に転落するんですね」

マルシアは体を震わせ、はらはらと涙を流している。竜也は彼女を抱き寄せながら言った。

「アニトラ、あんまりいじめるなよ。他人の心の傷をえぐるのはよくないぞ」

「はい、ごめんなさい」

アニトラはぺろりと舌を出した。とても反省しているようには見えない。

「お前、しばらくこの部屋から出てる」

「はい、わかりました」

部屋には竜也とマルシアだけが残った。彼女は肩を震わせながら泣きじゃくっている。

「う……う、ひどいよ。あんな言い方しなくても……」

「そうだな」

「私……竜也を操ろうなんて思っただけ。最初はそうだったかもしれないけど、今は大切な仲間だよ」

「わかってるよ、もう泣くな」

竜也はマルシアを抱きしめ、その泣き声を聞いていた。やっぱりこの子を放つてはおけない。一見強そうだが意外に精神がもろく、隙をつかれると簡単に崩れてしまう。

「竜也、ごめんね。巻き込んでごめんね……」

「いいんだ、気にするな。俺が自分で選んだ道だから」

竜也はマルシアの細い肩を抱き、泣き声が収まるまでその場に立っていた。

首都攻防戦 6

数日後、エルブレイス軍十万が首都アストリアから進発した。

指揮官は師団長アレキス。年齢は二十五で、がっしりした長身の男性だ。黒々とした髪と瞳、茶色の肌をしており、金色に輝く甲冑を身に着けている。

彼の指揮下で、十人の連隊長が一万ずつ兵を率いている。マルシアはその一人だ。大隊長から昇格したのである。

今回の攻撃軍は、全て歩兵で構成されている。城を落とすのに騎兵は必要ない。装備しているのは剣とクロスボウ、鉄の盾に革の鎧。攻城用の兵器として、車輪が付いた巨大な櫓を引いている。

エルブレイス軍は特に抵抗を受ける事もなく、アルムハウトの首都レンスブルグに到着した。アレキスが連隊長を集めて指示を与える。

「まず、城壁の上にいる敵兵に矢を浴びせて沈黙させる。後は城壁を乗り越えるなり城門をこじ開けるなりすればいい。その後、都市内部になだれ込めば勝ったような物だ。では行くぞ！」

マルシアは内心不安で仕方がなかった。そんな簡単にいくとはとても思えない。

「あの、アレキス様」

「なんだ小娘」

「こ、小娘？」

「それで充分だろう。言いたい事があるなら早くしろ」

マルシアはアレキスを観察した。彫りが深く引きしまった顔立ちをしている。外見は決して悪くない。

「一つ疑問なのですが、十万の兵で十万の守備軍を破れるものでしょうか？ 敵が城塞都市に籠っている分、こちらが不利だと思うのですが」

すると、アレキスは鼻で笑った。彼女の言う事など歯牙にもかけ

ない。

「馬鹿だな、貴様は。守備側は十万の兵で都市全体を守らねばならんのだぞ。それに対して我々は、好きな場所に全兵力をつぎ込む事ができるのだ。どちらが勝つかなど明白ではないか」

「そうですか、失礼致しました」

「貴様の隊は後方に下がっている。女が指揮官では心もとないからな」

マルシアはむっとしたが、黙って引き下がった。今はおとなしくしていた方が無難だ。こんな無謀な作戦の矢面に立たされたら、自分の部隊は甚大な被害を受けてしまう。

やがてエルブレイス軍はレンスブルグに向かって前進した。マルシア隊は一番後ろだ。その間、竜也は冷静に攻撃目標を観察していた。

レンスブルグは、街全体が城壁で囲まれた城塞都市である。壁の高さは五階建てのビルに相当する。しかもその前には幅十メートル深さ五メートルほどの堀があり、なみなみと水をたたえているのだ。これでは攻城用の櫓が近づけない。地下に坑道を掘って内部に侵入しようとしても、一歩間違えば堀の水が流れ込んで全滅してしまう。竜也は思わずうなった。

「なんて堅固な城塞都市だ。こりゃきつついな」

首都攻防戦 7

なんとと言っても、攻城用の櫓を使えないのが痛い。外堀の水を抜いて埋め立てる手もあるが、その間に守備兵から好き放題撃たれてしまう。

やがて、竜也がマルシアに話しかけた。

「なんでわざわざ櫓を運んできたんだろうな。意味ないだろ」

「一応持ってきたみたいだけど、役に立ちそうもないね」

「そうになると、やっぱり狙うのはあそこかな」

レンスブルグの外堀には一つだけ石橋が架かり、城門へと続いている。ただ、門にはどっしりとした木製の格子戸があり中に入れない。エルブレイス兵はそこに殺到し、火をつけたり斬りつけたりして突破しようとしていた。

城門の両側には塔があり、その窓から守備兵が次々とクロスボウを発射してくる。こちらにも反撃するが当たらない。

城壁の上にも兵士がずらりと並び、容赦なく矢の雨を降らせてくる。エルブレイス兵は盾で身を守っているものの、全てを防ぐ事はできない。門を突破しようとしている間にどんどん撃たれてしまい倒れていく。

それでも奮闘の甲斐あって、ようやく城門を破壊する事ができた。途端にエルブレイス兵が中へなだれ込む。

竜也はそのとき疑問を持った。アルムハウト軍の指揮官も、木製の格子戸が破壊される事くらい予測できたはずだ。それなのになぜ対策を講じなかったのか。

彼は考えたあげく、傍らにいるマルシアに聞いてみた。

「なんかおかしくないか？」

「何が？」

「レンスブルグの弱点は城門だけなんだ。なのに、どうして補強するなり橋を壊すなりしなかったんだろう？」

「さあねえ、そこまで気が回らなかつたんじゃない？」

「そんな事があり得るのかなあ」

とにかく、友軍が城門を突破したのは事実だ。マルシア隊も遅れさせながら都市に侵入した。指揮官のアレキスは軍勢の先頭付近におり、その姿は見えない。

竜也はレンスブルグの街に入り周囲を見回した。城門から街の中央に向かって目抜き通りが走り、両側には煉瓦でできた建物が整然と並んでいる。どれも三階建てだ。一階には窓が一つもなく、出入口はしっかりと閉ざされている。二階から上には窓があるが、人が入り込めるような大きさではない。

竜也が気になったのは、それらの建物の屋上が橋でつながっている事だった。つまりこの街が戦場になったとき、守備兵が自由に行き来できるのだ。高い位置から侵入者を射撃すれば戦闘を有利に運ぶ事ができる。攻撃側にとっては脅威だ。

エルブレイス軍はどんどん進んでいくが、アルムハウト軍の抵抗はほとんどない。竜也はだんだん不安になってきた。

「マルシア、やっぱりおかしくないか？」

首都攻防戦 8

マルシアが周囲を見回しながらうなずく。

「そうだね、十万人も守備兵がいるのにこれはおかしいよ」

「普通だったら激烈に抵抗してくるよな」

そのときアニトラが口を開いた。彼女も今回戦争に参加しており、ずっと竜也にくっついていてる。

「畏だよ、これ。早く逃げた方がいいって」

「勝手に退却するわけにはいかないだろ」

「えー、死んだら元も子もないでしょ」

マルシアがその様子を見て、眉をひそめながら言う。

「だったら一人で逃げれば？ 別に止めないから」

「何をそんなに怒ってるんですか？」

「あんまりベタベタするのやめてほしいんだけど。ここが戦場だつてわかってる？」

「あー、嫉妬してるんですね」

「そんなんじゃないし！」

険悪な雰囲気になってきたので、竜也があわててマルシアをなだめた。敵と戦う前に仲間割れしては目も当てられない。

「落ち着けて、連隊長がそんなんじゃ部下がついてこないぞ」

「だってその子が……」

「アニトラも少し離れてる。そんなにくっつかれちゃ、いざというとき動けない」

「えー」

アニトラがぶつぶつ言いながらも離れたのを見て、竜也はほっとした。普段はともかく、戦場でまとまりつかれてはたまらない。

やがて、エルブレイス軍の進撃が止まった。目抜き通りが味方の兵士で埋まってしまい、全く身動きができない。

竜也はマルシアに話しかけた。

「何かあつたみたいだな」

「そうだね、なんだろ？」

前方の友軍が進めなくなった理由は、通りが封鎖されていたからだ。土嚢が山のように積み重ねられているのである。先に進むにはこれを通り越えるか、周囲の細い路地に入っていくしかない。

指揮官アレキスはそのままだ前進しよう命じた。封鎖するという事は、この先に進んでほしくないという事である。

兵士たちが土嚢をよじ登ろうとしたそのとき、異変が起こった。周囲の建物の屋上に無数の敵兵が現れ、一斉にクロスボウを発射したのだ。

エルブレイス軍は一瞬にして大混乱に陥った。味方が邪魔で身動きが取れない。これでは射撃の的になるだけである。アレキスはその様子を見ながら、剣を振り上げて叫んだ。

「ひるむな、土嚢を乗り越えて前進するのだ！」

ところが、それもできなくなった。土嚢の上にも敵兵が現れ一斉に射かけてきたのである。

「おのれっ！」

アレキスは土嚢をよじ登り、敵兵の一人を叩き斬った。斬られた兵士は血飛沫を上げて転がり落ちていく。

「恐れるな、俺に続け！」

首都攻防戦 9

アレキスはエルブレイスきつての勇猛な指揮官だ。しかし、今回はそれが裏目に出た。懸命に前進しようとするればするほど被害が拡大していく。

なんとか土囊を乗り越えようとするのだが、敵兵が次から次へと湧いてくる。それもそのはずで、アルムハウト軍は十万人のほぼ全てをこの周辺に集結させていたのだ。

建物の屋上に兵士がずらりと並び、間断なく矢を浴びせてくる。それはエルブレイス軍にとって脅威だった。向こうの攻撃はほとんどが当たるのに、こちらの反撃はまるで当たらない。胸壁と呼ばれる凹凸の防壁が、守備兵を矢から守っているのである。

やがてアルムハウト兵が土囊を乗り越えて突撃してきた。エルブレイス兵も死力を尽くして戦っているものの、戦力差はいかんともしがたい。こちらは先頭にいる兵力だけで戦っており、その数は一万にも満たないのだ。

アレキスは目を吊り上げ、髪を振り乱しながら敵兵を斬りまくった。退却するつもりなど毛頭ない。敵の首都まで迫っておきながら引き下がるなど、彼にとつては理解しがたい愚行だ。

「ひるむな、ここが踏ん張り所だ！ この都市を落とせばアルムハウトは滅びる！」

しかし、奮戦すればするほど周りの部下が倒れていく。後方の味方も前進してきてはいるのだが、凄まじい矢の雨を浴びてどうする事もできない。

アレキスは一旦引き下がるべきだった。ここはアルムハウト軍の独壇場で、いくら反撃しても被害が増えるだけなのだ。しかし、すっかり血が上った彼にそんな判断はできなかつた。

周囲には射殺された兵士たちが転がっている。そのほとんどがエルブレイス兵だ。アレキスはわずかな手勢に守られていたが、彼ら

も降り注ぐ矢に当たって倒されてしまった。

抜刀したアルムハウト兵たちがアレキスを取り囲む。やがて彼らは一斉に斬りかかった。

並の男ならここで命を落としていただろう。しかし、アレキスは正面の敵兵を突き倒し包囲を抜けていた。途端に兵士たちが口々に叫ぶ。

「くそ、しぶとい奴め！」

「そいつが指揮官だ、絶対に逃がすな！」

「仕留めれば一番手柄だぞ！」

倒しても倒しても敵は群がってくる。アレキスは肩で息をしながら戦い続けた。既に考える力もない。今にも倒れそうになっているところに、ようやく味方が現れた。マルシアの連隊一万人である。

マルシアは彼を後方に下げようとしたが、この期に及んで言う事を聞かない。

「退却などありえん、もつての他だ！」

首都攻防戦 10

そのとき、竜也が進み出てアレキスを怒鳴りつけた。

「馬鹿野郎、周りを見る！」

アレキスも竜也をにらんで怒鳴りつける。

「なんだ貴様は！ それが上官に対する態度か！」

「腹を立ててる暇があるなら、自分が置かれてる状況をよく見ろ。何人の部下を殺せば気がすむんだ！」

アレキスは周囲を見回した。まさに死屍累々、屍山血河である。倒れているのは味方ばかりだ。

竜也が群がる敵兵を薙ぎ倒しながら言う。

「あんたがいくらここでがんばっても、味方を苦しめるだけなんだよ。わかつたらさっさと退け！」

怒りで震えているアレキスを、マルシアがなだめて引き下がっていく。竜也はそれを見て叫んだ。

「全員退け！ ここは俺が食い止める！」

アニトラがあわてて近づいてきた。一人で戦うなど正気の沙汰とは思えない。

「竜也、無茶言わないで。私も残るよ」

「いいから下がってくれ。そうしないと、心配で思いきり戦えないから」

ガルフも近づいてきて言う。

「俺も残る。お前を一人になどできん」

「あんたも下がってくれ。マルシアとアニトラを頼む」

ブラッドも寄ってきたが、竜也は全員を説得して退却させた。残ったのは自分だけだ。目の前には、革の鎧を着込んで曲刀を握ったアルムハウト兵がずらりと並んでいる。

「さて、俺の本気を見せてやるか」

彼は剣をびたりと構え、周囲の敵兵たちを睨み据えた。恐怖など

という感情はとうに捨て去っている。

アルムハウト兵は一斉に斬りかかった。相手はたった一人、しかも少年だ。大の男が集団で戦って負けるはずがない。ところが次の瞬間、地に伏していたのは彼らの方だった。

竜也が血に塗れた剣を振りかざして叫ぶ。

「死にたい奴はかかってこい、残らずあの世へ送ってやる！」

激昂した敵が次々と斬りかかる。竜也はすれ違い様に一人の顔を叩き斬り、身を翻してもう一人の首を薙ぎ払い、さらに疾走してもう一人を突き倒した。その凄まじい戦いぶりに、周囲から驚きの声がかかる。

「な……なんだこいつは！」

「本当に人間か？」

「何かの化身じゃないだろうな？」

竜也はそれを聞き、相手の恐怖心を利用しようと思いついた。皆がすくんでいる今が絶好のチャンスだ。彼は周囲を見回しながら言った。

「俺は轟竜也、天がこの地に遣わした剣神だ。倒せるものなら倒してみろ！」

兵士たちは瞠目し、顔を見合わせた。普通なら一笑に付する所だが、彼の剣技はまさに神業である。本当かもしれないという思いが皆の心に浮かんだ。

首都攻防戦 11

竜也は敵兵をにらみつけながら呼吸を調べていた。自分を神などと言ったのははったりにすぎない。体力が尽きたり強烈な斬撃を喰らえばそれまでだ。

彼が油断なく剣を構えていると、敵兵の中から一人の男が進み出した。

歳は二十歳前後に見える。長い金髪に碧い瞳、白い肌。整った顔立ちに引きしまった体をしている。革の鎧以外に防具は着けていない。武器は左右二本の突剣だ。

彼は、竜也に左の剣を突き付けて言った。

「剣神だと？ 笑わせてくれる。妄想も大概にしる」

「妄想だと思うなら試してみたらどうだ？」

男は不敵に笑っている。

「おもしろい、いいだろう。俺の名はジェラルル。アルムハウト軍の指揮官だ。その心に刻んでおけ」

竜也がうなずくと、男は周囲の兵士たちに向かって叫んだ。

「お前たちはエルブレイス軍を追撃しろ。絶対に逃がすな！ 俺は先にこいつを片付ける！」

アルムハウト兵が次々と駆け出していく。竜也はそれを見送りながら、ジェラルルに向かって剣を構えた。

「お前がエルブレイス軍を陥れた張本人か」

「そうだよ、見事にはまってくれたもんだな。この城塞都市は敵を封殺できるように造られているんだ。貴様らはそれを知らずにこのこ踏み込んできたというわけさ」

「なるほどね」

「安心しろ、大勢でなぶり殺しにするつもりはない。あくまでも一対一で戦ってやる。それで俺が勝てば、貴様が剣神どころか弱くちっぽけなただの人間だという事が証明できるだろう」

「そうか、わざわざありがたいこった。一対一で俺が負ける事はまずないよ」

「その自信がいつまでもつか見物だな。行くぞ！」

ジェラルルが地を蹴った。二本の突剣が幾筋もの閃光となって襲いかかる。竜也は後退しながらそれをさばいた。金属音が連続で響く。

「どうした、手も足も出ないのか！ その程度でよく剣神などと言ったものだな！」

竜也は答えなかった。勝手に言わせておけばいい。隙を見て一撃を叩き込めば形勢は逆転する。

しかし、ジェラルルの突きは激しさを増すばかりで一向に衰えず隙もない。だんだんと額に汗がにじんでくる。

「ははは、どうした剣神！ 嘘をついた事を認めるか？」

それを聞いて竜也は笑みを浮かべた。

「嫌だね。それより、今からお前にすごい物を見せてやるよ」

首都攻防戦 12

ジエラールが笑いながら言う。

「壮絶な自殺でもしてくれるのか？ ヤケになるなよ」

「んなわけないだろ、その目によく焼き付けておきな」

「はったりか、くだらん！」

ジエラールが踏み込み、凄まじい速度で突きを放つ。竜也は横に移動したものの、左肩に一撃を受けてしまった。剣は刺さったままだ。

「ハッハー、終わったな！」

ジエラールがもう片方の剣を握りしめ、胸を目がけて突きかかった。相手にかわす暇も与えない。これが決まれば終わりだ。

「死ね！」

その剣が殺到したその瞬間、金属音が響いた。竜也が弾き飛ばしたのである。

「なっ……」

彼はあわててもう片方の剣を引き抜こうとしたが、既に手遅れだった。竜也ががっちりとかんでしまっている。両刃や片刃の剣ならつかめなかつたはずだが、刃のない突剣だったのが災いしたのだ。

「き、貴様……」

「突きを喰らったのはわざとだ。二本の動きは見切れなくても、片方だけならどうにかなるからな」

竜也は相手に剣を突きつけ、自分に刺さった剣を引き抜いて投げ捨てた。肩から血が流れ出し、激痛が体を走る。

「貴様の勝ちだ」

ジエラールはがっくりと膝を付いた。その表情は穏やかで、取り乱す様子もない。

「さつさと斬れ。俺の死にはちゃんと意義がある」

「へえ」

「嘘ではないぞ。周りを見る」

見回すと、アルムハウト兵に取り囲まれていた。これではジェラルを斬った途端にやられてしまう。

「なるほど、自分の命と引き換えに俺を倒すつもりか」

「そうだ。真剣勝負に負けた以上、死ぬのは仕方がない。でも、ただで死ぬつもりはないのさ。アルムハウトのために、轟竜也という稀代の剣士を討ち取っておきたいんだよ」

竜也の顔に笑みが浮かぶ。

「やっぱり剣神としては認めてくれなかったか。まあ、口から出まかせなんだけどな」

ジェラルも微笑している。

「当たり前だ、誰がそんな話を信じるか。でも、これだけは言える。貴様は、俺が今まで会った中で最高の戦士だ」

竜也はジェラルの顔をじつと見つめた。卓越した剣の腕、死を前にして笑っているほどの度胸。この男も間違いなく一流の戦士だ。殺すには惜しい。

そもそも、彼を斬る事になんの意味があるだろう。そうした所で自分も斬られて死ぬだけだ。

首都攻防戦 13

ここから脱出しようと思うのなら、普通はジェラルルを人質にして逃げるのが妥当だ。ところが、それは通用しない。仮に実行したなら、この勇猛な指揮官は間違いなくこう言うだろう。

「俺に構わずこいつを斬れ！」

つまり、ジェラルルを殺そうが人質にしようが助からない。放置して逃げれば尚更である。彼は再び剣をとり、背後から襲いかかるに違いない。

竜也は考え込んだ。こんな所で死にたくない。しかし、自力で脱出する手段は皆無ときている。

そこで彼は、目の前に座っているジェラルルに話しかけた。

「俺はこんな所で死にたくない。あんたはどうだ？」

「そりゃあ俺だって死にたくないさ。でも、貴様の剣が首筋に突きつけられている以上どうにもできん」

「剣を引いても構わない。大体、あんたを殺した所で俺にとってなんの利益もないんだ」

「馬鹿を言うな、俺はアルムハウトの指揮官だぞ。充分利益になるだろうが」

「それがならないんだよ。俺は将来、エルブレイスに反旗を翻すつもりなんだな」

「なんだと？」

ジェラルルは目を見張った。彼にとっては想定外の言葉である。

「貴様、自分が助かりたいがために出まかせを言っているのではないか？ さつきも自分の事を剣神などとほざいていたしな」

「あれは敵を弱体化するための戦術だ。でも今回は違う。紛れもない俺の本心だよ」

周囲の兵士たちがざわついた。本当に反乱を起こすつもりなら、なぜエルブレイス軍に従っているのが不明だ。

ジェラールは目を細めてこちらを見据えている。竜也の言う事などかけらも信じていない。

「馬鹿馬鹿しい。本当にそう思っているなら、なぜ体を張ってまで自軍の指揮官を逃がしたんだ。言っている事とやっている事が矛盾しているじゃないか」

「複雑な事情があるんだよ」

「それについて説明しろ。でなければ到底信用できない」

「わかった。耳を貸せ」

竜也はジェラールの耳元で全てを打ち明けた。自分がマルシアの腹心である事。彼女がエルブレイス王の命を狙っている事。また、今の彼女の身分では国王に近づけない事。

最後まで聞き終わったとき、ジェラールは呆気に取られていた。

「な……なんだ？ お前もその女も正気か？」

「ああ。俺は最初、やめた方がいいと思ってたんだ。でも、だんだんと考えが変わってきた。今の国王は強引に政権を奪い取り、周囲の国へ侵略行為を繰り返してる。そんなのはた迷惑な奴はいつか叩き潰さなきゃならない」

「つまり貴様はマルシアを昇進させるために戦い、マルシアは国王に近づいて殺害するために昇進していると？」

「そうだよ」

首都攻防戦 14

ジェラールは竜也を見ながら苦笑した。

「随分と回りくどい方法をとるものだ。貴様ほどの実力があるならそんな事をせず、反対勢力を率いてさっさと立ち上がればいいものを」

「まあそういう手もあるけど、今の所は俺に従ってくれる反対勢力もないんでね。そこでだ」

竜也は真顔でジェラールを見つめた。これから言う事が受け入れられるかどうかで、自分の運命が決まる。

「あんたはエルブレイスを憎んでいるよな？」

「当たり前な事を聞くな」

「それなら、俺をここから帰してくれないか。いずれマルシアと一緒にエルブレイスをひっくり返さなきゃならないんだ。無理を承知で頼む」

「待て。自分が助かるために嘘をついているだけという可能性もあるだろう。真実だという保証がどこにある？」

「保証なんかない。でも俺が言った事は本当だ」

「仮に真実だとしても、俺に教えていいのか？」

「あんたがそれをエルブレイスに知らせるメリットは何もないだろう。もし仮に造反がばれてマルシアが危機に陥ったら、俺は体を張って彼女を逃がすつもりだ」

ジェラールは無言で竜也を見つめている。信じていいものか判じかねているのだ。

「ジェラール、俺にも戦士としての誇りがある。それに恥じるような真似はしない。戦術の一環として嘘をつく事はあっても、信義にもとるような事をするつもりはないよ」

「そうか………わかった。戦士としての貴様を信じよう」

「感謝するよ」

ジェラールは部下達を見回して叫んだ。

「お前たち、包囲を解け。彼はエルブレイスに謀反を企てているぞうだ。それならここで殺しても意味はない」

アルムハウト兵たちが渋々引き下がったのを見て、竜也も剣を引いた。その顔に笑みが浮かんでいる。

「ありがとう、ジェラール。この借りはエルブレイスを潰す事で返すよ」

「気にするな。どの道、お前一人を殺してもこのままではエルブレイスに勝てないんだ。それなら一つの可能性に賭けてみようと思っただのさ」

ジェラールは立ち上がり、竜也の肩を叩いた。彼の顔にも笑みが浮かんでいる。

「お前がエルブレイスに反旗を翻したら、俺も兵を率いて参戦する。まあ、その余裕があればの話だがな」

「期待してるよ」

「こっちのセリフだ」

首都攻防戦 15

竜也はジェラールと別れ、その場を後にした。

さっさと帰りたいが、目抜き通りはアルムハウト兵で満ちている。しかも、その先では未だに戦闘が続いているようだ。

左肩の出血はまだ止まらない。こんな状態で戦闘に巻き込まれたら危険だ。仕方なく、目抜き通りを避けて細い路地に入ってしまった。戦闘が終わるまで身を隠し、静かになってからこっそり帰ればいい。

「いつてえ……」

出血はいよいよひどくなり、左半身が真っ赤に染まっている。早く手当てしないと失血死するかもしれない。

彼は絶望的な気分になりながら石畳の路地を歩き続けた。周囲には煉瓦でできた三階建ての住宅があるだけで、人の姿は見えない。例え誰かがいたとしても、自分の街へ攻め込んできた敵兵を助けようとはしないだろう。

竜也は自分の服を脱ぎ、それで傷口を縛ろうとした。だがうまくいかない。早く止血しなければならぬのに気持ちはあせるばかりだ。

「くそつ、駄目か」

彼は道の端に座り込んだ。ジェラールに勝ったのはいいが、その代償は高くついたようである。

「畜生、冗談じゃないぞ！ こんな所で死ぬのか！」

彼の叫び声を聞きつけ、近くの建物の窓から一人の女性が顔を出した。金色のショートヘアに白い肌、緑色の瞳。すっきりとした目鼻立ちにしなやかな手足をしており、緑色のチュニックを身に着けている。

彼女は急いで外に出て竜也に声をかけた。

「竜也さん！」

「ん、え……誰だっけ？」

「セレスティアです！ アストリアの街であなたに助けてもらった……」

「ああ、思い出した。よかった、逃げられたんだな」

「その節はありがとうございました」

「いいよ、気にしないで」

「その怪我は……」

「ちょっとやらかしたんだよ」

自虐的な笑みを浮かべる竜也を見て、セレスティアはその体をつかんだ。

「手当てします、私の家に来てください。立てますか？」

「え、いいのか？ 俺は敵国の人間だぞ」

「あなたも、敵国の人間である私を助けてくれたではありませんか。それを忘れるほど恩知らずではありません」

「そうか……ありがとう」

彼女は竜也をつれて家に入った。風呂場で血を洗い流し、傷口に薬を塗り、白い布で傷口を縛って止血する。さらに、血で汚れた服を着替えさせた。

服が短かすぎるのを見て竜也が苦笑する。

「サイズが合わないな、これ」

「ごめんなさい。弟の服なんですけど、ちょうどいいのがなくて」

首都攻防戦 16

セレスティアは竜也を寝室へつれていき、ベッドに寝かせた。部屋は十畳くらいの広さで、ベッド、テーブルと椅子、燭台の他には何も無い。

「外に出るのは危険ですし、少しお休みになってください」

「ありがとうございます」

彼女は、竜也が寝ているベッドの前に椅子を置いて座っている。

「セレスティア、俺はエルブレイス軍の一員としてこの街に攻め込んだ。でも、それは本意じゃないんだ」

「ではどうしてここに？」

「事情があつて、そうせざるを得なかった」

「そうですか。あなたは素晴らしい方ですし、きつとおっしゃる通りなんでしょうね」

「素晴らしい……のかな？」

「はい」

それは竜也にとって意外な言葉だった。

今まで、敵対する者を容赦なく叩き斬ってきたのだ。もちろん人を殺すのは不本意だし、相手の苦しみを考えると心が痛む。でも、多くの人命を奪ったという事実が変わりはない。

そんな事をした人間を素晴らしいなどと言えるだろうか。

「俺は、むしろひどい奴だよ」

「いいえ。あなたは縁もゆかりもない私たちを助けるために、命賭けで戦ってくださいました。しかも、なんの見返りも求めずに……あなたほどの人格者に、私は今まで会った事がありません」

竜也は苦笑した。助けた人間から見ればそうなのだろう。しかし、戦争中に斬った敵兵やその家族から見れば、自分は殺しても飽き足らない存在に違いない。

「それから竜也さん、私にはあなたが特別な人間に見えます。何か

使命を持って生まれてきて、将来それを成し遂げる人だと……」

「え？」

前にも増して意外な言葉だった。自分はこの世界に落ちてきて以来、周囲に流されっぱなしだ。仮に使命などと言う物があつたとしても、それがなんなのか見当もつかない。

「へえ。なんでそう思うんだ？」

「人間離れた強さをお持ちですし、英雄の風格もあります。あなたはひよつとすると、一つの国の運命を変えてしまうほどの人物ではないかと」

思わずぎよつとした。自分がエルブレイスをひっくり返そうとしているのは事実だ。

「セレスティアは、俺の心が読めるのか？」

「まさか、そんな事はありません」

「てつきり読まれたのかと思つた」

「え、では本当に？」

彼女は目を輝かせている。

「竜也さんは、今回の戦争に参加したのは不本意だとおっしゃいましたよね。実はエルブレイスに不満をお持ちなのではないですか？」

首都攻防戦 17

竜也は無言でうなずいた。現国王は先代から力づくで政権を奪い取り、四方八方へ侵略行為を繰り返しているのだ。

その結果としてガルフやマルシアは帰る場所を失い、セレスティアたちはアストリアの街で人身売買されたのである。

これはもう百害あって一理なしだ。

「不満を持つてる事は確かだよ」

「竜也さんはエルブレイス人ですか？」

「いや」

「では、愛国心をお持ちですか？」

「全然」

セレスティアが彼の手を握りしめて言う。

「お願いです、竜也さん。エルブレイスを止めていただけませんか？ あなたならきっとできると思うのです」

「元からそのつもりだよ」

「本当ですか！」

彼女は顔を輝かせ、熱い眼差しで見つめてくる。竜也は思わず苦笑した。

「でも、あまり期待しないでくれよ。俺一人がどうがんばった所で百人の兵士には及ばないんだ。それこそ、一つの国を相手にして勝てる保証なんかない」

「あなたなら成し遂げられます」

「うーん」

竜也は首を傾げた。戦闘能力で自分に及ぶ人間はまずいない。だが、単に強いだけではどうにもならないのだ。

「俺には求心力が足りないからなあ」

「求心力？」

「うん、人をひきつけて動かす力がね」

「でしたら、そういった面で優れた人間を探せばよいのです。あなたの方が補佐すれば完璧でしょう」

「なるほどねえ」

竜也は考え込んだ。マルシアは強い上に頭も切れるが、カリスマ性が乏しい。コルネリオはカリスマ性にかけては文句なしだが、生粋のエルブレイス人であるし反逆するとも思えない。

「身近に適当な奴がないなあ」

「とにかく探す事ですよ、がんばってください。心から応援します」

竜也は戦争が終結したのを見計らい、こっそりとレンスブルグを後にした。アルムハウト兵たちが歓声を上げている所を見ると、予想通りエルブレイスは敗北したらしい。

アストリアに向かって帰る途中、友軍に追いついた。斬られて傷を負っている者、肩に矢が刺さっている者、足を引きずっている者などが見える。当初十万いた兵は四万弱にまで減らされ惨憺たる有様だ。

竜也が軍勢の前の方へ歩いていくと、マルシアに声をかけられた。

「竜也！」

「おお、生きてたか！ よかった……本当によかった」

竜也の変節 1

竜也とマルシアは手を取り合って喜んだ。ガルフやブラッドも寄ってきて声をかけてくる。

アレキスを見ると、彼は肩を落としながら馬の背中に揺られている。以前のような威勢の良さはどこにも見えない。

今回の戦争は完敗だったが、竜也にとってはむしろありがたかった。エルブレイスが連勝して国力が強化されてしまうのも困るのだ。適当に負けてくれた方がいい。

エルブレイス軍は首都アストリアにたどり着き、竜也とマルシアはラグラスの部屋に呼ばれた。マルシアの顔がこわばっている。これだけの惨敗を喫した以上、叱責されてもおかしくない。

ラグラスは二人を椅子に座らせ、自分も座ってから口を開いた。「お前たち、よくやってくれた。特に竜也。一人でしんがりを務めて全軍を退かせた事に敬意を表する」

マルシアが胸をなで下ろしながら言う。

「ありがとうございます。私はてつきり怒られるものとはばかり……」
「敗戦の責任は指揮官のアレキスにある。お前たちにはなんの落ち度もない。むしろ、苦境の中で指揮官を守りきった事は評価されていいと思う。ただ一つ、あえて言うなら……」

ラグラスは竜也を見つめて言った。

「お前の態度は、上官に対する物ではなかったな。それだけだ」

竜也は口を尖らせている。

「アレキスがあんなに馬鹿じゃなけりゃ、俺だってそんな態度をとらなかつたさ。仕方ないだろ」

「そういう問題ではない。兵卒が上官に対して平然と無礼を働くようでは、全体の統制ができなくなる。他の兵士たちまでが指揮官を軽んじ、お前のような態度をとりだしたらどうするつもりだ？」

「まあ、それは確かに……」

「だろう？ お前が俺に敬語を使わない事くらいは大目に見るが、アレキスに暴言を吐いた事までは看過できんぞ」

「わかった。俺が悪かったよ」

「わかればいい。今後ともエルブレイスのために尽くしてくれ」

「その事だけど、話がある」

途端にラグラスは眉をひそめた。軍から抜きたいなどと言い出されたら、エルブレイスにとって多大な損失だ。

「内容を言え」

「軍隊をやめさせてもらいたいんだ」

ラグラスは大きなため息をついた。一方、マルシアは驚きのあまり開いた口がふさがらない。

「おっさん、俺を捕まえたときに殺さなかった事については感謝してる。でも、その恩は充分返しただろう」

「確かに、十六歳とは思えないほど奮戦してくれたな。コルネリオが軍神と呼ばれるほどになったのも、お前の力が大きかったのだから」

「じゃあ、そういう事で。今までありがとう」

竜也は席を立ち、部屋から出て廊下を歩き始めた。マルシアが大慌てで後をついてくる。

「竜也、待って！ どういう事？ 説明してよ！」

竜也の変節2

竜也はマルシアと一緒に彼女の部屋に入り、扉を閉めてから小声で言った。

「お前はここに残って時期を待つんだ。俺はその間に、反乱軍の首領になれそうな人間を探す」

「えっ！ 反乱？」

「しっ、声がでかい。俺がそいつと共に兵を挙げるまで、お前はラグラスの忠実な部下として仕える」

「そのときになったら、内部からこの国を切り崩せばいいのね？」

「さすがに話が早いな。その通りだ。だから、お前はラグラスの前でこう言っておけ。『竜也があんな身勝手な人間とは思いませんでした。もう仲間とは思いません』ってな」

「わかった。盛大に罵倒しておくよ」

「よろしくな。あと、ガルフとブラッドはここに残していくよ。きつと役に立ってくれるはずだ」

マルシアが強くうなづく。

「わかったよ。また会える日を楽しみにしてるからね」

「俺もだ。じゃあ、また会おう」

竜也は部屋を出て兵舎へ向かい、ガルフとブラッドに事情を説明した。アニトラにも会って話をした所、絶対ついていくと聞いて聞かない。仕方がないので彼女だけつれていく事にした。

次に向かったのがコルネリオ邸だ。気が重かった。マルシアやガルフたちとはかく、コルネリオは完全に敵に回ってしまう。大貴族であり、この国に家族がいる彼が寝返るとはとても思えない。

面会を求めると、従者が部屋へ案内してくれた。彼はまだ病床にあるらしい。

果たしてコルネリオはベッドで寝ていた。しかし竜也の顔を見るなり笑みを浮かべ、上体を起こそうとしている。

「おいおい、無理すんな！ 寝てていいよ！」

「いや、大分楽になったんだ。心配しないでくれ」

竜也は仕方なく、彼が起きるのを手伝った。

「すまないな」

「いや、いいんだけどさ……それより、お別れを言いに来た」

「なんだって？」

「俺は軍隊から抜けた。アストリアからも離れるつもりだ。あんたと会えなくなるのは寂しいけど……」

竜也は声を詰まらせた。単に別れるだけなら、また会えばいい話だ。しかし、今後は敵同士になるのである。再会するとしたらそこは戦場だ。

「竜也、そう悲しむな。別れるのは辛いけど、生きていればまた会えるじゃないか」

「コルネリオ、一つ聞かせてくれ」

「ん？」

「この国で大規模な反乱が起こったら、あんたはどうする？」

彼は目をしばたいたっている。

「鎮庄に向かうよ。わかりきった事じゃないか」

「だよな」

竜也が沈黙したのを見てコルネリオは目を見張った。その顔から血の気が引いている。

「まさか、お前……」

コルネリオは全身を震わせた。無二の戦友が突然変節するなど悪夢としか思えない。

「なぜだ、なぜなんだ！ 理由を教えてくれ！」

竜也の変節3

竜也は、コルネリオの顔をじつと見つめながら言った。

「俺は元々、エルブレイスに忠誠心なんかないんだ」

コルネリオの顔が蒼白になっていく。

「どういう事だ？ それじゃ、なぜ今までエルブレイスに従っていた？」

「俺は初めてこの国に来たとき、アイリーンと出会って一緒に旅をしていた。そこをラグラスたちに襲われて、俺だけ捕虜になったんだ。その後に奴隷同然の扱いをされていた所を、マルシアに見込まれてその部下になった。俺は今までエルブレイスのために戦ってたんじゃないくて、マルシアに恩を返すために戦ってたんだよ」

コルネリオは納得がいかないようで、しきりに首を傾げている。

「それなら、今まで通りマルシアのために戦えばいいだろう。どうしてエルブレイスを抜けるんだ？」

「エルブレイスが悪虐非道の最低な国だからだよ」

「待て、よく考えてみる。お前が反旗を翻したら、いずれマルシアと戦う事になるぞ。恩人に対して剣を向けるつもりか？」

竜也は苦笑した。コルネリオは、マルシアも謀反しようとしている事を知らない。自分と彼女の目的は今までと変わらず一致しているのだ。

「それを言うなら、あなたに対してもそうだ。エルブレイスと戦う以上、いずれ軍神コルネリオとぶつかる羽目になる。俺はなんとかそれを避けたい」

「そうか、しかし……」

コルネリオは嘆息した。彼の名は今や国の内外に轟いており、兵士たちにも絶大な人気がある。竜也が奮戦してエルブレイスを追い詰めれば、嫌でも迎撃させられる事になるだろう。

「竜也、それは無理だ。私は凡庸であるにも関わらず、稀代の名将

という評価を受けてしまっている。エルブレイスが危機に陥った際には必ず担ぎ出されるはずだ」

「……無理を承知で頼むけど、こっちについてくれないか？」

コルネリオは沈黙した。自分としても、竜也と戦いたくはない。一緒に修羅場をくぐり抜けてきた仲間であるし、戦闘能力が高い上に頭も切れる。

彼はしばらく黙り込んだ後、おもむろに言った。

「それはできない。私にも立場という物がある。お前こそ、考え直す気はないのか？」

「ないよ」

「残念だ」

彼はまっすぐに竜也を見つめた。

「これから俺が言う事は、エルブレイス軍の連隊長としてではない。あくまでコルネリオ個人としての意見だ。それを承知で聞いてくれ」

竜也の変節4

竜也は強くうなずいた。コルネリオがさらに続ける。

「まず心に刻んでおいてほしいのが、反乱は重罪だという事だ。貴族だろうがなんだろうが反逆者は死刑にされる。つまり失敗すれば間違いなく命はない」

竜也が無言でうなずく。それは覚悟の上だ。

「もう一つ。仮に成功して政権を奪い取ったとしても、その後国家を運営していく事ができなければなんの意味もない。むしろ外国の侵略を招いて国が滅びるだけだ。やるなら相応の人材と人数を集める。私が言いたいのはこれだけだ」

竜也はコルネリオに深く感謝した。彼はこれから敵になる人物に、わざわざ忠告してくれたのである。

「ありがとう。またあんと一緒に戦いたかったけど、無理な話だな」

「こちらこそ、今まで本当に世話になった。お前には感謝してもしきれない。元気だな」

「ああ。あんたも体に気をつけてくれよ。じゃあな」

竜也はコルネリオ邸を去り、首都アストリアの目抜き通りを進んでいった。アニトラが腕を組んで一緒に歩いている。

年齢は十七。赤いツインテールに白い肌、ぱっちりした目に整った輪郭、すらりと長い手足。瞳が赤く、胸が大きい。

彼女は黒いメイド服を着ており、腰に二本の短剣を佩いている。

武器はそれだけではない。先の尖った鉄の棒や針、短刀など様々な物を隠し持っている。

「なんでいまだにメイド服なんだ？」

「竜也は私のご主人様だから」

「はあ。まあいいけど」

「ねえ、コルネリオと別れるのは辛かった？」

「そりゃそうだよ。コルネリオは俺のよき上司であり、戦友でもあった。できれば敵対したくなかったんだ」

彼女はすつと目を細めた。その体からは殺気を発している。

「でもさ。もしあの人が竜也の前に立ちはだかつたら、容赦なく殺すよ。いいよね？」

「えっ」

「だって、あなたの敵は私の敵だし」

「う、うーん」

アニトラがにこにこ笑いながら言う。

「ところでさ、これからどこに行くの？」

「とりあえず、その辺で情報を集めてみようかと思う」

「ふーん。でも、この辺をうろろしていると危ないみたいだね」

「えっ？」

竜也が周囲を見回すと、いつの間にか十人の男に囲まれていた。

その中の一人には見覚えがある。以前、この街で奴隷の競りをやっていたときに竜也ともめた男だ。

「ふはは、また会ったなガキ。あのときの借りを返してやるぜ！」

でっぷりとしていて年齢は三十前後。上半身は裸で下半身に黒いズボンを履いており、左右の手に曲刀を握っている。

竜也の変節5

竜也は男を見てため息をついた。

「まあお前か、こりない奴だな。その執念を他の事に使ったらどうだ？」

「うるせえ！ てめえみたいなガキにやられて、こっちは悔しくて夜も眠れなかつたんだ。今度こそ、このアンドレア様がぶつた斬つてやる！」

彼は左右二本の曲刀を振りかざした。他の九人も一斉に抜き連れる。いずれも三十歳前後の屈強な男たちだ。武器は曲刀、着ているのは布の服である。

竜也も素早く剣を抜き、アニトラに声をかけた。

「お前は下がつてろ、俺が片付ける」

「冗談やめてよ、私を誰だと思ってるの？」

「戦う気なら止めないけどさ。死ぬなよ」

「もちろん！」

男たちがじりじりと間合いを詰め、やがて一斉に斬りかかった。

標的は竜也だ。同時に彼は一瞬で払い抜け、二人を倒している。自身はかすり傷一つ負っていない。

アンドレアが顔を真つ赤にしながら怒鳴っている。

「馬鹿野郎、何をしてる！ 相手はガキ一人だぞ！」

その瞬間、彼の隣にいた男が血飛沫を上げて倒れた。見ると、メイド服の少女が短剣を構えて笑っている。

「二人いるんだけど、見えないの？」

「ちっ、この女！ てめえら、さっさとたたつ斬れ！」

二人の男が彼女に向かつて突進していく。だが次の瞬間、彼らは悲鳴を上げて身をよじらせた。先の尖った金属性の棒が顔面に突き刺さったのである。アニトラが投げた物だ。

すかさず彼女の短剣が煌めき、その二人は首筋を斬られて倒れ込

む。

アンドレアは絶句し、味方を集めるべく周囲を見回した。残る四人は竜也に斬り立てられている。その凄まじい剣速にまるでついていけない。

竜也は一人の胸を薙ぎ払い、もう一人の顔面を叩き斬り、さらに一人の首をはね、残る一人の胸を貫いた。それで息一つ切らしていない。アンドレアはたまらず悲鳴を上げた。

「じよ、冗談だろ！ 十人いてこんな……」

そのとき、彼の首筋に短剣が突き付けられた。背後でアニトラが笑っている。

「ねえ、おじさん。ちょっと教えてほしいんだけどさ」

「な、なんだ？」

「私たちは今、エルブレイスに対して反乱を起こそうとしている人たちを捕まえる仕事をしてるの。心当たりがあつたら教えてくれな
いかなあ？」

竜也は首を傾げた。自分たちはそんな仕事などしていない。でも、
とりあえず黙って見ている事にした。

「誰がてめえらなんぞに教えるか！」

「あつそ。じゃあ死んでいいよ」

短剣の先がアンドレアの首に食い込んでいく。

「ぎゃあああ、やめてくれええ！」

「じゃあ教えてよ。別に減る物じゃないでしょ？」

「わかった、教える！ だから待ってくれ！」

竜也の変節6

アンドレアが涙目になりながら言う。

「元王女のアイリーンが、大貴族フェルナンドの所に身を寄せたらしいぜ。フェルナンドは先代の王に対する忠誠心が強く、グラナドウスを僭王と称してはばからない男だ」

「グラナドウスって、今この国を統治してる人だよな？」

「そうだ。本来、王家の血筋の人間しか王位につく事はできない。

奴はそれを無視したのさ。だから僭王なんて言われるんだよ」

「ふーん、それで？」

「アイリーンはフェルナンドと結託して拳兵するつもりだって、もっぱらの噂だぜ」

「ありがとね、おじさん。行っていいよ」

アニトラがアンドレアを解放した途端、彼は一目散に逃げ出した。竜也には疑問が一つあった。なぜアニトラがあんな嘘をついたのかわからない。そこで聞いてみる事にした。

「俺たちは反逆者を捕まえる仕事なんかしてないよな？」

「うん。でも、本当の事を言ったらあのおじさんは密告するでしょ。

私たち二人が反乱を起こそうとしてるって」

「なるほどね」

竜也は再びアニトラと腕を組んで歩き始めた。彼女はにこにこ笑っている。幸せでたまらないといった感じだ。

「アニトラ、アイリーンに会いにいくのか」

「……ねえ、竜也」

「ん？」

「やっぱり反乱なんかやめて、私と一緒に殺し屋やらない？ 用心棒でもいいよ」

「いや、そうもいかないだろ」

「そんなの、アイリーンとかマルシアが勝手にやればいいんだって。」

あなたは私と幸せに暮らそうよ。ね？」

竜也の心は少なからず揺れ動いた。ろくに女性と付き合った事がない彼にとつて、この誘いは強烈すぎる。

「う、うーん……」

「いいでしょ？ 朝から晩までご奉仕してあげるからさ」

アニトラは上目使いに竜也を見ながら、とろけるような笑みを浮かべた。その巨乳が彼の体にぴったりと密着している。

「アイリーンは美人だけど性格がツンツンしてるし、マルシアも美人だけど復讐しか頭がない。私が一番お買い得だと思うよ」

「でもなあ」

彼女が竜也の鼻を指でつついて言う。

「まだわかってないの？ おばかさんだね」

「何が？」

「会いに行ったが最後、いいように利用されるよ。あなたみたいなお人良しは、ああいう女にとって絶好の力モなんだから」

「そ、そうかな」

アニトラはため息をついた。竜也は無双の戦士でありながら、その力を自分のために使おうとしない。彼女から見ればもったいない限りだ。

竜也の変節7

そんなアニトラを見ながら、竜也がおずおずと言う。

「お前と一緒に暮らすって話は魅力的なんだけど、駄目なんだよ。やっぱりマルシアを放っておけない」

「なんで？ あなたが生きたいように生きればいいじゃない。彼女に振り回される事なんかはないよ」

沈黙している彼を見て、アニトラはおもむろに言った。

「あなたは自分から重い荷物を担ごうとしてる。それは結局、竜也自身を苦しめる事になるんだよ。マルシアは放っておけばいいし、エルブレイスに不満があるなら他の国へ行けばいい。もう少し肩の力を抜いて楽に生きようよ、ね？」

竜也はいよいよ困ってしまった。確かに彼女の言う通りな気もする。別に反乱など起こさなくても生きていけるのだ。

「それにさ、竜也。国に不満があるから反乱を起こすなんて、随分と短絡的な話じゃない？」

「まあ……」

「そんな、成功するかどうか怪しい賭けをするのはやめなよ。失敗したら死ぬんだよ？ 馬鹿馬鹿しいと思わないの？」

「う、うーん」

「ねえ……まさかとは思うけど、マルシア以外の女にも何か頼まれてないよね？」

「えっ」

竜也は硬直してしまった。心当たりがある。そのようすを見てアニトラは眉をひそめた。

「あるんだね？」

「アルムハウトに攻め込んだとき、セレスティアに頼まれた。『エルブレイスを止めてくれ』って」

「もう、あなたって人は！」

アニトラはすっかりふくれてしまった。竜也はどうしていいやらわからず、おろおろするのみだ。

「男の人が言う事はさっぱり聞かないのに、女の人が言う事はなんでも聞いちゃうんだから！　いつか悪い女に騙されて、骨までしゃぶられるのが目に見えてるよ！」

「うっ……」

「絶対アイリーンに会っちゃ駄目。やっとマルシアから解放されたのに、これじゃ二の舞だよ」

「いや、やっぱり行くよ。反乱を起こすために城を出たんだから」

「竜也！」

「ごめん、アニトラ。馬鹿なのはわかってるんだけどね」

彼女は盛大なため息をついた。竜也を糸で操っているマルシアの姿がはつきりと目に浮かぶ。

「はあ……なんでこんなのを好きになっちゃったんだろ」

「こんなのか言うなよ」

「私の心を返して、今すぐに」

「無茶言うなって」

「もう止めないよ。その代わりに、反乱が終わったら一緒に暮らしてくれる？」

「ああ、喜んで」

竜也の変節 8

アニトラは喜びを隠しきれず、にこにこ笑っている。

「本当だね？ 約束だよ」

「ああ」

二人は再び腕を組んで歩きだした。目指すのは大貴族フェルナン
ドの領地だ。

「ねえ、竜也」

「ん？」

「あなたと私が、同じ屋根の下に住んでたらさあ……」

「うん」

「子どもができちゃうよね、やっぱり」

「はああああ？」

「できると思うよ、数年以内に」

「な、なんで？」

「なんでって、それは……」

アニトラは、自分の頬を手の平で包みながらはにかんでいる。

「私が毎晩、あなたを誘惑するから」

「いや、だからって、その……」

竜也は耳まで真っ赤になった。彼女がそれを見ながらさらに言う。

「あなたと私の子どもなら、きっと強い人間になるよね。男でも女
でもさ。あー楽しみ」

「俺、まだ十六歳なんだけど」

「それが何？」

「いや、早すぎるだろ」

「私の国には十代の妻子持ちがたくさんいるよ」

「ええー！」

「竜也もその一人になろうよ、ね？」

彼は考え込んだ。この国には高校も大学もないし、別に結婚しよ

うが子どもがいようが支障はないようにも思える。

「ね、いいでしょ？」

「うーん……」

「私、温かい家庭に憧れてるんだよ」

「へえ」

「両親は私を厳しく鍛えるばかりで、ほとんど笑顔を見せてくれなかった。おかげで強くなる事はできたけど、なんか寂しいんだよ。愛情を感じられないって言うか」

「厳しくするのも愛情の内だと思うよ」

「わかるけど、それ一辺倒って言うのもね。夫婦の仲は冷え切ってたし、居心地悪かったよ。だから……」

黙って聞いていると、彼女はさらに続けた。

「自分の子が喜んで帰ってきたくなるような、そんな家庭を作りたいなって」

「なるほどね」

竜也は、アニトラの両親の気持ちができる気がした。暗殺組織の中で生きていくのに、人間らしい感情はかえって邪魔になる。だから一から十まで厳しく育てて笑顔も見せなかったのだろう。

だが、その反動がこうして現れてしまったわけだ。彼らがそれを知ったらどんな顔をするだろうか。竜也はそんな事を考えながら歩き続けた。

数日後、二人は大貴族フェルナンドの所領に到着した。とは言っても、自分たちがいるのはまだ端っこだ。フェルナンドの本拠地に着くにはさらに数日かかる。

竜也は金がなかった。アニトラが多少持っていたが、それも底を削いでいる。このままでは食料が手に入らない。

竜也の変節9

仕方がないので、近くの街に行つて日雇いの仕事を探す事にした。着いたのはマリウスの街だ。湯いた地面に数階建ての四角い住宅が建ち並ぶ。皆、壁がベージュ色で茶色の格子窓が付いている。人の姿はほとんど見えない。

竜也が目抜き通りを歩きながら言う。

「昼間だつてのに人影がないな。アストリアと同じだ」

「エルブレイスはどこも治安が悪すぎるんだよ。女の人とか子どもは安心して外を歩けない」

「ひどいもんだな。それより、なんか仕事はないかな？」

周囲を見回しながら歩いていると、あちこちに貼り紙がしてある事に気づいた。内容は、この街を荒らし回っている盗賊集団を退治してほしいという物だ。商業組合の人間が貼つたらしい。

「竜也にうつつつけの仕事だね」

「え、相手は集団なんだろ。俺ら二人だけじゃちよつとなあ」

「大丈夫だつて。ほら見て、百万オンスの報奨金を出すつてさ」

この国ではパン一個が百オンスである。百万オンスはすごい金額だ。

「確かに大金だけど命懸けだぞ」

「あなたがいれば問題ないつて。報奨金で豪華な宿に泊まって、いぢやいぢやしよ。ね？」

「まあ金がないのは事実だし、なんとかしないと。仕方ない、やるか」

「ふふつ、いぢやいぢやしてくれるの？」

「違つよー！」

「あ、赤くなつてるー！」

「うるさいなー！」

どうもアニトラといると調子が狂つてしまつ。

やがて二人は、街の中心にある商業組合の建物に向かった。中に入るとカウンターがあり、痩せた初老の男性が帳簿をめくっている。竜也は声をかけてみた。

「あの、貼り紙を見て来たんですけど。盗賊を退治したら報奨金を出すって……」

男は顔を上げ、眉をひそめた。

「え、誰がやるんだ。まさかお前さん一人か？」

「いや、この子と二人で」

「はあ？ 冷やかしなら帰ってくれ。仕事の邪魔だ」

「え、本気だよ」

男は顔をしかめてこちらを見ている。

「馬鹿を言うなよ、連中は常に十人前後で行動してるんだ。しかも恐ろしく強い。お前さんとその女の子にどうにかできる相手じゃないんだよ」

竜也は、そう言われるのも仕方ないと思った。しかし、このままでは仕事もらえない。

「俺は、エルブレイス軍のマルシアの副官だったんだ。剣の腕には多少なりとも自信がある」

「えっ！」

男は目を見開いて竜也を見つめた。その顔が驚きに満ちている。

「あんた、まさか竜也か？」

「そうだよ」

竜也の変節10

男が満面に笑みを浮かべて言う。

「剣神と呼ばれるあんたが来てくれるとはありがたい」

「え、なんだそれ。剣神？」

「知らないのか？ エルブレイスの兵士たちはみんなそう言ってるよ。街の人間にもその名は知れ渡ってる」

竜也はひたすら目を見張っていた。知らぬは本人ばかりなりと言った所だ。

「ところでさあ、盗賊の十人くらいどうにかならないのか？ 街にはエルブレイス兵だっているんだろ？」

「治安維持の兵士たちはいるが、盗賊たちは神出鬼没で捕まらないんだよ。街の住民も傭兵を雇って対抗してるんだけど、相手が強すぎてどうにも……」

竜也は苦々しく思った。十人やそこらに一つの都市が苦しめられるなど、情けないにも程がある。

アニトラがにこにこしながら言う。

「任せといてよ、おじさん。剣神竜也と紅蓮のアニトラがどうにかしてあげる！」

「え、あんたがああ……」

男が後ずさったのを見て、彼女は慌てて手を振った。

「そんな怖がらないでよ、もう殺し屋は廃業したから」

「そ、そうなのか。ならいいんだが」

「ちゃんと働くから安心して。報奨金よろしくね」

「ああ、わかってるよ」

竜也たちは街に出て盗賊団を探した。彼らは連日のように現れ、商店や通行人から金や売り物を強奪していくらしい。しかも白昼堂々だ。大胆な事この上ない。

組合の男性の話によれば、以前はそれなりに人の行き来があったそうだ。しかし盗賊が出没するようになってから、住民が外出を控えるようになってしまった。そのため、昼間に外を歩いてもろくに人がいないという状態が続いている。

二人で腕を組んで歩き回ったが、なかなかそれらしい連中は見つからない。ただ、時々兵士たちや傭兵たちと行き会う。彼らも盗賊たちを探しているようだ。

「いないなあ」

「いないねえ。警戒されてるし、他の街へ行っちゃったのかな」

そのとき、遠くから男性の喚き声が聞こえた。見ると、十人くらいの男が商店に押し入ろうとしている。あれに違いない。

「アニトラ、いたぞ！」

「本当に白昼堂々なんだね、すごいよ」

「感心してる場合じゃない、行こう！」

盗賊団は十代から三十代くらいの男性で構成されている。全員が布の服を着ているが、武器はそれぞれ違う。直剣、鎖鎌、槍、手斧など様々だ。

盗賊との激闘 1

竜也とアニトラが到着する前に、近くにいた兵士たちが盗賊団を包囲した。このままだと出番はなさそうだ。

「アニトラ、連中が捕まりそうだぞ」

「え、私たちの出る幕なし？ やだあ！」

兵士たちは革の鎧を着込み、曲刀を握っている。彼らが今にも斬りかかるうとしたそのとき、盗賊たちの中から一人の少年が進み出た。

歳は十六、七。短い茶髪に茶色の瞳、白い肌に鍛え上げられた体。上半身は裸で、下半身には黒い短パンを履いている。持っているのは短い槍で、先はおるか柄の部分まで鉄でできているようだ。

彼は兵士たちをにらみつけた後、不敵な笑みを浮かべた。

「まーた雑魚が集まってきやがった。そんなに死にたいのか、ためーらはよー！」

兵士の一人が斬りかかった瞬間、少年の槍が閃光と化して顔面を貫いた。他の盗賊たちも武器を構えて兵士たちに襲いかかる。たちまち周囲に血の雨が降った。

兵士たちは必死に戦ったが、盗賊たちの攻撃の鋭さに押されまくっている。やがて一人が鎌で斬り裂かれ、もう一人が斧で頭を叩き割られた。他の者も次々と倒れ、もはや壊滅寸前だ。

そのとき、やっと竜也たちが到着した。周囲の視線が二人に集まる。

「アニトラ、行くぞ」

「殺していいの？」

「抵抗されたなら仕方ない。手加減して勝てる相手じゃないだろ」

「うん！」

竜也は盗賊たちを見回して言った。

「そこまでだ、武器を捨てる！」

さっきの少年が薄笑いを浮かべながら言う。

「なんだてめえは、死にたいのか？」

「俺はかつてエルブレイス軍にいた、轟竜也だ。それ以上乱暴するなら斬るぞ」

「おお、あの剣神か。会えて嬉しいぜ。そんなに強い奴がいるなら、ぜひ戦ってみたいと思っただよ」

「ふーん、お前の名は？」

「グスタフだ。『疾風のグスタフ』とも呼ばれてるぜ」

「中二病臭い呼び名だな」

「てめえは俺の獲物だ。行くぜ！」

グスタフは短槍をしごいて突きかかった。凄まじい速度だ。並の男なら一瞬で貫かれていた所だが、竜也はわずかに移動しただけでかわした。直後に横薙ぎの一撃を放っている。

グスタフは素早く後退した。その顔面を目掛けて竜也が斬り下ろす。だが、これも当たらない。

「ふん、疾風と言われるだけの事はあるな」

「当たり前だ、俺をなめんなよ。その体に風穴を空けてやるぜ！」

盗賊との激闘2

グスタフが再び踏み込み、目にも留まらぬ速さで突きを放つ。

「しゃああつ！」

竜也はすかさずさばいたが、槍は次から次へと襲ってくる。これではきりが無い。

「どうした、剣神！ 手も足も出ねえのか！」

「何を調子こいてんだ、笑わせんな」

竜也は素早く跳び下がり、一旦仕切り直そうとした。ところがグスタフはお構いなしに突進してくる。

「ふはは、死にやがれ！」

彼が槍を繰り出そうとした瞬間、斬撃が眼前に迫っていた。

「うおっ！」

グスタフは辛うじて受け止めた。今度は竜也の反撃だ。逆袈裟に斬りつけ、胴を薙ぎ払い、胸を狙って突き、さらに踏み込んで顔を斬り下ろす。その猛攻に相手はたじろいでいる。

「うおっ、こいつ……つええ！」

彼は慌てて跳び下がり、周囲の仲間たちに呼びかけた。

「ためえら、その女を捕まえる！ 人質にするんだ！」

盗賊たちが一斉にアニトラへ向かっていく。だが彼女は逃げようとし無い。

次の瞬間、その口元が吊り上がった。

「さて、やりましようか。恨まないでね」

彼女が身を翻すと男たちは悲鳴を上げた。その体に金属の棒が突き刺さっている。

「行くよ！」

アニトラが走り抜けた途端、盗賊たちが絶叫した。彼らは鮮血を噴き出して倒れていく。

「私たちの前に立った事を後悔しなさい！」

彼女の恍惚とした表情を見て、グスタフは青ざめながら震えている。

「なんだよあの女……やべえ、やばすぎる……」

「紅蓮のアニトラって言うんだよ」

「あ、あいつが！ 敵にしちゃいけない奴だって聞いてたけど、今それを実感したぜ」

やがて、凄まじい殺戮が終わった。盗賊たちは肉塊と化して転がり、全身に返り血を浴びたアニトラが薄笑いを浮かべて立っている。

「ふふ、みんな壊れちゃったね」

竜也はそのようすを見てため息をついた。

「アニトラ」

「え？」

「殺しを楽しむようになったら、人間としておしまいだぞ」

「そ、そうだよね……ごめんなさい」

残ったのはグスタフ一人だ。彼は全身に冷や汗をかき、その場に立ち尽くしている。

「う、嘘だろ。たった二人に俺らが……しかも片方は女だと？」

盗賊との激闘3

残るはグスタフ一人だ。竜也は油断なく剣を構えながら彼にたずねた。

「どうする、まだやるか？」

「当たり前だ、この野郎。仲間を全員やられて黙ってられるかよ！」
グスタフが再び突きかかり、怒りに満ちた一撃を繰り出す。竜也は身を翻してかわしつつ、その鋭さに感嘆した。

彼はさらに距離を詰め、間断なく突きを放ってくる。

「おらおらおらああっ！」

竜也は後退しようとした途端、足を払われてしまった。倒れた所に槍先が殺到する。

「死ねや！」

それをかわして起き上がったものの、今度は顔面に拳打を喰らった。頭がくらくらしして反撃できない。アトラが真つ青になりながら叫ぶ。

「竜也！」

「来るな！ こいつは俺が倒す！」

彼は後退して距離を取り、剣を鞘にしまい込んだ。グスタフが目を吊り上げてにらみつけてくる。

「なんだ、戦意喪失か？ でも容赦しねえからな。てめえは絶対ぶつ殺す！」

竜也は不敵に微笑んだ。

「やってみるよ。自分の胴体が真つ二つになってもいいならな」

「ハツタリこいてんじゃねえ、見苦しいんだよ！」

グスタフが激昂して突きかかったその瞬間、彼の目の前を閃光が走った。同時に金属音が響き渡り、槍が弾き飛ばされている。

「え、ええっ？」

慌ててそれを拾おうとしたが、もう遅い。彼の首筋に剣が突きつ

けられた。

「ち、畜生……この俺が……」

「よくがんばったけどな、あきらめろ。お前の負けだよ」

グスタフはうなだれながら兵士たちに連行されていった。アニトラが満面に笑みを浮かべて抱き着いてくる。

「さっすが竜也！　かつこいいい！　愛してる！」

「かなり苦戦したけどな。あいつの実力は本物だった」

「あなたに比べたらたいした事ないって。さ、報奨金もらいに行こ」「そうだな」

二人は商業組合の建物に行き、百万オンスを受け取った。これで一息つけそうだ。

アニトラははしゃぎまくっている。

「おいしい物たくさん食べて、いっぱいいちゃいちゃしようね！」

「明日にそなえてゆっくり休んだ方が……」

「やだ。今夜は寝かせないよ」

「いや、あの」

「何？」

「なんでもない」

彼らは近くの店で食事を済ませ、宿屋に泊まって風呂に入った。後は寝るだけだ。

寝室にベッドは二つあるが、彼女は一緒に寝ると言って聞かない。竜也は困惑してしまった。

「別々に休んだ方がいいって。アニトラも疲れただろ？」

「えー、何それ！　せっかくの機会なのに！」

竜也の想い

「竜也はアニトラをじつと見つめて言った。

「黙ってようかと思ってたけど、やっぱり話しておいた方がよさそうだな。今ならまだ引き返せるし」

「何？ 真剣な顔しちゃって」

「俺はこの世界の人間じゃないんだ」

「はあ？」

アニトラはきょとんとしている。常識に照らし合わせると全く理解できない。

「え、じゃあなんでここにいるの？」

「さっぱりわからない。気がついてたらここにいたんだよ。元々は日本って国にいたんだ」

「とても信じられないけど、まあいいよ。結局何が言いたいわけ？」

「つまり」

「竜也は一呼吸置いてから、おもむろに話し出した。

「突然この世界に来たって事は、突然元の世界へ戻ってしまう事もありえるわけだ。そのとき、アニトラのお腹の中に俺の子どもがいたらどうする？ お前は一人で子育てしなきゃならないし、子どもは父親の顔を見る事もできない。そんなのはさすがに……」

彼が続けようとするのをアニトラが手で制した。その体が小刻みに震えている。

「そんな嘘をついてまで私を遠ざけたいの？ 嫌いなら嫌いってはっきり言っよ」

「違う、そうじゃないんだ。信じてくれ！」

「もついいよ……そうだよね、こんな危ない女なんか恋愛対象外だよね。わかってたんだよ、本当は。私みたいな人間が夢を見ちゃってごめんなさい」

アニトラの瞳から涙が溢れているのを見て、竜也の心は締めつけ

られた。このままでは彼女を傷つけるだけで終わってしまう。

そこで、彼はその体を抱き寄せて言った。

「わかった、もう言わないよ。こんな俺でよかったらお前のそばにいる」

「竜也……」

「でも、今日の所はゆっくり休もう。俺たちはこれから厳しい戦いをしなきゃならないんだ。そんなときに寝不足だったら一巻の終わりだぞ」

アニトラは涙を拭き、笑みを浮かべている。

「あなたらしい言い方だね」

「どうしても嫌か？」

「ううん、そんな事ないよ。今日は我慢しとく。でも……」

「でも？」

「せめて、私を抱きしめながら寝てほしいな。あなたの愛情を感じたいの」

「わかったよ」

竜也はアニトラと一緒にベッドへ入り、その体をしっかりと抱きしめた。彼女がうっとりしながらささやく。

「竜也、愛してる」

「ありがとう、アニトラ。嬉しいよ」

二人の旅

アニトラはベッドの中で竜也の体温を感じていた。

「ずっとこうしていたい……」

生まれてこのかた、ここまで強い男性を見た事がない。そのくせ彼はまだ十六歳ときている。きっとこれからは、今まで以上に武名を轟かす事になるだろう。

「最高の旦那様だよ」

「ちよ、俺ら結婚してないぞ」

「じゃあ結婚してよ」

「待って」

竜也は苦笑した。ここまでストレートに求愛されるのも珍しい。

「俺ら、まだ十代なんだからさ。そんなにさせる事ないよ。もっといろんな人とつき合ってからでも遅くは……」

「そんな事してたら他の人に持ってかれちゃうじゃないの。マルシアとかアイリーンとか」

「そんなにもてないから大丈夫さ」

アニトラがため息をついて首を振る。

「竜也は自分の価値をわかってないね」

「え？」

「毎日のように戦争が起こってるこの世界で、あなた以上に価値がある人間はいないよ。まさに一騎当千、無双の剣士だからね」

「戦争が終わればお払い箱だろ」

「そうしたら、私と一緒に用心棒でも殺し屋でもやればいいでしょ。どっちにしるあなたの武名は役に立つよ」

「うーん……」

竜也は話を聞いて感心した。自分より彼女の方がずっと視野が広いし、先の事を考えている。

「お前って理想の妻かもな」

「本当？ 嬉しい！」

「でも結婚はしないけど」

「なんで！ どうすればしてくれるの？」

「いや、だからそれは先の話だよ」

「えー！」

「そろそろ寝よう。明日からまた歩かなきゃならないし」

「うん」

竜也は目を閉じ、間もなく寝入ってしまった。アニトラは呆然とその顔を見つめている。

「寝つき早っ」

彼の寝顔はどこにでもいる少年の物だった。神がかった強さを持つ戦士とは思えない。

アニトラはくすりと笑い、キスをしてから言った。

「おやすみなさい、未来の旦那様」

翌朝、二人はマリウスの街を出発した。目指すは大貴族フェルナンドの本拠地だ。

周囲には見渡す限りの草原が広がっている。雲一つない晴天で、さわやかな風が心地いい。

竜也がアニトラと腕を組んで歩いていると、背後から若い男の声がした。

「待て、この野郎！」

振り向くと短槍を構えたグスタフが立っている。着ている服は破け、全身傷だらけだ。竜也は思わず目を見張った。

「あれ、なんでお前がいるんだ？ 兵士たちに引き渡したのに」

「脱出してきたんだよ、ためえに復讐するためにな！」

グスタフの意地

竜也は剣の柄に手をかけ、アニトラに向かって言った。

「下がってろ」

「一人で大丈夫？」

「ああ」

グスタフは油断なく槍を構え、竜也を見据えている。

「仲間を残らず殺しやがって。てめえらだけは絶対に許さねえ。二人ともあの世へ送ってやる！」

彼は地を蹴ると同時に短槍を突き出した。それがかわされてもさらに連撃を加える。

幾筋もの光が竜也を襲ったが、まるで通じない。彼は眉一つ動かさず、正確にそれらをかわしていく。やがてグスタフの顔にあせりが見え始めた。

「この野郎、これならどうだ！」

彼は相手の足先を踏みつけ、直後に渾身の突きを放った。こうしておけば逃げられない。

「ふはは、もらっ……」

その瞬間に金属音が響き渡り、短槍は回転しながら落ちて地面に突き刺さった。

グスタフの首筋にはまたもや剣が突きつけられている。彼は目の前の出来事が信じられなかった。今までどんな敵をも貫いてきた自分なのに、まるで歯が立たない。

「なん……だと……？」

戦意を失った彼を竜也がにらみながら言う。

「これで本当に最後だ。次はない。今度俺の前に現れたら容赦なく叩き斬る。さっさと消えろ」

その眼光の鋭さと威圧感にグスタフはたじろぎ、がっくりと肩を落とした。

「俺の負けだ。本当に残念だけど、お前の方がずっと強い」

「そうか」

「こんな事を頼むのもなんだけど、一緒につれてっつてくれないか？」

「はあ？」

竜也はきよんととして、アニトラと顔を見合わせた。彼女もわけがわからず硬直している。

「なんでつれて行ってほしいんだ？」

「俺はいつかお前を超えてみせる。それで正々堂々一騎打ちをして倒してやる。そのときのために、お前という男を研究しておきたい」

「おもしろい奴だな。宿敵を倒すために、わざとその傘下に入ろうつてのか」

「そうだ。当面の間はお前らに協力する。だから頼む、つれていってくれ」

「俺はかまわない。アニトラは？」

「えー！ 危ないよ、こんな人」

グスタフがむっとしながら言う。

「お前に危ないとか言われたくねえよ！」

「今まで敵だった人間なんか、信用できないじゃないの」

竜也は苦笑した。それを言うなら、彼女自身も元々は敵だったのだ。

「お前、自分がカールハイムの刺客だった事を忘れてないか？」

「あ、忘れてた。えへへ」

王女との再会 1

竜也はアニトラとグスタフの二人をつれ、ケルンの街へと向かった。

ケルンは大貴族フェルナンドの本拠地で、約十万人の人口を抱える城塞都市だ。噂によれば、ここにアイリーンがいるはずである。

街の内部は他の都市と同じで、煉瓦造りの住居や商店が建ち並んでいる。ただ他と違って治安がよく、人通りが多いのが特徴的だ。

住民たちに尋ねたところ、フェルナンドの住居はすぐ判明した。目抜き通りをまっすぐ行つた突き当たりだと言う。三人がその通りに歩いていくと、やがて四階建ての屋敷にたどり着いた。

入口には四人の番兵が立っている。竜也は彼らに話しかけ、アイリーンに取り次いでもらつた。久々の再会だ。

しばらく外で待つていると、彼女が姿を現した。

歳は十六、七。はつきりした目鼻立ちに整つた輪郭、すらりと伸びた手足。後ろで束ねた赤紫の髪に透き通るような白い肌。さらに青紫の瞳が静かな光をたたえている。

着ているのは白く輝く金属性の鎧で、武器は腰に佩いた一本の突剣だ。

竜也は懐かしさの余り、満面に笑みを浮かべた。

「アイリーン、久しぶり！ 元気にしてたか？」

ところが彼女はにこりともしない。

「竜也……言葉が通じるようになったのね」

「ああ、マルシアに教わつたんだよ」

「あのときは逃がしてくれてありがとう。感謝してるよ」

「いや、気にしないでくれよ。それより、折り入って話が……」

竜也は不審に思った。彼女が剣の柄に手をかけているのだ。

「なんか警戒してないか？ 俺は敵じゃないよ」

「何を言ってるの？ あなたはラグラスの部下として各地を転戦し

たそうじゃない。話は全部聞いてるよ」

「いや、もうエルブレイス軍からは抜けたんだ。今後は反乱軍の一員として戦おうと……」

アイリーンの目が吊り上がった。しかも殺気を放っている。

「仮にそれが本当だったとしても、信用できる人間じゃないよね。今までエルブレイスに忠誠を誓っていないながら急に寝返るなんて」

「いや、それには事情が……」

「本当の事を言いなよ。自分がエルブレイスの回し者だってさ」
「違う！」

竜也は必死に事情を説明した。元々、忠誠など誓っていない事。マルシアに恩を返すために戦っていた事。今の自分は、この国を潰すために動いている事。

ところが、彼女はまるで聞く耳を持たない。

「あなたが反乱のために動いているっていうより、ラグラスの命令で私を捕らえに来たっていう方がしっくりくるよね」

王女との再会2

竜也は困惑した。自分がアイリーンの味方だという事を証明する手段がない。

「信じてくれ。マルシアは国王の命を狙ってるし、俺はエルブレイスを潰そうと思ってるんだ。それが成功したら、お前が王位に就いて国を建て直せばいい。だから……」

「何度も言うけど、信用できないよ」

アニトラがむすつとした顔で竜也の袖を引く。

「もうやめなよ、信用してくれない相手のために無駄な時間を使う事ないって」

「でも……」

彼は迷った。ここで引き下がってはいけないと自分の心が教えている。

そのとき、自分の口を伝って思いがけない言葉が飛び出した。

「イリーナ」

竜也自身、その名前を呼ぶつもりはなかった。しかし、勝手に口が動いてしまう。

「あのときは本当にすまなかった。いくら詫びても許されないのはわかっている。でも、せめてもの償いとして……」

彼はアイリーンをまっすぐに見つめて言い放った。

「今度こそ、お前を守り通してみせる。この命をかけて」

アイリーンは口元を押さえ、ぶるぶると震えている。

「……アンドリユー様！」

アニトラとグスタフは目を見張っていた。この二人のやり取りが全く理解できない。

アイリーンは竜也に駆け寄り、その胸に顔をうずめた。

「ずっとお会いしたいと思っておりました。でも、その願いはかなわない物とばかり……」

「私もだ。お前と会う事はないだろうと思っていた。もう二度と放さない」

竜也は彼女の細い体をしっかりと抱きしめている。それを見たアニトラが叫んだ。

「ちよつと、いきなりなんなの！ どういう事？」

竜也はその声で我に返り、慌ててアイリーンを解放した。彼女は真っ赤な顔をしながらうつむいている。

「お、俺は何を……？ アイリーン、ごめん」

「う、ううん」

二人の間に気まずい沈黙が流れているのを見て、グスタフが眉をひそめた。

「なんなんだよ、一体。馬鹿でもわかるように説明してくれよ」

竜也自身、混乱してしまって考えがまとまらない。アイリーンは先に落ち着きを取り戻し、アニトラとグスタフに説明した。

「私は前世で、イシユタルっていう国の奴隷だったの。そこでアンドリユーっていう王子と恋人同士になった結果、彼の部下に殺された。その後この国に転生して、王子の生まれ変わりと再会したってわけ」

王女との再会3

グスタフは顔をしかめながら首を振っている。

「馬鹿馬鹿しい、そんな話があるかよ。百歩ゆずって転生したのが本当だとしても、どうして竜也が前世の恋人だつてわかつたんだ？」

「彼が私の前世の名前を呼んだからだよ。それでやっと思い出したの」

「じゃあ竜也は？」

「この国で初めて会ったときはわからなかった。でも彼女と再会したら、そのときの記憶がはつきりと蘇つたんだ。アイリーンはイリーナと瓜二つだし、間違いないと思って」

グスタフはため息をついて首を振った。一方、アニトラはアイリーンをにらみつけながら言う。

「あなたが前世で竜也の恋人だったとしても、今は関係ないよね。もしかして、また竜也と付き合いたいとか言うつもり？」

すると、アイリーンもアニトラを見据えて言った。

「そうだよ、悪い？」

「うん、私が先に付き合ってるんだからね。あなたの出る幕はないよ」

「どう考えても私が先でしょ？ 前世からだよ？」

「だから、それはもう関係ないって……」

「あるよ。二人とも無理に引き離されて記憶はそのままなんだから。これで燃え上がらない方がおかしいでしょ？」

「くっ……」

二人の間に火花が散っているのを見て、竜也が割って入った。グスタフは興味津々だ。どうやって収束させるのか見物である。

すると竜也は右手でアイリーンを抱き寄せ、左手でアニトラを抱き寄せた。

「うん、両手に花っていうのも悪くない。いや、それどころか最高

だな」

途端にアイリーンが平手で彼の頬を打ち、アニトラも続けて頬を打った。竜也がよろめきながら後退する。

「い、いや……単なる冗談……」

グスタフは呆れながらそのようすを見ていた。これでは二人の神経を逆なでしただけだ。

「何やってんだ、お前」

「なごませようと思ったんだよ」

「なごむわけねえだろ！」

「と、とにかく二人とも仲良くしてくれよ。当面の目的は同じなんだからさ」

アイリーンが目を細めながら言う。

「その子は気に入らないけど、竜也には協力するよ」

アニトラも眉を吊り上げながら口を開く。

「その女は嫌いだけど、竜也のためにがんばるよ」

彼は胸を撫で下ろした。とりあえずはなんとかかなりそうだ。

竜也たちはアイリーンにつれられて屋敷に入り、大貴族フェルナンドに面会した。四十がらみの厳めしい男性で、現国王の打倒に協力したいと言う。つごう三万の兵を動員できるそうだ。

彼らが屋敷の中で今後の行動について話し合っているとき、恐るべき情報もたらされた。ラグラスが総勢十万の兵を率いて、ここケルンの街に向かってきているらしい。

ラグラスが総指揮官で、コルネリオとマルシアが副官だ。まともにぶつかれば勝ち目はない。

ケルンの決戦1

アイリーンはフェルナンドに命じ、三万の兵を動員する事にした。だが、それでも足りない。相手は十万からなる大軍だ。

竜也は彼女に尋ねた。

「他に動かせる兵力はないのか？」

「現国王を心底憎んでる貴族は結構いるし、あと五万くらいは集められるよ。でも呼び寄せる時間がない。エルブレイス軍はあと五日足らずで到着するらしいし」

「構わないから、とにかく呼んでくれ。戦いが長びけば間に合う可能性もある。あと、アルムハウトの首都レンスブルグにいるジェラルトって奴に使者を出してほしい。きっと力を貸してくれるはずだから」

「わかったよ」

アイリーンは使者を四方に放つ一方、城塞都市ケルンに兵力を集めた。とりあえず三万人は確保できそうだが、他の味方は間に合わない。仕方がないのでケルンに籠り、城壁を盾にして戦う事にした。竜也は彼女をつれて街を見て回った。外側は高さ十メートル、幅五メートルほどの分厚い城壁に囲まれている。中の建物も煉瓦で造られた堅牢な物だ。城塞都市としての防御力は充分あるように思える。

彼はそれらを見ながらうなづいた。

「うーん、でも十万は……」

「いくら城塞都市に籠ってても、兵力差が七万っていうのは厳しいね」

「まあな。じゃあ一丁やるしかないか」

「何を？」

「ラグラスを倒すんだよ」

「ええっ、どうやって？」

「それは秘密だ。とにかく、俺がいない間ここを守ってくれ」

「え、いなくなっちゃうの？」

彼女が眉をひそめているのを見て、竜也は微笑んだ。

「大丈夫、すぐ帰ってくるよ。お前やアニトラを残して死んだりしない」

「本当？」

「ああ。俺を信じろ」

アイリーンはしばらく沈黙した後、おもむろに口を開いた。その顔から憂いは消えている。

「わかった。あなたを信じて待つてるよ」

「うん、じゃあここは頼む。俺が戻る前にやられたりするなよ」

「もちろん！」

それから五日後、ラグラス率いるエルブレイス軍十万がケルンに到着した。副官としてコルネリオとマルシアも参加しており、ガルフとブラッドの姿も見える。

彼らは竜也がこの街にいる事を知らない。目的はアイリーンとフエルナンドの討伐だ。

ラグラスは金色の甲冑に身を包み、緋色のマントをまとっている。武器は左右二本の直剣。右は太くて長く、左は細くて短い。一見ひどくアンバランスだが、彼にとっては最高の武器である。

マルシアは軽装中の軽装で、身に着けているのは真紅のワンピース。武器は左右二本の細長い直剣だ。

コルネリオは真っ白い甲冑に身を包み、腰に一本の突剣を佩いていた。もっともこの武器を使いこなす能力はなく、ただの飾りにすぎない。

ケルンの決戦2

ラグラスは剣を引き抜き、ケルンの街の城壁を指して言い放った。「あんな壁など問題ではない。反逆者どもを一気にひねり潰せ！」

十万のエルブレイス兵が、車輪の付いた攻城櫓を次々と押し出していく。これらの高さは十二メートル近くあり、接近させれば城壁に跳び移る事も可能だ。

フェルナンド軍は一斉に火矢を放って焼き払おうとしたが、濡れた布で覆われていてなかなか炎上しない。櫓は矢の嵐を浴びながらどんどん接近していく。

それらが壁の直前まで行ったとき、上に乗っていたエルブレイス兵たちが跳び移った。守備側も必死に防戦するが攻撃側の勢いは止まらない。城壁の上で激しい斬り合いが行われ、敗れたフェルナンド兵が蹴落とされている。

ラグラスは、その様子を見てつぶやいた。

「雑魚ども、さっさとあの世へ逝け。お前らに生きている価値などない」

マルシアは彼から離れた場所に立っていた。本来ならアイリーンに加勢してラグラスを斬り倒したいところだ。しかし、周りをエルブレイス兵が固めている。それに運よく成功したとしても、十万の軍勢の中から逃亡するのは難しい。

コルネリオもラグラスから離れた場所に立っていた。自分の出番は全くない。きっとこれからもないだろう。士気を上げるためだけにつれてこられたからである。

戦いは激しくなる一方だ。今の所、エルブレイス軍が反乱軍を圧倒している。

「今日中にケルンを陥落させてやる。戦闘が不得手なフェルナンドと、多少剣が使えるだけのアイリーンに何ができると言うのだ。奴らには万に一つの勝機すらない。この俺がいる限りはな！」

確かに、普通ならラグラスの圧勝だったはずだ。しかし彼にとつて想定外だったのは、竜也がアイリーンの味方として参戦していた事である。

エルブレイス兵に囲まれながら指揮を執るラグラスに、こっそり近づいた者たちがいた。竜也、アントラ、グスタフの三人だ。全員がエルブレイス兵と同じ革の鎧を着込み、直剣を腰に佩いている。

この場にいるエルブレイス兵の誰もが彼らに対して完全に無警戒だった。兵士たちは竜也の顔を知っているが、彼が軍隊を抜けた事までは知らない。つまり味方だと思っていたのである。

それでも、ラグラスの周囲を固めている兵たちは竜也らの不審な動きに気づいた。その中の一人が眉を吊り上げて声をかけてくる。

「なんだ、お前たちは。勝手に持ち場を離れ……」

言い終わらないうちに、彼の顔面をグスタフの短槍が貫いた。周囲の兵たちが驚いて声を上げる。

「なんだこいつら、裏切ったのか！」

「ラグラス様、謀反です！」

ケルンの決戦3

ラグラスは竜也の姿を見て目を見張った。

「お前、どうしてここに……」

「あんたを仕留めるためだよ。悪いけど死んでもらう」

「たった三人でか？ なめた真似をしてくれる！」

ラグラスは周囲の護衛に命じて、竜也に斬りかからせた。指揮官の直属である彼らは筋骨隆々とした猛者ばかりだ。

「その男を刻んでしまえ！」

彼らは直剣を煌めかせて襲いかかった。その凄まじい斬撃が竜也を目掛けて降り注ぐ。しかし次の瞬間に無数の閃光が走り、男たちは血飛沫を上げて倒れ伏した。竜也には傷一つついていない。

「おっさん、俺を倒したきや自分で来いよ。楽しようとすんな」

「馬鹿を言うな、こっちには十万の味方がいるんだ。わざわざ危険を冒してお前と戦う必要はないだろう」

周囲のエルブレイス兵たちが、じりじりと間合いを詰めてくる。

それを見て、グスタフが冷や汗をにじませながら言う。

「竜也……お前、とんでもねえ奴だな。一緒にいたら命がいくつつあつても足りねえよ」

「まあな。でも楽しめるだろ？」

「ふっ、まあな」

ラグラスの部下たちが襲いかかろうとしたとき、彼らを背後から攻撃した者たちがいた。マルシア、ガルフ、ブラッドの三人だ。兵士たちは大金づちに叩き潰され、三又の槍に貫かれ、剣に刻まれて倒れていく。

竜也はその様子を見て微笑んだ。

「マルシア、悪いな！」

「全然。それより、急いで彼を倒して！」

「任せとけ！」

彼女はまだ造反するつもりはなかったのだが、竜也が仕掛けてしまった以上は加勢せざるを得ない。

殺到するエルブレイス兵を、グスタフたちやマルシアたちが血祭りに上げていく。その間に竜也はラグラスと一対一で対峙した。

「おっさん、今までの借りを返してやるよ。あと、マルシアの無念も晴らしてやる」

「やれる物ならやってみる」

ラグラスが左右二本の剣を引き抜き、竜也を睨み据える。

「せっかく命を助けてやったのに、その返礼がこれか」

「ふざけんな。あんたがいなけりや俺はアイリオンと引き裂かれる事もなかったし、奴隷にされる事もなかったんだ。それなのに恩を売ったつもりか？」

「お前には目をかけてやったつもりだがな」

「奴隷に叩き落として殺し合いをさせるのを『目をかけた』って言うのか。馬鹿にすんな！」

竜也は直剣を振りかざして突進した。目にも留まらぬ一閃がラグラスを襲う。それは辛くも弾かれたが、彼の攻撃は止まらない。

「らああああっ！」

ケルンの決戦4

竜也の剣が無数の閃光と化し、次々とラグラスの頭部を襲う。だが、この歴戦の師団長はそれを全てはね返した。

ラグラスは全身に甲冑を着込んでおり、露出しているのは首から上だけだ。それに対して竜也は革の鎧で胸を守っているだけで、顔も手足もむき出しである。剣で斬り合うのにこの差は大きい。

ラグラスが後退し、左右の剣を構えながら言う。

「お前を見ていると、血気盛んだった頃の俺を思い出すよ」「そうか」

「お前ほどの実力者なら、師団長になる日も遠くなかっただろうにな。実に残念だ」

「悪逆非道な国家の師団長になんかなりたくないよ」

「俺はエルブレイスを気に入っているがな。貧乏な平民だった俺が師団長に出世できたのは、『強い者なら誰でも認める』という現国王の方針のお陰だ」

「能力主義なのは結構だけど、他の国を侵略しまくるのは論外だよ」

「そうか？ 国を大きくするにはつとり早い方法だと思うぞ」

「そのために、どれだけの人間が犠牲になると思ってたんだ！」

竜也は素早く踏み込み、相手の頭に一撃を浴びせた。師団長はこれを右の剣で受け止め、左の剣を突き出す。それは竜也の頬をかすめて傷を作った。

ラグラスが間髪入れずに斬撃を加える。

「おおおっ！」

彼は右の剣で斬り下ろし、左の剣を一閃させ、さらに踏み込んで突きを放った。それらがかわされると足を払い、逆袈裟に斬りつけ、続けて右手を二閃三閃させる。

師団長の凄まじい剣技にエルブレイス兵から声が上がった。

「さすがはラグラス様だ！」

「あれなら、相手が剣神だろうが勝てる！」

すかさず彼らの顔をグスタフの短槍が貫く。

「うるせえんだよ、てめえら。竜也が負けるわけねえだろうが！」

アニトラも短剣を振りかざし、敵兵を突き倒しながら言う。

「私の旦那様は史上最強の剣士。ラグラスなんか敵じゃないよ！」

竜也はかすり傷を負っているだけで、今のところ大きな被害はない。それはいいが、自分も効果的な攻撃を加える事ができずにいた。首から上しか狙えないというのは余りにも大きなハンデだ。

ラグラスが余裕の笑みを浮かべながら言う。

「残念だったな。俺が甲冑に守られていなければ、勝利を手にする事ができたかもしれないのに。まあ、今さら後悔しても手遅れだ。そろそろあの世へ送ってやる」

すると、竜也もにっこり微笑んだ。

「ラグラス、遺言があれば聞くとよ」

「なんだと？ それはこっちのセリフだぞ」

「あんたは結婚してるんだろ？ 後で嫁さんに伝えておいてやるから、さっさと見えよ」

ケルンの決戦5

ラグラスが眉をひそめながら竜也を見つめる。

「思い上がるのもいい加減にしておけ。お前が優れた戦士だという事は知ってるが、それにしても……」

「ないって事でいいのか？」

「当たり前だ、ふざけるな。この状態で俺が負けるわけないだろう」「そうか……わかった。遺言はなかったって伝えておく」

ラグラスは、竜也の殺気を感じて戦慄した。これははったりなどではない。本当にやる気だ。

「こいつ……」

十万の軍勢の中にたった三人で潜入し、指揮官を倒そうとするなど普通はありえない。それなのに今、絶対に不利な状況に置かれながら決行しようとしている。

ラグラスの心の中に一つの疑問が浮かんだ。

こんな事ができるのは自分の力を過信した身の程知らずか、本当にそれをやり遂げる力を持った超人のどちらかだろう。では、竜也はどうなのか。

ラグラスの心の中に「後者」という答えが浮かんできたが、彼はそれを必死に打ち消した。

「ありえん、まったくもってありえん。竜也、死ぬのはお前の方だ！」

その声が響いたとほぼ同時に、竜也が疾走した。直後に脳天を目がけて剣を振り抜く。だが、これは右の長剣で弾かれている。

相手が左の剣を突き出すと、竜也は身を翻してかわした。すかさず踏み込み、渾身の力で体当たりをする。

「くっ！」

ラグラスはバランスを崩し後ろに倒れていく。そんな状況になっても師団長は冷静だった。地面に叩きつけられたとしても、すぐに

起き上がれば問題ない。

ところが、竜也はこの機を逃さなかった。自分も倒れかけているにも関わらず、相手の体が地面に接する前に首を叩き斬ったのである。即死だった。

周囲のエルブレイス兵たちは、師団長が死体と化したのを見て悲鳴を上げた。十万の軍勢の中に紛れ込んだたった三人の刺客が、指揮官を屠ってしまったのだ。もう悪夢としか思えない。

彼らの中から次々と声上がる。

「う、嘘だろ。嘘だと言ってくれ！」

「あのラグラス様が……」

「やっぱりあいつ、人間じゃねえよ！」

兵士たちが混乱に陥っていると、男性の声が響き渡った。コルネリオだ。

「全員、戦闘をやめろ！ 剣を引け！」

エルブレイス兵たちは胸を撫で下ろした。まだこちらには軍神と呼ばれる副官がいるのだ。彼が指揮を執れば全軍の壊乱は避けられる。

停戦

「コルネリオは全軍が戦闘を停止した事を見届け、竜也に向き直った。その表情は真剣そのものだ。」

「竜也、私は今でもお前をかけがえのない友人だと思っている。」

「俺もだよ。」

「しかし、私はエルブレイス軍の指揮官であり、お前は反乱軍の一員だ。それは個人的な友情となんの関係もない。」

「竜也は無言でうなずいた。彼自身もそう思っている。戦場で敵として対峙した以上は、親子であろうが無二の親友であろうが戦わなければならぬ。」

「ただ、コルネリオは先の事を考えていた。このまま戦闘を続けた場合、竜也は例え十万の兵に囲まれようが自分を叩き斬るだろう。」

「後は、師団長と副官を失ったエルブレイス軍十万と反乱軍三万の戦いだ。」

「このまま戦闘を続けていいものか、という考えが彼の頭の中を駆け巡っている。十万の軍勢を擁しながらあっさり指揮官を倒されたという時点で、エルブレイスの武名は地に堕ちた。さらに副官の一人であるマルシアに裏切られ、もう一人の副官である自分も斬られる運命にある。」

「このまま戦闘を続けて勝利したとしても、得る物が余りにも少ない。既に人心が離れて傾きかけた国の内乱を鎮圧するために、多くの人命を犠牲にする必要があるのだろうか。」

「コルネリオは多くの兵士たちに見守られる中、竜也に向かって口を開いた。」

「一つ教えてほしい。お前の目的はこの国を滅ぼす事なのか？」

「違う。俺の狙いは王位を強奪したグラナドウスを倒し、正統な王位継承者であるアイリーンを王座に据える事だ。その障害になる人間は容赦なく叩き潰す。」

「つまり国そのものを壊すのが目的ではなく、あくまでも政権交代が目的なのだな？」

「ああ」

「どうしてそこまでするのだ。お前にとってそんなに大事な事か？」
「俺はな……」

竜也はコルネリオをまつすぐに見つめて話しだした。コルネリオも見つめ返す。

「今のエルブレイスは、世の中にとって害悪以外の何物でもないと思っっている。ガルフやブラッドの部族は服従を拒んだだけで皆殺しにされ、マルシアの国の住民も首都が陥落したときに虐殺された。それでも飽きたらず、他の国に対して侵略行為を繰り返している」

コルネリオは無言でうなずいた。誰がなんと言おうが、エルブレイスが周辺の国家に被害をもたらしているのは事実だ。

「国民にとつてもこれはよくない。絶えず戦争に駆り出されるんだからな。大陸一の強国でありながら、これ以上何を望むんだ。他の国を滅ぼすんじゃないかって、共存していけばいいじゃないか」

コルネリオはしばらく沈黙した後、おもむろに尋ねた。

「お前はどうしても現国王を倒すつもりか？」

「ああ」

「私を敵に回してもか？」

「そつだ」

「どつやら覚悟は本物だな」

コルネリオの意志

コルネリオは強くうなずき、竜也の肩を叩いた。その瞳には強い光が宿っている。

「もはや止める事はできないか。わかった、私も力を貸そう。いずれこの国を変えていかねばならないと思っていたしな」

途端に兵士たちが騒ぎだした。冗談ではない。ラグラスは戦死しマルシアは寝返り、この上コルネリオまで離反してしまったら誰が指揮を執るのか。

そのとき、コルネリオが彼らに呼びかけた。

「静まれ！ 私の話を聞け！」

兵士たちは騒ぐのをやめ、固唾を呑んで視線を集めている。

「私も、グラナドウスにはかねてより不満を抱いていた。まず、彼は前国王を殺害して王位に就いた。継承権を持っていないのにな。そもそも王になった事自体がおかしいのだ」

兵士たちは顔を見合わせている。確かにグラナドウスの行為には正当性がない。

コルネリオの話はさらに続く。

「その上、国民の生活を一切顧みず出兵を繰り返している。それを諫めた臣下たちをことごとく処刑してな」

兵士たちはうなずいた。今の国王が侵略行為を繰り返しているのは周知の事実だ。働き手を奪われた国民が生活に苦しんでいるのも同様である。

「要するに、グラナドウスは自分の事しか考えていないのだ。なる資格がないのに王になり、臣下や国民の事など一顧だにせず己の征服欲を満たしている。こんな人物にこれから先、国政を預けていけると思つか？」

兵士たちが深刻な表情をしながらひそひそ話し合う。確かに、コルネリオが言う事に理があるように思える。

「今回アイリーン様が拳兵されたのはいい機会だ。あの方には王位継承権がある。それに、前国王の施政を間近で見てこられたお方だ。少なくともグラナドウスのような暴政はしかないだらう」

兵士たちは、段々コルネリオ側に傾きつつあった。元々、軍神と呼ばれ信奉されている人物だ。その影響力は絶大な物がある。

「王家であるレクスタード家をないがしろにし、勝手に王位に就いたグラナドウスこそが反逆者だ。私はエルブレイスの臣民として、この国を元の姿に戻そうと思う。どうだ、お前たち。私についてきてくれるか？」

兵士の一人が進み出て言う。

「私は家族を首都に残してきました。離反した事が伝われば、彼らは反逆者の家族として処刑されるかもしれません」

「私も同じだ。だがな……」

コルネリオは兵士たちを見回して言った。

「それでもやらなければいけないときがある。今この国を正さなければ、いつまでたってもこのままだ。だが、自分の家族がどうしても大事だという者はここから去るがよからう。決して止めはしない」

兵士達の恭順

そのとき、一人の兵士が進み出た。まだ十代半ばくらいの少年だ。「俺も、この国をよりよい物にしていきたい気持ちは同じです。あなたについていきます！」

コルネリオは彼の顔を見つめながら微笑んだ。

「ありがとう。でも本当にいいのか？ お前の家族がどういう目にあつかわからないんだぞ？」

「仕方ありません」

コルネリオは目を伏せた。この少年が両親を失ってしまったらあまりにも不憫だ。

「後悔しないな？ やめるなら今のうちだぞ」

「はい。父親は、いつも俺にこう言っんです。『自分が正しいと思う道をまっすぐに進め』って。俺はその通りに生きていきたいんです」

彼の瞳に力強い光が宿っているのを見て、コルネリオはその肩を叩いた。少年から、迷いのないまっすぐな想いが伝わってくる。

「わかった、お前の力を貸してくれ。私と一緒にこの国を変えていこう」

「はい！」

他の兵士たちは、その光景を見てざわついている。すると竜也が進み出て口を開いた。

「あんたたちはどうするんだ。俺とコルネリオを敵に回すか？」

途端に周囲が静まり返った。皆、竜也とコルネリオの凄まじい強さを知っている。この二人が再び組んだ今、どんな敵だろうが粉碎するだろう。

やがて、さつきとは別の兵士が前に出て言った。

「俺は今までコルネリオ様にずっと従ってきました。正直言って、これほどすごい指揮官は見た事がありません。騎兵を擁するウエル

ズ隊を野戦で叩き潰し、策士ベルナルドの部隊を粉碎し、歴戦の猛将レオニスの率いる大軍を破り……間近でその戦いぶりを見て心が震えました。これからもついていきます。いえ、ついていかせてください！」

他の兵士たちもうなずいた。

今回、コルネリオが竜也の襲撃に対して何もできなかったのは事実だ。それを考えれば部下たちに見限られてもおかしくはない。にも関わらず、彼らは恭順の意を示してくれたのである。

コルネリオは思わず涙ぐんだ。

「私は大軍を率いながら、たった三人にしてやられた。指揮官としては完全に失格だ。それなのに、お前たちは力を貸してくれるのか」周囲の兵士たちが口々に言う。

「あれは仕方ないと思います。十万の敵兵の中にたった三人で斬り込んでくるなんて、誰も予想できませんよ。あり得ません」

「そうそう、正気の沙汰じゃないです。ラグラス様がやられたのも当然だと思いますよ」

竜也は苦笑しながら口を開いた。

「ちえっ、俺を気遣いみたいに言いやがって」

反乱軍の結集

結果として、十万のエルブレイス兵の約半数がコルネリオに従った。

残りの半分は首都アストリアへ帰っていったが、彼は止めなかった。自分の家族が大事だと思っ気持ちもよくわかる。

去っていく兵士たちを見送るコルネリオの肩を、背後から竜也が叩いて言う。

「半分残っただけでも上出来だと思っよ。あんただからこれだけの兵士が従っただ。他の人間じゃこっはいかない」

「そっか……しかし、今回去っただ者たちとは敵同士になっってしまったな。残念だ」

「仕方がないさ。気持ちを入れ替えてがんばろう」

コルネリオは竜也をまっすぐに見つめた。

「私はまだしばらく、稀代の名将を演じなければならぬようだな」

「あんたはもう既に本物の名将だよ。自分に対する兵士たちの目を見てみる」

コルネリオは部下たちを見回した。彼らはきちんと整列し、こちらに向かって熱い視線を送っている。

やがてその中の一人が口を開いた。

「ご命令を！」

竜也に促され、コルネリオは進み出た。彼は突剣を抜き、振り上げて叫ぶ。

「これより我々は首都アストリアへ向かう。先代の王を殺して王位を奪い取った反逆者を誅するのだ。そしてアイリーン様と共に、戦争のない平和な国家を造っていこうではないか！」

兵士たちから大歓声が上がった。それを竜也がコルネリオの横に並んで言う。

「頼むぜ、軍神。いよいよ最終決戦だ」

「ふつ、もう私に退く道はない。全力で戦いに望むさ。お前にも期待してるぞ」

「ああ」

竜也は、近くに倒れているラグラスに歩み寄った。敵対する結果にはなつたが、かつては上司だった男である。

「許してくれとは言わないよ。いくら謝っても許される事じゃないしな。ただ、奥さんには伝えておく。あんたは最後まで勇敢な戦士だったって」

反乱軍は次第に兵数を増やしていった。

元々アイリーンに従っていた三万人に加え、今回寝返ったエルブレイス兵五万、新たに近隣から集まった五万、アルムハウトから来たジェラール隊三万。合わせて約十六万の大軍である。

彼らはアイリーンを総大将とし、一路アストリアへと向かった。

現国王の暴政に反発する者はことの他多く、行く先々で声援を受ける。食糧や休息場所を提供する者も多く、士気は上がる一方だ。

それに対してグラナドウスは、自ら二十万の兵を率いてアストリアを進發した。

こちらの士気はさっぱり上がらない。王家の人間であるアイリーンに剣を向けるのは気が引ける。しかもその下には、剣神竜也や軍神コルネリオがいるのだ。いくら四万の兵力差があっても、まるで勝てる気がしない。

最終決戦

国王グラナドウス率いるエルブレイス軍二十万とアイリーン率いる反乱軍十六万は、大平原で対峙した。

空は晴れ渡っており雲一つない。周囲には草原があるだけで、視界を遮る物も見当たらない。特に利用できるような地形もなく、大軍と大軍との真つ向勝負だ。

グラナドウス軍の内訳は歩兵十五万、騎兵五万。アイリーン軍の内訳は彼女が率いる歩兵七万、竜也が率いる歩兵三万、ジェラルが率いる歩兵三万、コルネリオが率いる騎兵三万である。

双方とも武器は剣、槍、クロスボウ。防御は鉄製の盾と革の鎧だ。やがて両軍が激突した。互いが放った矢が空中ですれ違い、兵士たちの構えた盾にぶつかる。しばらくそれが続いた後、グラナドウス軍は槍を構えて突進してきた。

迎え撃ったのはアイリーンの部隊だ。両軍の間に喚声と血飛沫が上がる。数で勝る国王軍は徐々に反乱軍を追い詰めていく。

やがて、グラナドウスは騎馬隊を突撃させた。彼らは槍を構えて一斉に襲いかかり、アイリーンの歩兵隊を蹂躪する。あわや潰走するかと思われたが、ジェラルの部隊が踏み止まってこれを防いだ。「慌てるな！ 奴らの馬を狙って撃て！」

彼の部隊はクロスボウを連射し、次々と敵の騎兵を落馬させた。そこにアイリーン隊の歩兵が襲いかかり、寄つてたかつて突き殺す。それでも全体的に見れば、依然として反乱軍が押されている。主力である竜也隊が後方にいる上に、コルネリオの騎馬隊も今のところ機能していないからだ。

もつとも、コルネリオ隊は既に動いていた。エルブレイス軍から距離をとりつつその横を駆け抜け、後方にいるグラナドウスを目標掛けて襲いかかったのである。

この一撃は国王軍を大きく揺るがした。エルブレイスの兵士たち

の間で最も畏怖されているのはコルネリオだ。その騎馬隊が脇目もふらずに突撃してきたのを見て、グラナドウス軍の兵士たちは狼狽した。

「来たぞ、軍神だ！」

「うわああ、戦いたくねえ！」

「とにかく、国王をお守りしろ！」

そのとき、グラナドウス本人が姿を現した。歳は二十五。金色の長髪に碧い瞳、白い肌をした偉丈夫だ。着ているのは漆黒の服と真紅のマント、武器は左右二本の直剣である。

彼は剣を引き抜いて叫んだ。

「うるたえるな、落ち着いてクロスボウで討ち取れ！」

エルブレイス兵が次々と矢を発射し、騎馬隊の兵士たちは全身に矢を受けて落馬していく。それでもコルネリオはお構いなしに突撃した。

「ひるむな！ 狙いはグラナドウスただ一人だ！」

三万からなる騎馬隊の突進力は凄まじいものがあり、国王周辺の部隊は押され気味になった。このとき参戦したのが竜也率いる最強部隊である。

「みんな、行くぞ！ 邪魔する奴は一人残らず蹴散らせ！」

竜也が先頭に立ち、国王軍を二つに割りながら道を切り開いている。その剣技は冴えに冴え、対峙した敵兵は一分と持たずに肉塊と化する。

ガルフの大金づちがエルブレイス兵を薙ぎ倒し、ブラッドの三又の槍やグスタフの短槍が次々と槍玉に上げる。マルシアとアントラの目にも留まらぬ剣撃が斬り裂く。

この部隊の勢いは止まらない。コルネリオの突撃で泡を食ったエルブレイス兵たちは、駄目押しの一撃で顔面蒼白になった。なんとか包囲して殲滅しようとするのだが、相手が強すぎて話にならない。

竜也が周囲の敵を薙ぎ倒しながら怒鳴る。

「邪魔だ、どけ！ 死にたくなけりゃ道を空ける！」

彼は右にいる敵兵の首をはね飛ばし、正面の敵兵の顔面を突き、左にいる敵兵の足を薙ぎ払った。さらに、突進してきた兵の胸を真っ二つに斬り裂き、続けて一人を逆袈裟に斬り倒し、もう一人を真っ向から叩き斬る。

その凄まじい剣技を目の当たりにして、エルブレイス兵たちは悲鳴を上げた。

「ひ、ひいつ！」

「やっぱり、人間じゃないぞ！」

「これだから敵にすたくなかったんだよ！」

次の瞬間、彼らの首は胸から離れている。

竜也の部隊は手向かう敵をことごとく叩き潰しながら前進し、遂にグラナドウスを補足した。

国王は二本の剣を振りかざし、竜也に向かって微笑んだ。

「恐ろしい男がいたものだ。兵力差などなんの妨げにもならなかったな」

「能書きはいいから、さっさとかかってこいよ。あんたさえ倒れりや戦争は終わるんだ」

「ふっ、俺を倒せると思っているのか。身の程知らずの小僧が！」
グラナドウスが一瞬で距離を詰め、真っ向から斬り下ろす。相手がこれを受け止めた瞬間、さらに横薙ぎの一撃を放つ。

竜也は後退してかわし、ついでに胸を薙ぎ払った。だが綺麗にかわされている。

「ふん、力づくで国王になるだけの事はあるな」

「当たり前だ、なめるな。貴様など俺の敵ではないわ！」

国王は素早く踏み込み、目にも留まらぬ速さで突きかかった。それがかわされると、さらに連続で突きを放つ。

竜也はそれをさばきつたものの、顔や手足に切り傷を負った。命に関わるような物ではないが、あちこちから血が流れている。

グラナドウスがそれを見て、薄笑いを浮かべながら言う。

「どうだ、実力の違いを思い知ったか。俺に逆らうからこんな目に

あつのだ。今さら後悔しても遅いぞ」

「後悔なんかしてないよ」

「何？」

「あなたの動きはもう見切った。今度はこっちの番だ」

決戦の終焉

グラナドウスは竜也の言葉を聞いて不敵に笑った。

「虚勢を張るか、見苦しい事この上ないな」

「そう思つのは結構だけど、別に虚勢じゃないぞ」

竜也は素早く右手を一閃させた。その剣が国王の顔をかすめ、血が流れ出る。

「うっ……」

「あんたはマルシアの国で大虐殺をしたらしいな。女や子どもまで容赦なく殺したそうじゃないか。人の心がないのか？」

「戦争で人を殺すのは当たり前だ。貴様もそうしてきただろうが！」

「お互い兵士として戦場で相まみえたなら仕方がないさ。やらなきゃやられるんだからな。でも、抵抗する力のない女性や子どもまで殺すのは人としておかしいだろう」

「別に何もおかしくない。私に逆らった者は皆殺した。力のある者が上に行くのは世の常。力のない者は皆死ねばいいのだ！」

「じゃあ、あんたは今から死ななきゃいけないな。俺より力がないんだから」

「ほざけ！」

グラナドウスは二本の剣を振りかざして突進した。竜也を頭上から斬り下ろし、首を狙って突き、胴を狙って薙ぎ払う。さらに袈裟掛けに斬りつけ、間髪入れず逆袈裟に斬りつけたがかすりもしない。

「くっ、この小僧……」

歯噛みしている国王に向かって、竜也が静かに言う。

「あんたが虐殺した人間たちの痛みと苦しみを、十分の一でも味わつてからあの世へ逝け」

「ええい、黙れ下郎が！」

グラナドウスは瞬時に踏み込み、渾身の力で突きを放った。しか

しこれも当たらない。

「貴様ごときに、この俺が！」

彼は上段に振りかぶり、真っ向から斬り下ろした。竜也はこれに構わず、一瞬でその横を払い抜けている。

「がっ……」

国王の上半身がぐらりと揺らぎ、やがて下半身から離れて崩れ落ちた。竜也は振り返る事もなく言う。

「俺もいつかはそっちに逝く。文句があるならそのときに言いな」
さらに彼は、剣を振り上げて叫んだ。

「逆賊グラナドウスは、この俺が討ち取った！ 全員、戦いをやめろ！」

エルブレイス兵たちは武器を投げ出して降伏した。主力部隊が竜也たちによって蹴散らされ、国王まで倒された今、とても勝ち目はない。

マルシアが目を潤ませながら近寄ってくる。

「ありがとう……竜也、本当にありがとう。これで私の国の人たちも浮かばれるよ」

「そうだな……って、え？」

彼は自分の腕を見て仰天した。それは段々と透けてきている。

「俺は……この世界から消えるのか？ なんで今？」

異世界からの帰還

段々と消えていく竜也の周りに、仲間が集まってくる。最初に口を開いたのはアイリーンだ。

「嘘でしょ……なんで！　これからつてときに！」

「仕方ないよ、もう時間だ。そばにいてあげられなくてごめん」

「うっ……」

泣き崩れる彼女の横でアイトラが叫ぶ。

「竜也、忘れないで。エルブレイスに、あなたを愛したアイトラっ

て女の子がいたって事を！」

「絶対に忘れない、約束する。元気でな」

ガルフとブラッドも肩を落としている。

「俺たちは……少しでもお前の恩に報いる事ができたか？」

「とつくに報いてるよ、ありがとう。二人の事は忘れない」

その後ろでグスタフがわめいている。

「冗談だろ、いずれお前ともう一勝負するつもりだったのに！」

「悪いな、応じる事ができなくて。これからはアイリーンに力を貸してやってくれ」

「馬鹿野郎、行くな！　行くんじゃねえよ！」

コルネリオも進み出て口を開く。

「こんな事になるとは残念だ。お前がどこへ行くのか知らんが、戻れるなら戻ってこいよ」

「たぶん無理だ。それよりコルネリオ……」

「ん？」

「アイリーンを頼む。これからが正念場だからな」

軍神と呼ばれた男はにつこりと微笑んだ。

「任せておけ。彼女を助け、必ず平和な世界を実現してやる」

コルネリオは右手を差し出したが、竜也の右手がすりぬけてしまい握手ができなかった。

最後に進み出たのがマルシアだ。

「あなたの事は一生忘れない。ありがとう」

「これからは復讐以外の事に生きる。お前なら幸せな人生を勝ち取る事ができるから」

竜也の体がいよいよ透き通っていく。

「みんな、今までありがとう。あんたたちとすごした日々は忘れない。これからも元気……」

まだ言い終わらないうちに、その体はエルブレイスから消滅した。

気がつくとき、竜也は自分の部屋のベッドに寝ていた。

今までの出来事が夢のように思える。しかし、体を見ると至る所に傷跡が残っていた。黒豹や敵の兵士、將軍につけられた物だ。彼はのろのろと起き上がり、がっくりと肩を落とした。

「俺だけのけ者かよ……」

おそらく、もうアイリーンたちには会えないだろう。あの世界がどこにあるのかさっぱりわからない。それどころか、あれは過去か未来の世界だったかもしれないのだ。

「もし過去だったとしたら、今現在アイリーンはこの世に存在しないって事になるよな」

自分の人生は、せいぜいあと数十年だ。その間に彼女に巡り逢える可能性など普通に考えればないに等しい。

「あーあ……」

自分はどうしてエルブレイスに行ったのだろうと考えた所、彼女の魂に呼ばれたのではないかという結論が出た。前世の因縁が二人を結び付け、あの国へといざなったのだ。

しかし、彼はその結論を即座に否定した。

「馬鹿馬鹿しい。第一、それならなんで戻ってきちまうんだ。結局、全部偶然だったって事だろ」

竜也は机の上にある携帯を見た。日付は六月二十一日、火曜日。

時刻は午前六時半。

「やべ、学校行かないと」

彼は急いで準備を済ませ、制服姿で家を出た。

思い出に浸るのは後だ。今は日本での生活がある。

最寄りの駅へと続く歩道を歩いていくと、向こうから二人の女子高生が歩いてきた。何やらきやあきやあと話している。

「ねえねえ、なんで断ったの？ 結構イケメンだったのにさー」

「えー、あまり好みじゃなかったから……」

「じゃあどんな人が好みなの？」

「え、えつと……よくわかんない」

「もう、愛里！ そんなんじゃ、いつまでたつても彼氏できないよ！」

アイリって名前か……アイリーンとよく似てるな。竜也はそんな事を考えながらちらつと彼女の顔を見た。

「……え？」

それ以上言葉が出てこない。目の前にいたのはアイリーンだった。ただ、髪の色は黒く体は肌色である。

一方、愛里も立ち止まった。その目を大きく見開いている。

「あつ……」

二人はしばらくの間、無言で見つめ合っていた。

その日の夜、竜也は自分の部屋で愛里に電話を試してみた。

彼女は他の高校に通っていて、今は二年生だそうだ。エルブレイスで六十八年の生涯を閉じた後、日本に転生したらしい。

竜也の携帯から彼女の声が聞こえてくる。

「また会えるかもしれないと思ってたけど……まさか、こんな近くにいるなんてね」

「そうだな、びっくりだよ」

「あの時は本当にありがとう」

「いやいや」

「あと……」

「ん？」

「これからもよろしくね」

「ああ、こっちこそ」

実は、転生したマルシアとアニトラも近くにいるんだけど。愛里はそう言いかけてやめた。彼女たちにはれたら大変な事になりそうなのがするからだ。

竜也は話し続けながら心に誓った。今度こそ彼女と一緒に過ごし、最後までその力になってみせる。

彼の体に、かつてないほどの力がみなぎっていた。

《剣の統べる国・完》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068q/>

剣の統べる国

2011年7月4日14時54分発行